

---

# 転生？外史？だから何！？

わがみち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生？外史？だから何！？

### 【Nコード】

N4034M

### 【作者名】

わがみち

### 【あらすじ】

姓は李 名は震 字は文智

彼は俗に言う転生者

そんな彼は何故か恋姫無双の世界に転生し、恋をしてしまう。

この物語はそんな彼が愛しい人を護るため、影の薄い主人の影から更に薄くなり護る物語である！

恋姫十無双の二次創作作品です。

作者が未熟なため、アンチや原作レイプやキャラ崩壊、原作破壊等

々、意図せずやってしまっかもしれません。

また、作者の妄想爆発自己満足の為の小説に……なってるのか？

この様に作者自身が何故書いているのか理解できていません。

それでも良いと言う方は、生暖かい目で見てください。

受け入れられないと言う方は、内容を読まず今すぐお戻りになられる事を推奨します。

尚、更新は不定期です。

## 第一話 黄泉帰り？（前書き）

二次創作物を書くのは初めてです。

緊張します。

## 第一話 黄泉帰り？

知らない天井だ

いや、一応言ってみただけです。

とりあえず周りを見ると……なんつうか、中華風？

んで、俺は柔らかな布にくるまれている。

うん、赤ん坊だね。

とりあえず、恒例のアレ行ってみよう

「おんぎやあああああああ（なんでさあああああ！）」

説明が難しいけど、こうなった経緯は、俺っち死んじゃったからなんよね〜

なんで死んだかったのは、その……処刑されたから。

うん、なんでさと言うフリに処刑とくれば、皆さん某白髪のお兄さん連想するよね。

でもあそこまで格好良くないんだよね〜

何せヤの字に勘違いされて、ラチられて、更に勘違いされて、拳銃でバン！ だからね〜

あ〜死んじゃったな〜と黒い空間を漂っていたら、

《力が欲しいか》

はい、ジャバ ック来ましたね。

てか、何故にジャ ウオック？

こういう時ってさ、神様が出てきて、メンゴメンゴマチガエチツタとか言っつて転生とか、憑依とか、別世界で生き返らしたりとかだよ  
ね！？

それが何故に ヤバウオック！？

しかも、声もちゃんと某公国軍仮面大佐だし……

《力が欲しいか》

力かぁ……でも死んじまったからな

《生き返れるぞ》

は？まじで？

《マジだ》

つまり、力をくれた上でさらに生き返らせてもらえるん？

《そつだ》

うおっしやあああああああああ！

まじでヤッター！

(某 シ・オカ風)

よかった〜死んじゃってツイてないなって思ったら、イキカエレル  
つて！ 良かった！ 良かったよ〜！

《で？ 力が欲しいか》

はい！ ホシイデス！

《では、どんな力が欲しい？》

え？ 選べるの？



《選ぶぞ》

いくつ？

《10個》

10個か……多いな。

でも、俺ってあまりチート好きじゃないしな

ん

《早くしろ。我も余り暇ではないのだ。》

はいはい、わかったよ。じゃあ、ジャバウォック繋がりで、クイン・オブ・ハートと……

こうして、俺は新たな命を貰ったのだが……

「ふんぎやあああああああああああああああああああああ（こねは生き返りじゃなく転生って言わないか!?!）」

第二話 いや、錬鉄の英雄目指してる訳じゃありません。(前書き)

うは、こう言うのかくのって疲れるしはずい……………

タノシイケドネ!

## 第二話 いや、錬鉄の英雄目指してる訳じゃありません。

はい、イキナリですが俺5歳になりました。

過程すつ飛ばしましたが、赤ん坊の成長ストーリーなんぞ、親でない限り面白くも何とも無いですからね。

ついですが、俺の名前が判明しました。

姓は李 名は震 字は文智

はい、マジ昔の中国ですね。

しかもですよ、驚いたことになんとこの世界、真名が存在するのです！

古代中国、真名、しかも時代的に三国志の時代。

はい、俺もコレからは一つしか連想できません。

十中八九 恋姫無双な世界ですね。

しかし、恋姫か……PS2のはやった事あるけど、PC版のはやった事無いんだよね

アニメも見てないし。(作者も同じく)

しかもですね、ご近所に公孫贖って女の子が居るんですよ。

………決まりですね。

うわぁ………これからどうしようかな………

- 1、チートパワー鍛えて名のある将になり原作介入
  - 2、諸国旅して少し様子見
  - 3、独自勢力作り上げて原作破壊
  - 4、農民として静かに暮らす
- うは、4とかメツチャ魅力的……
- どないしよっかな

「文智、遊ば！」

おや？ あの声は公孫贄ちゃんですね。

はいはい、いまいきますよ

SIDE 李蒿

私は 姓は李 名は蒿 字は文聴という。

幽州にて警備隊に所属する女だ。

突然だが私には息子が1人いる。

夫は息子が産まれる前に賊との戦いで、流れ矢に当たり戦死してしまつた。

だから、忘れ形見である息子の教育には特に力を入れてきた。

そして、この息子だが……また可愛いのだ！

「ははうえ〜」と私の後ろをぽてぽてと付いてきた時など産んで良かった！ と心から思ったものだ。

あと、この子は頭が良いのだ！

齡一歳で私を母と呼び、二歳で言葉を解した。

そして、三歳で読み書きを覚え、五歳で古今の本を読み漁っていた。

正しく神童！

嗚呼！ 震よ！ お前はなんて可愛いのだ！

親バカ？ 上等！ 子を愛せなく、なんの親か！

そして、武人である夫と私の子なのだ。

武の才能もすごいに違いない！

だから、私は試してみることにした。

「震よ、これから武の稽古をするぞ。」

私は息子を真名ではなく名で呼ぶ。

なぜかって？ それが教育方針だからさ。

それに我が子は素直だから「はい！ 母上！」と従ってくれる。  
驚くことに、我が儘も言ったことがない。

主の娘である、公孫贇なんか我儘放題だというのにだ！

嗚呼！ なんと我が子は良い子なのだろうか！思わず抱きしめたく  
なるが、これより稽古なので自重する。

「まずは、素振だ。木を私と同じ様に振りなさい。では始め！」

「はい！」と可愛い声を出して素振りを始める我が子。

嗚呼！なんと愛らしい！記憶せよ！脳裏に深く焼き付けるのだ李嵩  
！今このしゅんK……ん？ おや？

「震よ、もう少ししゅっくりやっつみてくれ」

「？ はい、母上」

………なんと………

いまはつきりとした。

我が子 震は………武の才能がない。

まだ五歳だから断言は早いのではと思うが、百戦錬磨の武人である  
私には、はつきりと我が子の非才が解ってしまった。

良くて凡百。

このまま武を伸ばしても、高みには行けない………なら知の方を伸  
ばすか。

だが、武もまるつきり伸ばさないので無く、自衛は出来るまで伸ばすか。

この子自身の選択肢を広げる事はしても、狭める事はしたくないな。

よし！

「震よ、明日から武の稽古を日課にするぞ！ いいな！」

「はい！」



### 第三話 恋ばなは突然に

お久しぶりに御座います。

李文智にございます。

今年で俺も13歳になりました。

今は母上と剣の稽古の最中です。

まあ、無駄なのですがね。

転生する前にジャバウォクに、ある才能以外は才能無しにしてと頼みましたから。

なので、俺に剣の才能は一才ござーせん。

まあ、目は『クイーン・オブ・ハート』が有りますので、とても良いですが……

まあ、エミ屋さんみたいになるには時間が足りませんし、俺は俺らしく長所を伸ばしたいです。

つとと……さすが母上。一撃が重いです。

何とか目の良さで誤魔化しつつ凌いでますが、そろそろ伸びしろキツイです。

「ふむ……ここまでか。震よ、よく聞け。

お前には武の才能がない。

これ以上鍛えても、さほど強くはなれんだろう。」

まあそうですね。

その様に設定してますから。

「どつやら武に関しては、私から教えてやれることは無いようだ。  
……そう言えば、もう大丈夫か？」

何が？というたすね……じつは先日、産まれて初めて人を殺して  
しまいました。

母上の警羅の仕事を手伝っていた時に賊に襲われまして、その時に  
賊を殺してしまったのです。

いやあ……平和の国からやってきた俺には、ショック強すぎまし  
た。

ずくと震えて、嗚咽してました。

え？今は何とも無いのかって？

はい、立ち直りました。

しかもですね、自分を立ち直らせてくれたのがですね、なんと公孫  
贗ちゃんなんですよ！

当時は振り返りますと、

「何を震えることがある！ 文智はこの町を賊から護ったんだぞ！

それはとつても誇って良いことなんだぞ！」

……はい、なんとも普通の「普通って言うな！」励ましですね。

ですが、そんな普通の「だから普通って言うなっば！」励ましも、  
何時間何回もされると、効いてくるんですよね〜

そうなんです。公孫贗ちゃんてば、落ち込んでいる俺の側で根気強

く励ましてくれたんですよ。

いや、幼馴染みとは言え、本当に有りがたいですね。

だからね、誓っちゃったんですよ。

この娘を護ろうって。

はあ………まさか、これからどうするか、こんな事で決まるとはね。

なので、明日からお城で文官として、仕官することになりました。

とは言っても公孫贖ちゃんはまだ遼西の書佐ですからね。

俺が勝手に仕えるような形になりましたが……

まあ、これも惚れた弱味と言う奴ですかね。

そうそう、明後日から公孫贖ちゃんと賊の討伐に出掛けるのですよ。

ちゃんと準備しなきゃ。

#### 第四話 そう言えば、一刀どしよじ……

まいど皆様こんにちは。

歌って踊れる文官の

李文智にございます。

月日が流れるのも早いもので、小生も齡18になりました。

公孫贇ちゃんも無事遼西の群令になり、出世街道を地味に「地味って言うな！」進んでおります。

小生も、公孫贇ちゃんの軍師的なポジションで、ひっそりと文官ライフを送っております。

そうそう、公孫贇ちゃんに新しいお友達を紹介してもらいました。

皆さんビックリの大物でしたよ。

そう、劉備玄德さんこと、桃香ちゃんです。いや〜びっくりしましたよ。

まさか、初対面の小生に対して真名を許すとは……………大物ってよりは、天然ですね。

ん？ 一人称が俺から小生になってるて？

ああ、俺だとなんかこの口調で書きづらいから作者が変えたようです。

さあ、メタ発言は此処までにして、今日もお仕事頑張りますか。

.....

ふむ…作業が地味すぎて描写しようにも、やりようがありませんね

.....

まあ、作者の力量不足と言うこともありますが。

「文智〱いるかー？」

おやおや、我が主 公孫贇ちゃんではないですか。

何かご用ですか？

「西の村で、賊がでて被害が出てるらしい。だから、討伐に行くから準備してくれ。」

わかりました。

いつ出発しますか？

「明日か明後日。二千位、兵連れていくからそのつもりでな。」

はいはい、それ位ならすぐに用意できますよ。

まあ、兵達の気構えも考えて、明日にしておきましょう。

「わかった。明日な、じゃよろしく。」

は〜い。

さて、兵糧はこないだの買いだめが有つたので大丈夫そうですね。ただが賊の討伐と言えど、不測の事態は恐いですからね。兵站は余裕を持たせたいですね。

等々、色々なことをやっていたら、夜が明けてしまいました。

ハツハツハ！ 徹夜で御座います。嗚呼……眠い。

「おはよー文智……てどうしたのその隅！」

オハヨウゴザイマス。

いえね、兵站の効率化図ってたら、夜が明けてしまいました……

「て、徹夜！？ 討伐どうするんだ、留守番するのか？」

いえいえ、当然行きますよ。

兵が準備完了するまで、一刻ほど掛かりますので、その間に一眠りしますよ。

「一刻つて……寝不足で戦死なんてやめてくれよ。」

ご心配無く。ささ、殿も準備があるでしょう。

まずは、ご自分の事をなさってください。

「う……わかったよ。けど、お前は休めよ！」

はいはい、分かっていますよ。

さて、一眠りしますかね〜

二十四時間闘えますか〜

……………無理ですね。

では、オヤスミナサイ

S I D E 公孫賛

幼馴染み李震文智は一言で言うと、変な奴だ。

幼馴染みだつて理由で当時書佐だった自分に臣下の礼をとつたり、

「夢中になつちやつた」

とか言つて私の机の上にあつた大量の書類を処理したり、私が戦場にでると文官なのに何故か付いてきたり……………

優秀には違いないのだが、はっきり言つて変な奴だ。

つかさ、私の事地味とか普通とか言つてさ、自分の方がもっと地味じゃないのさ！

さっきだって、地味な文官の作業を徹夜してフラフラだったし……

ホント……変な奴。

今だって隣でウツラウツラと馬上で船を漕いでいる。

「文智、寝るな起きろ。」

「おおっ！」

「たく……馬上で寝るくらいなら、帰って休めばいいだろう。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。今起きましたから。」

はあ……コイツは何を言っても、こうして戦場についてくる。

まったく、何がしたいんだろうな……コイツ

S I D D O U T

さて、件村に着きましたが、今まさに賊に襲われている最中でした。これはいけません！

殿！

「わかってる！ 全軍村に集る蠅共を蹴散らし、村人を救うのだ！ 全軍突撃！」

先ずは敵の注意を牽きます。



鋒矢の陣にて正面の敵を分断してください！

小生の一声に兵達が陣形を変え突撃していく。

うん、いい連携ですね。重点的に鍛えただけあります。

を、分断しましたね。

ではそのまま雁行の様に壁を作って、敵の半分を包囲しちゃってください。

「賊は八百人程度か……勝ったな。」

ですね。

む？

勝利を確信した時に、村の中から侵入した賊が、空を飛んでいくのが見えました。

また不思議な現象ですね。

しかし、小生の類い稀なる視力にて、何が起きているのか視認できました。

なんとまあ、一人の女の子が、槍を使って賊を次々と吹き飛ばしていくではないですか。

その朱槍が振るわれるたびに、賊が貫かれ、吹っ飛んでいく。

ああ……見たことありますね。

あの娘は趙雲さんですね。

改めて、恋姫夢想の世界にに來たのだなと、感じてしまいました。

おや、どうやら此方も粗方殲滅出來たようですね。

公孫贇も彼女の武に気付いた様です。

さあ、これから本格的に三国志の幕が上がりますよ。

小生は愛しい人（白連）を護れますかねえ……

**第五話 類友？タダ友？（前書き）**

タイトルは全てテキスト&ノリです

く！原作キャラ（主にPC版）の口調がわからん！  
やはり携帯執筆ではダメなのか！？

## 第五話 類友？タダ友？

皆様おはにちばんわ〜

子もビツクリ新人潰しの李文智で御座います。

先日、賊に襲われていた村を救出したら、ソコにはなんと！ 歴史的にも恋姫的にも有名なメン……………ゲフンゲフン

趙子龍さん（他2名）がいらっしやりました。

公孫贛ちゃんは早速その武に目をつけ、将にスカウトしてました。

そうそう、只でさえ遼西には兵を率いる将が不足しているのですから、こつこつで見つけないといけませんね。

まあ、三顧の礼とはいきませんでした。趙子龍さんは将になることを了承してくださいました。

ですが、客将としてのようですが……………

どうやらお金が無かったようです。

何はともあれ、これで幽州の治安は更に向上するでしょう。

さて、細かい所は違いますが、ここまでは大筋原作通りですね。

袁紹さんが攻めてくるまでに、どれだけの事が出来そうですかね。

はあ……………やる事いっぱいですね〜

「そうですね〜」

おやおや、誰かと思えば程立さんではないですか。

どうしました？

「いい天気でしたので、散歩したらう忙しいそうに仕事しているお兄さんが見えたので、お邪魔してみました」

「そうですか、生憎おもてなできませんが、ゆっくりしていただいて下さいね」

「はい。にしても、いい天気ですね」

「お日さまポカポカですね」

「気持ち良いですね」

「ですね」

「ぐ」

ぐ

.....

「ふむ。文官殿、仕事中に寝ててよいのですかな？」

「おめいおめい」

「おお……なんと同調率！」

いやはや、寝る気はなかったのに寝てしまいました。  
恐るべし誘い眠り。

子龍殿、起こしてくれてありがとうございます。

「どういたしまして。」

……ときに文官殿。」

何ですか子龍殿。

「この城に来る前に何処かでお会いしましたか？」

と言つと？

「この城で挨拶された時に、どうにも以前お会いした気がして……」

そりゃそうです。

小生は貴女方が戦っていた村に居ましたからね。

ですが、貴女方には顔を見せずに、裏方で働いていましたから。

只でさえ公孫賛ちゃんは影が薄いのですから、少しでも目立っていた  
ただかないとね。

だから小生は趙雲さんに気のせいですよと答えるのでした。

ふっふっふ……納得いかない顔ですね。

ですが、小生の名前を思い出せない時点で、貴女は小生の術中にはまっていますよ〜

さしあたり、一番警戒しないといけないのは、隣で寝ているこの娘なんですけどね〜

「文智〜居るか？」

おや、噂をすれば曹操ならぬ公孫贛

「これは伯珪殿」

「おー趙雲。お前も居たのか。こりゃ好都合。」

好都合と言うことは、出陣ですか？

「うん。また近隣で賊が暴れているらしい。

最近は賊の人数も増えてきているらしい。

念のため三千は兵を連れていくから、用意を頼めるか？」

はい解りました。明後日の朝には用意できますので……

「ん。わかった。そう言うわけで、趙雲も宜しくな。」

「了解した。風、いつまで寝ている。行くぞ」

「おおっ」

さあ……忙しい忙しい。

……ふむ、皆さん出ていったようですね。

ここ最近の賊の増加率は異常です。

小生は趙雲さん達が来てからは、前線には出ていませんので分かりませんが、おそらく黄巾党……  
数え役満 姉妹が出てきたようですね。

またまた時代は加速しそうですね。

これは急がないといけませんか。



## 第六話 アンドレー号泣

事件です！

某りポーター風に冒頭をやってみましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。

松 吃驚な地味顔の

李文智にございます。

さて、冒頭にもありましたが、事件ですよ！

なんと小生に部下ができました。しかも二人！

事の始まりは、母上と実家で夕食を食べているときでした。

「震、もう白蓮とはやったのか？」

ぶじは！

いきなり何言い出しやがりますか！

「だって、お前が白蓮の側で使えてどれくらいよ。」

もう8年ですね。

ていうか、何を勘違いしてやがりますか、この母親。

小生と殿はそんな関係じゃありません！

そも、真名も交換してないんですよ。「なにい！ じゃあ、お前ら8年も側に居て、まだよそよそしくしてるのか！？ 何やってんだお前は……もつと……こう……ガバーっ……」

これでも文官なのですから忙しいのです。

全く、それに今や公孫贄ちゃんは幽州の大守なんですよ？忙しいに決まっているではないですか。

そうなのです。

なんと幽州の大守になってしまったのです。

その過程は……まあ、地味ですから省略「なんで！？（涙）」します。

おや？いま公孫贄が居たような………気のせいですかね？

まあ、何度も言うのですが、とにかく忙しいのです。

小生は書類仕事は本分ですので、とっとと終わらせてこうして夕食にありつけていますが、今頃公孫贄ちゃんは職務机に突っ伏しながら泣いていることでしょう。

「たく…孫の顔は何時になるやら………それに白蓮も白蓮だ！ コイツの気持ちなんて一目瞭然だろうに………いつその事食事に媚薬でも………」

母上、何が余計な事したら、二度と一緒に食事してあげませんかからね。

「そんな〜！ それだけは！」

貴女もいい加減子離れしたらどうです。

「無理！ ……あ、そうだ。震、お前部下をもて。」

は？

「そうすれば、お前にも時間が出来て、白連と一緒に居られるだろう。」

こうして、母の紹介のもと、小生は部下をもったのでした。

「姓は李 名は賢 字は毛武 真名は銀と申します。よろしく願ひいたします。」

そう言つて自己紹介したのは、短い黒髪を七三に分けた、凛々しい女の子でした。

母上曰く「部隊指揮に光るものがある。その他の能力もそこそこ使える」

との評価でした。

同じ李一族の娘のようです。

そしてもう一人が……

「姓は可 名は令 字は尽舞 真名は安土麗だ。宜しく頼む。」

ゴツツイです。

中華版アーノド・シュワツネガーという感じでした。

てか、真名が安土麗って……

母上曰く、「コイツの力は凄いで。反面脳筋だからな。上手く手綱握れよ。」

だそうだ……

まあ、何とかなるでしょう。

二人には兵達の調練をお願いして、小生は書類仕事に没頭するの  
でした。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ  
カリカリカリカリカリ

……上の擬音は何でしょうか……小生は筆で仕事をしているの  
で、あんな音は立たないはずなんです……

まあ、とりあえず仕事終わりました。

おお……まだお昼過ぎですよ。

練兵減らすだけで、小生の仕事量はえらい違いですよ。

ふむ……途端に暇に成ってしまいました。

仕方ないですね、公孫贛ちゃんの仕事を手伝ってきませんか。

どれどれ……あらら……力尽きて机に突っ伏してますね。

公孫贛ちゃん、手伝いに来たよ。

「ぶ、文智！？お前仕事はどうした！」

新しい部下二人に練兵任せたら、さっき全部終わっちゃった。

「ええ〜！ 終わったあ？ 嘘だあ〜！」

本当だよ。

ほら、公孫贛ちゃんの確認が必要な書類だけ回すから、ガンバレ。

「おお！ 助かった。」

ふふ……あれ？そう言えば、最近趙雲さん達見ないね。

「ああ、あいつ等なら出奔したぞ。」

は？

「なんか、お金も貯まったし、真の英雄を求め、旅に出るってさ。」

……………それでキミはソレを黙って見送ったの？

「いや、ちゃんと土産も持たせたぞ。」

そう言う問題じゃないボケー！

嗚呼……………公孫贛ちゃんのおバカ……………

## 第七話 種馬降臨（前書き）

タイトル通です。

作者はマジで頭が悪いので、誤字、誤表記があります。

もし気になりましたら、教えていただけると有りがたいです。

## 第七話 種馬降臨

たゞけやゝさおだけゝ  
皆さんこんぱっぱゝ

物干し竿を荷車で売っている李文智でございます。

え？なんで物干し竿を売っているのかって？

それは洛陽に居るからですよゝ

え？なんでそんな所に居るのかって？

それはですねゝ此処に今曹操さんが居るんですよゝ

まあ、それだけじゃこんな所来ないんですけどねゝ。

まあ、ちよつと無視できない情報を耳に入れてましてね。

何でも空から流星が落ちたって言うじゃないですかゝ

まさかつて！ って思いました。

けど、何でも曹操さんの所に天からの御使いが来たって言うじゃないですか。

はい、まず間違いなく我等が種馬こと北郷一刀君かと思えます。

んで、噂の確認のため此処に居るわけですねゝ

まあ、彼ならまだ自分の置かれた立場を理解せずに、物珍しさから



彷徨き回っているでしょうね〜

てなわけで、た〜けや〜さおだけ〜  
お姉さん、物干し竿は要りませんか？  
南蛮から取りよせた上質の竹だよ〜  
強いししなやかだよ〜  
たくさん干せるし乾くのも早いよ〜

お姉さん美人だから半額にしちゃうよ〜

「あら、嬉しいじゃない。じゃあ一本貰おうかしら。」  
まいど〜

いや〜これは良いですね〜  
情報は集まるし、地図との相違も測れるし、お小遣……………ゲフンゲ  
フン  
失礼、活動資金も手に入り、一石二鳥です。

おお、その漢女さんもお一つ如何ですか？お安くしますよ〜

「あるうらあ〜それじゃ一ついただこうかしらあ〜」  
まいど〜

いや〜ウハウハでんな〜

……………にしても、一刀と会えないな〜

やっぱり陳留まで行かなくちゃ駄目かな……………

ん？ あの光輝くオデコはもしや……

おおっ！

我らが愛すべき巨乳夏侯おほかさん惇さんではないですか！

ふむ……これは好機かな？

どれ、近づくとしますか。

これはこれは、もしや夏侯元讓様ではないですか？

「ん？ 誰だお前」

小生は旅の商人でございます。

お噂は予々……私のような居を持たぬ流れの者にも届いております。  
いやはや、一騎当千と謳われる夏侯元讓様にお会いできるとは……  
光栄の極みでございます！

「そ、そうか？ なははは……（ちょっと照れるな）」

貴女様のような武將を召し抱えるとは、曹操様はさぞかし、お鼻が  
高こう御座いましょう。

「そ、そうか！」

ええ、また貴女様のような方が仕えていらっしゃるのです。  
曹操様は嘸や器の大きい偉大な方なんでしょう。

「そつだ！華琳様は正に霸王足るお方！  
華琳様以上の人間など居るはずがない！」

ええ！正にそつでしよう！

「お前、解つてるな！」

いえいえ、夏侯惇將軍には敵いませぬ。

「お前氣に入つた！ 名は何という？」

ふっふっふ……やはりこの人は自分をヨイシヨされるのは、余り効  
きませんが、曹操さんをヨイシヨするのは効果てきめんですね。

小生は姓を趙 名を火  
字は繚原と申します。

はい偽名です。

本名だと、潜入した意味がありませんので。

「そつか！ 繚原は華琳様に仕える氣はないか？ 今なら私が直接  
華琳様にとりなしてやるぞ。そして私の副官に据えてやろう！」

なんとも身に余る光栄……しかし、小生は一つ気になる噂のを耳に  
致しまして……返事をするまえに、その事を聞いても宜しいでしょ  
うか？

「噂？」

何でも今、曹操様のお隣には、天の御使いなるお方がいらっしゃるとか…

これは本当に御座いましょうか？

「ああ、一刀の事か。

確かに我が陣営には天の御使いがいる。」

はい、確定ですね。

北郷一刀くんその人ですね。

にしても、まさか魏にいらっしゃるとは……

となると、此処は無印ではなく真の世界の様ですね。

うむむ……これは原作知識はあまり役にはたたなくなりましたね。

「繚原、何を悩んでいる。」

いえ、その御仁は本当に天の御使いなのかと……

「繚原！ この夏侯元讓の言葉を疑うと！？」

いえ、全てを疑い始めてしまうのは、しがない商人の性にごさいます。

決して元讓様を疑っているわけではありません。

「そうか。」

はい。この事はもう少しその御仁を見極めてからお返事したいと思

います。

「そうか、ならその気になったら何時でもこの夏侯元讓を訪ねてくるといい。」

ありがとうございます。

では、小生はこれにて。

お話しできて光栄にございました。

「こつちもだ。達者でな。」

はい。夏侯惇様もお元気で……………

光輝くおでこと別れ、荷車を引きながら考える。

一刀くんの歴史を知っていると云うアドバンテージは、魏という国にはとても大きい。

人材、軍事力、国土……………どれをとっても、魏は最強だろう。……………いや最強になるだろう。

そう、大々的な大敗さえしなければ、曹操孟徳の霸道は確実だろう。

そう、例えば……………

赤壁

そう、赤壁さえ勝てれば一刀くんといい存在は意味をなす。

正しく乾坤一擲。

ふむ……

それを踏まえて今選べる選択肢は

1、このまま公孫贖勢力を強化し、天下三分の計に真つ向から喧嘩を売る。

2、何処かの勢力に泣きついて保護を願う。

3、全てを捨てて農民の隠居暮らしをする。

またまた最後の選択肢は魅力的ですね

ですが、いまは他を考えましょう。

まず1ですが、人材が圧倒的に足りません。

少なくともあと一人、武力、統率力、カリスマを揃えた将が欲しい

ですね。

小生や銀、安土麗では駄目ですね。

特にカリスマという点は圧倒的に力不足です。

何処かに居ませんかね……一番良いのは西涼の、馬超さんあたりを  
引き込めるのが良いのですがね……

次に2ですが、一番は公孫贇ちゃんと仲良しの桃香ちゃんですね。

彼女の所には関羽さんや張飛さん、孔明さんに鳳統が居ますからね。

匿ってもらうにはこの上ない所でしょう。

第2候補は孫策さんですか……

んゝ受け入れは難しそうですね。

曹操さん……無理ですね。

小生だけなら兎も角、公孫贇ちゃんは厳しいですね。

はあ、

まったくもって希望が見えてきませんね。

「なあ、聞いたか？」

おや？

「何をだよ」

「天の御使いの話」

「あー陳留の太守様の所の？」

「それがさ、幽州のあたりでも天の御使いが現れたらしいぜ。」

「なんですと!?!」



第八話 イケメンって、見てるだけでムカつくんですよね。(前書き)

ただのコンプレックスですね。

第八話 イケメンって、見てるだけでムカつくんですよね

はいどうも

冒頭のフリも段々ネタ切れしてきましたよ。

毎度お馴染み李文智でございます。

今小生は幽州のお城に、帰って来たばかりでございます。

いや〜焦りましたね。

洛陽に偵察に行つて、一刀くんの噂を確かめていたところ、

「幽州でも天の御使いが現れた！」

なんて噂を耳にして吃驚ドンー！

お陰で物干し竿と荷車置いて身一つで急いで帰ってきましたね。

今なら秀吉の中国大返しに、付き合わされた足軽の気持ち分かる  
気がします。

あ〜つかれた。

「あ、文智様お帰りなさい。」

「おう、文智！ おかえり！」

只今戻りましたよ。銀、安土麗。

まったく、曹操さんの所の天の御使いの情報を集めていたら、幽州の天の御使いの噂を聞きましてね。

急いで帰って来ました。

「あと……それは……」

「……だな……」

ん？ 二人して見合っただけでどうしたのです？

冷や汗も尋常じゃ無いほど流しています……

「いま、天の御使いと言う御方が、太守様と面会しておいでです。」

「劉備って太守様の友達と一緒に義勇軍連れて来たらしい。」

なんとまあ………そう言えばそんなイベントも有りましたね。

ん〜完全に遅れてしまいましたね。

さてどうしますかね。

1、桃香ちゃん達とは顔を合わさず影から暗躍

2、取り敢えず天の御使いに会ってみる。

3、今日はもう寝る

ん〜やはり最後の案は魅力的ですね〜

でも、完全に後手ですからね。

まさか、一刀くん以外にも落ちてくるとは、思いませんでしたからね。

ん〜そうになると、やはり顔を合わせてみたほうが良いですかね。

まあ、小生はクイーン・オブ・ハートを使った催眠型の認識障害がありますから、記憶には残らないんですけどね。

決めました。

では、小生は公孫贖ちゃんに報告してきますね。

「はい、了解しました。」

「おう、勇気出して告白していいー！」

ふっふっふ…安土麗、口は災いの元ですよ。  
後で覚えておきなさい……………

さて、公孫贖ちゃんはどこかな？

「  
「！」

お、あれは公孫贖ちゃんの声ですね。

こっちですか。

いたいた。

ただいま戻りましたよー。

「あ、お帰り。ちゃんと休んだか？」

「あー！ 文官さんだ！お久しぶりです。」

「おや、桃香ちゃんじゃないですか。」

「ほうほう、お仲間もいっぱい増えましたね。」

「うん！ あ、紹介するね。愛紗ちゃんに鈴々ちゃん朱里ちゃんに雛里ちゃんそして私達のご主人様です！」

「おー一息によく言えましたね。でも、真名で紹介はどうかとおもいますよ。」

「等と感心してたら、黒髪をポニーな髪型にした少しキツイ印象の女性を先頭に、みんなが自己紹介をしてくれました。」

「関雲長と申します。」

「鈴々は張飛なのだ。」

「しよ、諸葛亮孔明ともうしましゅー！」

「ほ……鳳土元でしゅ！」

これは、丁寧にとつても。

さあ、そして大本命ですよ。

黒髪的美男子が此方にきます。

ん〜何て言うか、少女漫画の乙 ンの飛 くん？

なんかそんな感じですね。

背が高くて体もガツシリして……髪がサラサラで……そんな彼が右手を差し出して、笑顔で自己紹介してきました。

「島津義一です。宜しく。」

はいはい宜しくお願いしますよ〜と握手を返しますが……そうですか〜

北郷氏ときて、島津家ですか……

アレですかね、恋姫ってのは九州と何か深い繋がりでもあるのですかね〜

おっと、小生が自己紹介まだでしたね、小生は公孫贄様の元で文官をしている者です。

ヨロシク〜

「え？」

「はい、宜しく。」

「よろしくなのだ！」

「えええ?!」

「朱里ちゃん、どうしたの？」

「だ、だって、皆さんそれで良いんですか?!」

「? なにが？」

「変な朱里なのだ。」

「朱里ちゃん……変」

「ひ……雛里ちゃんまで……」



あらあら……流石は後世まで名を残す、諸葛亮孔明ですね〜

小生の異常さに気付きましたか。

これは、変に勘ぐられる前に撤退しますかね。

では、殿。

「ん？」

小生は荷ほどきなどが有りますので、これにて下がらせて貰います。

「わかった。また明日〜」

またあした〜

ずいずい

さて、小生が居なかった間にどうなってるのか、確認しなければなりませんね。

また忙しくなります。



第九話 ネット陣形はいい訓練になるんですよ(前書き)

PVがめっさ凄い事になってます。

恋姫ブランドスゲー

第九話 ネット陣形はいい訓練になるんですよ

どうも、どうもどうも〜

イモ……………

じゃなかった。

李文智でございます。

小生はいま、大量に集まりすぎた賊の討伐のために、馬上の人となつております。

なんでこうなつたかと言うと、公孫贖ちゃんてば、小生の居ない間かなり増えすぎた賊に苦労してかなり頭を抱えてたらしい。

んで、そんな時にやってきた桃香ちゃんが義勇軍なんて連れてきたものだから、

「よっしゃあ！反撃の好機〜！」

と相成つたわけでございます。

ですが、

「文智〜そういつわけで、作戦作つて〜」

……なんか反撃の策があったのでは？  
たしか桃香ちゃん達に、委せとけみたいな事言っていましたよね？

「だって……只でさえ桃香にキャラで負けてるのに、なんか更に濃い奴増えてるんだもん……  
目立たなきゃ！ っていう危機感がな、こっ……」

はいはい、解りましたよ。

じゃあ先ずは賊を一ヶ所に集めては如何ですか？

「一ヶ所に集める？」

ええ、例えばある村に太守が戦のための兵糧を、一時的に集めているみたいな噂を流すんですよ。

「なるほど！ 賊が餌に集まった所を討つんだな！」

いーえ、賊が餌を巢に持ち帰った後に、巢ごと叩くんですよ。

「つまり、偽物を掴ませる？」

そうです。まあ、本物も掴ませますけどね……  
でないとバれてしまいます。

あのような輩は元から叩かないと、ゴキブリの如く増えていきます  
からね。

とはいっても、数え役満 姉妹の居場所は、今現在は特定不可能な  
んですよ。

<sup>ファン</sup>黄巾党の皆さんが教えてくれるなら、楽なんですけどね。

いっそのこと、<sup>ファン</sup>黄巾党に成ってみましようか………

あ、イイカモ

S I D D 諸葛亮

いま、わたしの目の前には先日会った文官さんが馬に乗っています。相変わらずいつ見ても気味が悪いです。

皆さんは本当にあの人の異様さに気付いていないのでしょうか。

最初に会ったときも、此方は名乗っているのに、あの人は名を名乗らずただ文官であると説明しただけ。

つまり、自分の情報を流さず、此方の情報だけを聞き出した。

しかも、皆その事をだれも注意しない。

誰もその事に疑問すら持たない。

いま考えても、背筋が寒くなります。

そもそも、あの人のあの時、本当に喋っていたのか？

声はどんな声？

着ていた服は？

思い出せない。

記憶に霧がかかり、他の事は鮮明に思い出せるのに、あの人の事だけが思い出せない。

今朝公孫贇から今回の作戦を聞いた時だって、立案は公孫贇だって言ってたけど、それは絶対無い。

内容の完璧さ、そして冷酷さ、公孫贇には無い発想だ。間違いなくあの人のだろう。

そして、策の内容を説明するときに使った言葉……………

《義一くんには釣り野伏せと言えば解りますかね》

そして、そのあとのご主人様の表情。

いったいあの人は、ご主人様の何を知っているのだろうか。

あの人は何者なのか……………いや、そもそもあの人は人間なのでし



ようか？

こわい…

あの人はよくない気がする。

S I D E O U T

さーで、餌に食いついた蟻さんが巢の場所を教えてくださいましたね。  
現在は賊の砦と思わしき場所。

作戦は、公孫贄が敵に挑発しながら誘き寄せて、味方が待ち構える  
奇襲ポイントで反転反撃。

それと同時に敵の左右から伏兵が奇襲。  
んで、その裏で兵の減った敵の拠点を義一くんに落としてもらい、  
最終的には敵拠点を壁に大根を擦る如く、削っていく。

これぞ、搦り鉢の計ってか？

上手く行けば賊を全滅できるし、兵達の連携の訓練になりますしね。

これから来る乱戦への良い肥やしになるでしょう。

陣容は本隊三千

李賢隊千

可令隊千

そして義一達は二千

対する賊軍は情報通りなら八千。

数で負けていますが、なんとかなるでしょう。

さて、義一くんも位置についたし、銀と安土麗も配置についたようですね。

さあ公孫贄ちゃん、存分に目立ちちゃってください！

「な……なあ」

……なんか嫌な予感しますね。  
なんですか？

「こつこつ役ってさ、私より文智や桃香の方が良くないか？」

だー！

「いた！ いたたたた！ つ、つねらないでー！ いたい！」

黙らっしゃい！

チミって娘は！

ここにきてヘタレるなんて！

小生はあなたをこんな娘に育てた覚えはナイワヨ！

「ううゝ文智に育てられた覚えも無いよゝ」

兎に角、尻込みしてないでとつととやる！

度胸みせなさい！

「うう……………わかつたよ……………」

コホン、聞け賊共よ！

我が名は公孫伯珪！

ここ幽州を治める者なり！

貴様等は我が民を傷つけ過ぎた！

よって我直々に罰を与える！

命が惜しくば、武器を捨て大人しく下り罰を受けるが良い！

逆らうなら命をもって償ってもらおう！」

おおう！ やれば出来るじゃないですか。

流石ですよ〜それでこそ太守様！

いよ！ 大陸ー！

「うう…そんなに誉めるなよ、照れるじゃないか。」

照れる………のは後にしておきましょう。

敵拠点を見るとジャン！ ジャン！ と銅鑼が鳴り始めました。

どうやら賊は命懸けで戦うようですよ。

「の、様だな。全軍戦闘準備！」

公孫贇ちゃんの号令で兵達が得物を手にとる。

皆さん、まずは鶴翼の陣にて敵の突撃を受け止めて下さい。そこから機をみて撤退します！

無理に反撃せず、牽制しながら前線を維持して下さい！

敵が雄叫びをあげながら、突撃してくる。

賛！

「わかってる、奴等は選択を間違えた！ それを身をもって教えてやれ！ 全軍突撃！」

公孫賛ちゃんの号令に兵が前進を始める。

兵の士気は十分。

さあ、あとは作戦通りに行きますかね。

S I D E 義一

「見事な連携だ……  
公孫賛は、これだけの練度の兵をもっているのに、なぜ今まで賊に遅れをとっていたのでしょうか……」

愛紗が呟く。

確かに、敵の突撃は勢いもある。  
しかも公孫贗軍の兵数は三千  
対する賊の兵数は七千

兵数で負けているのに、それでも被害無いように見える。

「おそらく、あの文官さんです。あの人が居なかったから、寄せ集めの賊ごときに、今まで遅れをとっていたでしょう。」

「つまり、今の姿が公孫贗軍の真の有り様だという事か……」

まさに精鋭か……

「へ〜文官さんて凄いなだね！」

……文官さんか……

あの人も謎なんだよな。

何故か、島津家のお家芸である『釣り野伏せ』を知ってたし。

「お兄ちゃん！ 味方が引き始めたのだ！」

戦場を見ると、左右に広がっていた陣形から、鳥が翼を畳むかのよう  
うに、細長い陣形になり後退しはじめた。

それは人の集まりが、まるで一つの生き物の様に見えたほど、あざやかだった。

「見事です……………」

「ああ……………」

俺は朱里の呟きに生返事しか返せなかったか、すぐに自分を取り戻した。

「今は、やる事やらないとな。

皆行くぞ！ あの砦を落とすんだ！」

「……………応！（なのだ！）……………」

S I D E O U T

さて、今現在我等は鶴翼から雁行の陣に変形し、後退している。

この雁行陣って便利なんですよね、  
どの陣形からこの形に出来るし、厚みも持たせられますから、防  
御にはうってつけなんですよ。

「今のところ予定通りだな。」

ですね、順調に敵を引き離せていますし、後は奇襲で敵を押し返す  
だけですな。

「そうだな。にしてもな………」

おや、どうしましたか？

「いや、文智の居る居ないでここまで強さが変わるって………どつ  
なのよ。」

そんなの気になるなら、孫子なり何なりもつと勉強すれば良いでし  
ょうに。

どれも中途半端だから普通って言われるんですよ。

「言わないでよ、気にしてるんだからさ………」



やれやれ、バカな事言ってる内に、奇襲地点まで着いちゃいましたよ。

「おつと皆、奇襲に合わせて魚鱗陣に移行するからな！

突破するなよ、押し返すのが目的だからな！

じゃあ文智、合図を！」

はいはい

小生の指示で赤い旗が振られる。

すると、敵の左右にある人が隠れられそうな茂みから、一斉に矢が放たれる。

敵が奇襲で混乱した一瞬の隙に、手早く指示を飛ばし雁行から魚鱗陣へと、移行する。

さらに指示を飛ばし、もう一つの赤旗を振らせると、敵の左右から銀と安土麗の部隊が姿を顕す。

その陣形は、指揮官である銀と安土麗を中心に、整列した兵を放射状に並べた陣形だった。

ふっふっふ……… ネタ陣形、車懸かりの陣………

運用は激ムズですが、連携訓練には丁度良いんですね。

さあ、公孫贇ちゃん

「わかってる。皆の者、今こそ勝機！  
全軍突撃い！」

《雄雄雄雄雄雄雄！》

公孫贇ちゃんの号令で賊軍が押し返され、左右から回転する車懸かりで、敵兵が削られていく。

ある程度敵を削りつつたら、車懸かりを解き半包囲する形で敵を皆まで押し返していく。

やがて、敵からも砦が見えたのだろう。

後退の速度が上がり、我先にと砦の中に駆け込もうとするが………

その砦には既に劉の旗が風にはためいており、砦の前には関羽、張飛を先頭とした義勇軍が布陣していた。

「行くぞ！ このまま公孫贇軍と連携し、敵を殲滅するのだ！」

《応！》

もうここまで来たら、無闇に殺す必要は有りません。  
皆さん義勇軍と連携し、敵を完全に包囲して下さい！

《応！》

公孫贇ちゃん、降伏勧告を。

「わかった。

もはや大勢は決つした！ このまま武器を捨て降伏せよ！

さすれば、公孫伯珪の名において命まではとらん！」

この現状で、武器を振るい戦おうとするものは最早いなかった。

オリキャラ設定資料【7/8改訂版】（前書き）

まんまです。

正しくわたくしの脳内妄想爆発ならないようです。

## オリキャラ設定資料【7/8改訂版】

李震文智

能力

統率力1

武力1

知力3

政治力5

魅力1

本作品の主人公

転生者。

人を食った性格で、奇抜な発想と行動力で常に物事の裏をかく人物。公孫贇に惚れており、命を掛けて守ると心に誓っている。

ARMS クイーン・オブ・ハートを宿しており、視野、視力、動体視力は既に人間の域を越えている。

《クイーン・オブ・ハートとは、ARMS

（ナノマシン兵器。正確には炭素生命体と珪素生命体のハイブリッド生命体）

の中でも見ることに特化したARMS。

透視能力を持つ。

見る以外はこれといった特殊能力は無い。

瞳の光彩を変えて相手に催眠暗示を掛けることも可能だが、これは文智が独自に編み出した力である。

また、最終形態が存在し、『アイギスの鏡』と言う全ての攻撃を反射できる特殊フィールドを展開出来るが、現在の文智には使用不可能。

もとはルイス・キャロルの《不思議の国のアリス》に出てくる《ハートの女王》である《

凡人の才というリミッター型の宝具を身に付けており、一部を除いた総ての能力が2までしか上がらず、ランクダウンしている。

書類仕事が得意

文官さんの愛称で通っているが、これは本人が特徴という特徴を全て捨て去り、さらに催眠暗示で相手の記憶から消しているため、公孫贖の文官とだけ認識させている結果である。

因みに、チートがあまり好きではないので、こんな微妙なステータスになっている。

李賢 毛武 真名 銀

能力

統率力 3

武力 2

知力 2

政治力 2

魅力 2

文智の部下。

凡人ではバランスのとれた能力の持ち主。

だが、恋姫無双の主だったキャラ達相手では敗北が必死のザコステータスな悲しい子。

部隊指揮を得意とし、弓兵を用いた戦いを好む。

可令尽舞 真名 安土麗

能力

統率力 1

武力 3

知力 1

政治力 1

魅力 3

中華版 | ノルド・シュワルツ ガー

竹を割った性格で、周りからも人望が厚い人物。武力だけなら他の恋姫無双のキャラとそこそこ戦えるが、やっぱりザコステータスの悲しい子。

脳ミソまで筋肉のバカである。

李蒿 文聴 真名 紅玉

能力

統率力 4

武力 4

知力 2

政治力 3

魅力 5

主人公である文智の母親。

産まれた時代が少し後なら、歴史に名を刻んだのではないかと  
言われる程の傑物。

ちなみに親バカで、文智が成人した後も子離れできない。



## 第十話 白戸次郎さん選挙頑張れ

ワッショイ

どうも、お祭り男には絶対になれない李文智にございます

小生は今、お城の中で書類に埋もれております。

戦と言うものは、やるまえより後処理の方が大変なんですよね

今回の戦は大勝しましたが、どんなに頑張ろうと戦死者は出てしま  
いますし、遺族への対応や、補償だけでも大変です。

お陰で机の上には山と積まれた書類に埋もれております。

小生はこれくらい一日もあれば処理できますが、公孫贄ちゃんは今  
頃涙を流しながら仕事していることでしょう。

やれやれ………

そういえば義一くん達なんですが、先日の戦で名をあげて義勇軍に  
入ろうと言う人が、急増しているそうです。

最終的には公孫贄ちゃんよりも兵力は集まりそうですね。

まあ、董卓戦や長坂といった激戦が続きますからね。

軍備増強には余念がないでしょう。

一方小生達は義一くん達と比べると、芳しくないですね。

有能な武将は手に入らず、兵力回復も上手く行きません。

最近少し存在感が出てきた公孫贇ちゃんですが、義一くんや桃香ちゃんと比べると……………

やっぱり普通ですからね。

一寸だけ公孫贇SIDD

ハム「ううゝ終わらないよ。」

銀「やらないと、何時まで経っても終わりませんよ。」

ハム「しくしく……………（ピキーン）は！ 普通って言うなああああ！」

銀「太守さま?!」

SIDE OUT

おや？ 今、公孫贛ちゃんの叫び声が……

気のせいですかね？

まあ、かなり小生達も厳しい状況の様です。

どうしましうかね？ せめて数え役満 姉妹を保護出来れば、兵力  
に関しては悩まずに済むんですが……

未だに居場所を特定出来ないんですよ。

後少しって所で邪魔が入るんですよ。

こないだも、報告によれば鈴の音のする美女に邪魔されたとか……

ええ、間違いなく甘寧さんですね。

恐らく周瑜さん辺りが張3姉妹の存在に気付いたのでしょうね。

むむむ……

もしかこれは歴史の修正力と言うものでしょうか……

だとすると厄介です。

ん〜本格的に他勢力への保護を考えなくてはいけませんかね？

「李震様」

気付くと小生の隣に、白い装束に白い布で顔を隠した人物が立っていました。

おやおや、誰かと思えば、白兔さんじゃないですか。

白兔とは、小生が手塩にかけて育てた情報収集のための間諜というやつです。

こんな真つ昼間から珍しいですね。  
どうかしましたか？

「は！ ご報告します。張3姉妹についてですが、先日諸侯等による黄巾党討伐により、戦死が確認されました。」

あたたたた……

また後手に回ってしまいましたか。

一応聞きますが、張3姉妹の死亡を確認したのは、誰ですか？

「は、曹操孟徳殿にごぞいます。」

はい、やられました。

一刀くんに数え役満 姉妹を押さえられました。

参りましたね、これで曹操さんの力は格段に上がりますね。

「はい。それに、曹軍に『キヨウチヨ』なる将が加わったようです。」

あゝ許緒さんね。

何て言うか、一刀くんは順調に仲間が集まっているようです。

ふむ……これで黄巾党の乱は決着が着いたことになりますね。

となると、次は董卓の乱ですか。

相手は董卓はじめ、呂布、張遼、華雄、賈馱、陳宮……

味方が多いとはいえ、小生達が戦えば被害は大きいでしょうね。

……………ん？

おやおや？

なんかいい人居るじゃないですか

くふふ……

いーことおもいついちゃったー

第十一話 原作ブレイク……したほうが良いのかな？（前書き）

勢いで書いてますので、かなり行き当たりバッタリになりそう……

うはぁ！ オリキャラはこれ以上出したくない！

ご都合主義がああ！

手招きしている！

まじまじまじまじ……

第十一話 原作ブレイク……したほうが良いのかな？

二一八才みなさま

今や純血の漢民族な李文智でございます。

はい、マジで冒頭のフリがネタ切れしてまいりました。

次回あたりアニヨハセヨになりそうです。

さて、今小生は兵士の訓練所におります。

これから来るであろう大戦に対して、少しでも兵の練度を高めたいので、現在全力で訓練の最中でございます。

そうそう、やっとこさ兵士の数ですが、五千人まで回復しました。

今のままでは、留守を銀と安土麗に任せても、動員できるのは四千人位ですか。

一騎当千の武将はウチには居ませんので、後は兵達の連携で被害を少なくする以外無いんですよね。

ですが、董卓戦で上手く立ち回れば……



くふ　くふふふ

「ぶ……文智様、笑い方が怖いです。」

くふふふ、銀ですか。

いえね、我が軍の悩み所が、上手く行けば一発で解決しそうなんですよ。

「なんと！　真にございますか!？」

ええ、その為には兵を戦場で損なう訳にはいかないんですよ。なので、今まで以上に訓練に力を入れてください。

「そ、そうですか……了解しました。」

安土麗と共に今までよりも力を入れましょう。」

おや？　詳細を聞かないのですか？

「はい。文智様は今まで御自身の考えの正当性を、結果にて証明されてきました。」

今や太守さま始め、古参の兵に文智様を疑う者は居ません。何かお

考えが有るのであれば、それだけで従う理由になると私は思っています。これは安土麗も同じです。」

なんとも嬉しい事を言ってくれますね。

そしてとっても長い台詞を、ありがとうございます。

部下ってイイナーって改めて思いましたよ……

嗚呼！　こんなにも人望を集めてしまうなんて！　また小生は公孫賛ちゃんの嫉妬を買ってしまうのではないですか！！

「『またまた一寸だけ公孫賛SIDE』」

ハム「（キュピーン）は！」

桃「？　どうかしたの白蓮ちゃん。」

ハム「今、間接的に影が薄いって言われたような……」

桃「そ……そう？」

ハム「この感じは………文智だな！」

桃「こ、個人まで特定可能なの!？」

S I D E  
O U T

む？　なんか寒気が………

「風邪ですか？」

そうですかね？

まあ、大事をとって今日は休むとしますかね？

「わかりました。後の事はお委せください。」

ええ、頼みましたよ。

さて、早めに寝ますかね。

「李震さま」

ん？ 白兔？

「はい、急ぎの報告が」

ふむ……袁紹さんが動きましたか？

「それもありますが、もうひとつ……」

ん？

「趙子龍殿が曹操軍に下りました。」

あらら、趙雲さんは一刀くんに付きましたか……  
うむむ……些ちかか一刀くんに、力が付きすぎな気がしますね。

ふむ……白兔

「は！」

探してほしい人がいるのですが

「じよーじよー……」

「！！！」

んで、じよーじよー……

「無理！」

反論はウケツケマセーン

「見付けるのは良いのですが……その後どうするのです？ 私では連れて来ることすら出来ませんよ……」

ソコは小生が動きますよ。

袁紹さんが董卓さんに宣戦布告するまでが、勝負ですよ。

「……………わかりました。やってやりましょうチクシヨウ！」

スレてないでとっとと行きなさい。

あ、あと騎士と帽子屋に召集掛けておいて下さい。

ここが勝負所ですか…

さあ、原作ブレイクの覚悟を決めますかね。

余談ですが、なぜか公孫賛ちゃんに殴られました。

なぜ!?



第十二話 オリキャラ？ さあどろでしょつかね？ (前書き)

小説を読んでないので、口調はほとんど……

てか、全部オリジナルです。



第十二話　オリキャラ？ さあどうでしょうかね

アニヨハセヨ

予告通り挨拶してみました。

皆様如何お過ごしでしょうか、李文智にございます。

只今小生は、荊州の山の中にある池に向かって、釣竿片手に登山の最中に御座います。

え？なんでかって？

実は、以前白兔に探して頼んだ人物が此処に居るそうなのです。

にしても………かなり………きついです………ね………

いや、最近は室内に籠りきりでしたので、いきなりの登山はキツイです。

はあ、小生が動きますよとか、格好つけすぎましたかね

ですが、これも幽州の民のため、ハニーのため………

うは、自分で言っておいて何ですが、ハニーって恥ずかしいですね。

しかもまだ告白処か真名の交換もしてないのですがね。

そう考えると、真にて簡単に真名を貰っていた一刀くんが、ウラメシイ……………もとい、羨ましいですね。

え？ 嫉妬？ ふっふっふ、どうでしょうかね。

はあ……………はあ……………いつになったら目的地に着くのでしょうか……………

歩くこと30分位ですかね。  
漸く目的地に着きましたが、

これは凄いです。

正に水墨画の通りの世界ですね。

連なる山々がとても幻想的です。

は……………ゴエモンでは無いですが、絶景かな絶景かなですね。

そして、その風景に溶け込む様にポチャんと、小さく水の音がしましたのでそちらに向くと、一人の女性が釣糸を垂らしていました。

流石白兔。

情報通りですよ。

小生はその女性に声を掛ける為に近づきました。

釣れますかな？

「ん〜そこそこ。」

かなり長い時間いらっしやる様に見えますが、何時から？

「まだ未明からだ。」

籠の中をみても？

「勝手にしろ」

では失礼して……………ほう、鮎ですか。

「この池には巨大な鯉がいて聞いてな、やって来たはいいが、このとおり釣れるのは鮒ばかりだ。」

ふむ………ですが、なかなか肥えたい鮒の様ですよ？

「まあな、だが釣ったはいいが、時間が経ってしまったてな………このまま町に帰って調理したのでは、腐ってしまう。」

ふむ………ならば、ここで小生が調理しましょうか？

どうやら貴女は飲まず食わずで釣りをなさっていたようですし、釣った命を無駄にしない為にも………ね。

「なんと！ 貴殿はこの場で料理が出来るとな？！ それは願ったり叶ったり！ 是非ともお願い致します！」

はい、わかりました。

では、籠を失礼します。

「お願いします。」

魚を受け取った小生は火を起こし、近くに有った草や木の実や葉つ

ばで鱗を取った鮎をくるみ、その上から粘土を被せ火に放り込んだ。

はい、簡単サバイバルレシピ。

塩釜ならぬ粘土釜の香草蒸し擬きにございます。

「……………このままでは焦げてしまわんか？」

ふっふっふ、大丈夫ですよ。

数十分後

小生は木の枝で、火の中にある黒焦げの塊を取り出した。

「なあ、焦げてる様にしか見えないのだが……………」

大丈夫ですよ。これは回りが焦げてるだけに過ぎません。

そう言って、手短に有った石で黒焦げの塊を叩き割った。

すると、中から夥おびただしい量の湯気が立ち上った。

「なんと！これは！」

黒焦げの塊の中から、見事に蒸し上がった鮎が、姿を現した。

さあ、熱々のうちに食べましょう。

はい、お箸をどうぞ。

「おお……いつの間に」

ふっふっふ、箸作り等の細かい作業は、日本人の得意とする処ですからね。

「もぐもぐ……う！ ……美味い！」

はむはむ……うん。

良い鮎ですね。水が良いのかな？ 泥臭さも殆んど有りませんし、身も締まっています。

「あむ……むぐ……あふあふ！ ……もぐ」

ふっふっふ、落ち着いて下さい。誰も取りませんよ。

「は〜食った！ 馳走になった！」

お粗末さまでした、ですが元々貴女が釣った魚ですよ。

「でも、旨かったのはお主の料理だ。感謝する。……………で、」

で？

「私に何か用か？」

と申しますと？

「誤魔化すな。お主は釣りに来たのではない、私に会いに来たのだらう。」

ほほっ……………

その心は？

「お主の格好は、確かに釣り人のそれだ。だが、発する空気が違う。お主のは戦場に立つ武将のそれだ。」

クツクツク！

空気で小生の正体を見抜きますか。

御見逸れしました、

太史慈殿。

そう、小生が白兔に命令して探していたのは、呉の宿将が一人

太史慈その人だった。

改めて名乗らせていただきます。

姓は李 名は震 字を文智と申します。

現在は幽州の太守、公孫賛の元で文官をしているもので御座います。

「ふむ……幽州の文官殿が私に何の用ですか？ まさか、勧誘に参られたのかな？」



いいえ、小生が勧誘に来たところで、貴女様は我が主、公孫贇に下つては、くださりますまい。

「ほう……では？」

一度会ってほしい御仁が居りまして……

「それは？」

建業が小霸王

孫策伯符

「！ 文台の娘か。」

ええ……一度会っていただきたいのです。

「……会ってどうしろと？」

どうもしません。ただ会っていただきたいのです。

「ふむ……貴殿は不思議な御仁だな。勧誘ではなく、人に会えたと……なんとまあ……」

よく言われます。

「あいわかった！ 一飯の恩義に報いるとしよう。」

ありがとうございます。

「……時に、貴殿は何故文官などしているのだ？」

何故と言われても……

「貴殿ほどの御仁がなれば、世に立志しひとかどの將に……其こそ貴殿の主、公孫贄以上の人物に成れたらうに。」

ふっふっふ、それは仕方ありません。

野心より、恋心が先にたってしまいましたから……

「なっ……恋心とな……ふっ……ははは……アハハハハハ！」

成る程！ それでは仕方が無いな！

クッククク……しかし残念だ。貴殿程の方に仕えるのも良いと思っ  
たのだが、それでは仕方ない！ ならば、私は小霸王に会いに行く  
としよう！ さらばだ！」

はい、お元気で〜

……ふう、疲れた。

ああ言う感受性豊かな人は、催眠暗示効きにくくて苦手なんですよ  
ね。

まあ、これで第一段階は上手く行きましたね。

さあ、次に行きますよ。

袁紹さんが連合の話を持ちかける前に、全ての下準備を終えなけれ  
ば……………

第十三話 アイドルのスカウトって難しい(前書き)

はっはっはっはっ！

全は行き当たりバッタリ！

後半困るのはオレだああああ！

第十三話 アイドルのスカウトって難しい

いや〜どうでしょう！

此所で会ったのも何かの縁！

ウチに来ませんか？

お二人なら次代を担う象徴アイドルになれますよ！

沢山ファン信者も憑いてきますよ！

お二人のためなら死ねるって奴が沢山！

数え役満 姉妹なんて目じゃない！

お二人なら正しく天下を盗れますよ！

どうでしょうか？

ウチと契約しません？

「無理」

え〜！

そこを何とか！

お給料も弾みますよ？

ちゃんと住む家も付いてきますし。

敏腕のマネージャーを付けますから、生活も楽ですよ！

ね！　ウチと契約しましょうよ〜！

「「やだ！」「」

.....

「「.....」「」

.....一応聞きますが.....何がお嫌で？

「「公孫贖が上司なのが嫌。」」

はあ.....そうですか。

え？　何をAVの勧誘みたいな事してるのかって？

そこはホ プロのスカウトみたいとか言いましょうよ……………（涙）

いやね、白兔に大史慈さんを探してもらうのと同時に、程立ちちゃんと戯志才ちゃんを探してもらっていたんですよ。

で、二人の居る村の酒家にて捕まえて、勧誘しているのですが……

公孫贖ちゃん。

貴女の人望の凄さに小生は涙が止まりません。

「文官さんが上司なら考えたけど、その上が公孫贖じゃ……………ね。」

「むりー」

はあ……………仕方ありません。

ならば、酒の席は付き合ってください。

せめてこの再会を祝いでもしなければ、やってられません！

「「それ賛成」

今日は奢りますよー！

「「よ、太っ腹ー」」

そう思うならウチに来てください。

「「それは無理ー」」

結局、二人は仲間にならず翌日、小生は二日酔いの頭を抱えて、二人を見送ったのでした。

はあ、どうにも儘ならないですねー

「「そう言いつときも有りますよ。」」

おや、最近姿を見せなかった、白兔ではないですか。

ため息を吐いてると、いつの間にか小生の隣に白兔が立っています



た。

先日、太史慈さんに会ってきましたよ。

「……………そうですか」

顔を見せなくて良かったのですか？白兔……

いや、太史享

「元気であればそれで良いのです。」

そうですか……………まあ、家庭の問題ですからね。

詮索はしませんよ。

「ありがとうございます。それより、例の件ですが……………」

どうなりましたか？

「お会いになるそうです。」

でかしました。

では最後の一手を打ちに行きますか。

「はい」

皆様ごきげんよう。

社交マナーなぞ毛ほども知らない、李文智でございます。

現在小生は洛陽にきております。

いえいえ、物干し竿を売りに来たものではありません。

たしかにアレは楽しいし、疲れないし、儲かりますが、今回は別の用ですよ。

……でも、また竿竹屋はやりたいな。

でも、今は我慢！

小生は指定の酒家にて、今回の交渉相手をジーツと待つ。

待つこと半刻程だろうか、

「アンタが趙火つつー人か？」

ええ、そうですよ張遼將軍。

お会いできて光栄です。

「はは……ウチはそうでも無いけどな。ツレが居るけどもエエか？」

ええ、大歓迎ですよ。

「エエって、二人ともはいりい。」

「邪魔するぞ。……コイツか？ 張遼。お前に接触してきたのは。」

「いや、正確にはなんか白い奴やったけど、コイツが黒幕で間違いないやろ。……ん？どないした恋」

入り口を見ると、顔を真っ青にしながら殺気を放つ少女が、此方を睨んでいた。

うん、呂布さんですね。

「この人……怖い。」

この一言で、華雄、張遼の二名も殺気を帯びる。

ですが、慌てずに呂布さんににこやか々な笑顔を向けて、

呂布將軍ですね、お会いできて光栄です。

今料理を沢山用意して貰ってます。

心逝くまで食べてくださいね。

小生の言葉は呂布さんに届き、殺気を霧散させた。

そして小生の向に座ると、

「訂正……いいひと」

「「だあくあ！」」

と華雄、張遼両將軍を盛大にズッコケさせた。

殺伐とした空気を一瞬でギャグにするなんて！

呂布……恐ろしい娘！

「り……呂布！ おまえなあ！」

「諦めえ華雄。恋にとっては飯食わせてくれるんは、みんなエエヒトぞ。」

まあまあ、料理も来ましたし。

先ずはお酒で口を湿らせては？

「せやな、折角やからご馳走になるわ。」

「ありがたく戴く。」

「いただきます」

それから、懇談会な感じで話が進んでいった。

そして小生はこの場を利用し、董卓との面会の約束を取り付けた。

第十四話 特攻野郎Aチームが映画化ですよ！（前書き）

あらら〜

段々オリキャラ増えていつてますね。

チートキャラは居ませんが、どうなのでしょうかね？

てか、公孫贖の影が………また薄くなっている!？

第十四話 特攻野郎Aチームが映画化ですよ！

と言うわけで、人材確保の旅は空振り三振に終わりました。

「ダメじゃん！何のために休みあげたのさ！」

え〜と、物干し竿を売るため？

「物干し竿ってなんだよ……」

そんな残念そうな顔しないでくださいよ〜

皆さん公孫贖ちゃんが上司なのが嫌ってだけですから〜

「それは私がるいの？ 私が悪いのか?!」

いーえ、公孫贖ちゃんの影が薄かったただけですよ。

「orz」



あらら、がっくりと膝ついちゃったね。

まあ、公孫贄ちゃん弄りは、ここまでにしておきましょう。

さて皆様こんにちわ。

いとも出演が夢の文官、李文智にございます。

タリさんイイね。

モリさん。

さて小生は洛陽にて、董卓ちゃんと会ってきました。

はい、可愛かったですよ。

もうへうなんて！

チミは小生を、萌え死にさせるつもりにツモリテスカ！

………は！いけません、また思い出に浸ってしまいました。

いけませんね。

浮気ではないですよ。

誓って小生は公孫贄ちゃん一筋ですよ。

……ホントデスヨ

まあ、兎に角。

暗躍の旅は、その目的を果たしましたよ。

まあ、程立、戯志才のアイドルユニットを逃したのは残念デスガ。

逃がした魚を悔やんでも仕方ありません。

さあ、あとは義一くん達ですよ。

さて、騎士と帽子屋は来ていますかね？

ああ、待っていてくれたようですね。

ご苦労様です。

忙しいのに、すみませんね。

「いえ、私は良いのですが……帽子屋が……」

「文智はん、あきまへんえ〜！　ウチは、お店留守にして文智はん待ってたんどすえ〜。」

「こんなに待たせるなんて、殺生ちやいますか〜！」

「はは、すみませんね。一寸洛陽まで行ってましたので。」

「う〜そないなことゆ〜て、ウチは自営業なんどすえ〜、売り上げ落ちたらオマンマ食いっばぐれてしまいおす〜シクシク。」

なんて言つと、帽子屋はヨヨヨと着物で顔を隠し泣きはじめた。

「はあ……分かってはいますが、仕方ないですね。」

「任務中の給金にはイ口を附けますので、それで勘弁してください。」

するとどうでしょう、さっきまで泣いていた狸は満面の笑みで

「毎度おおきに〜」

と、言いやがりました。

「はあ……竿竹屋で稼いだお金も、今回の事でゼロになりそうですね。」

「ほいで、ウチら何すればええのん？」

え、お二人は関羽さんにあつて

「無理です！ 私に死ねと?!」

「わちゃちゃ……文智はん、長い付き合いどした。ウチが死んだら  
マメに墓参りにきておくれやす」

……なんで人に会うのに、そんな決死の覚悟が必要なんですか。

「私達の事情はよくご存知でしょう！」

「今ウチらが愛紗ちゃんと会ったら、間違いなく怒りの鉄拳が飛ん  
できますえ！」

ええ、よく知ってますよ

ですが、アナタ達に拒否権はアリマセーン。

「鬼！」

「きちく〜！」

「変態！」

「じみ〜！」

なんとも言いなさい。

ここでアナタ達を動かさなければ、全ての計画がペアですよ。

ちゃんと高い給金払うんですから、その分キツチリ働きなさい！

「うう……美衣紗……私達は仕える人を、間違えたのだろうか。」

「元気だしい、梨衣紗。ちゃんと後で梨衣紗の分もお金ポツたるから……」

クフフ、さあ義一くん！

最後は貴方ですよ！

第十四話 特攻野郎Aチームが映画化ですよ！（後書き）

後書きシアター

今週のボツキャラクター

「ハアーイ！」

私の名は黄月英！

長い艶のある白髪と

健康な褐色の肌がじまんの

漢女よ！

キラッ  
「

やってしまった…

orz

第十五話 漢女？ いいえ 男の娘です。(前書き)

今回は島津サイドの話です。

てか、またやっちまった感が……



第十五話 漢女? いいえ 男の娘です。

SIDE 義一

現在俺たちは遼西の会議室を借りて、仲間内で話し合いをしていた。

内容は袁紹から寄せられた、対董卓連合の要請についてだ。

「つまりその董卓ってのは、幼い皇帝の威を借りてやりたい放題や  
ってるから、やっつけようって事だろう?」

「まあ、大体そうです。」

まあ、俺の知る歴史でも董卓ってのはひどい奴だったらしいからな。

迷う事はないだろう。

ここは董卓を倒して名を上げさせてもらおう。

俺が自分の考えを言うと皆頷いてくれた。

ただ一人、朱里を除いて。

「どうした朱里。浮かない顔をして」

俺が尋ねると、頂垂れていた顔を上げ「実は……」と何かを言おうとしていたが、突然現れた兵士の「失礼します」と言う声にかき消されてしまった。

「何事だ、今は会議の最中だぞ！」

直ぐさま愛紗が叱咤するが、兵士は愛紗の前まで行き、

「関羽様にお客様です。」

と慌てた様子で伝えた。

「私に？今は忙しい。

後にしてもらえ。」

「いえ、それが……」

「どうし……」「あゝ愛紗ちゃんやゝ」な！ 美衣紗！？」

「お久しぶりです愛紗姐さま。」

「な！ 梨衣紗まで。」

会議室に現れたのは12〜13歳くらいの、二人の女の子だった。

一人は愛紗をそのまま小さくして腕白にした感じの女の子だった。髪も長い黒髪をツインテールにしているのも特徴だ。

もう一人は大人しそうなショートカットの女の子で、垂れ目と長い睫毛がなんていうか……狸を連想させ、またそれが愛らしい女の子だった。

「梨衣紗！ 美衣紗！」

「「愛紗〜！」」

二人の女の子が目潤ませながら愛紗に駆けていく。

それを愛紗が両手を広げ受け止めようとしている。

やがて、あと少しで二人が愛紗に抱きつこうとしようとするので、愛紗は右手で拳を握り大きく振りかぶり……

「こんのおおばかどもがああああ！」

「「ぶぐぐ！」」

二人を殴り飛ばした。

「今まで一体どこに居たこのバカ！ 家族がどれたけ探したと思っ  
てんだ！」

「「ゴ……ゴメンナサイイイイ！」」

どういう状況なんだ？

「あ……愛紗？ 状況がわからないんだが……」

「し、失礼しました。この二人は私の従姉妹でして……」

ツインテールの女の子を指す。

「関平と……」

狸の女の子を指す。

「関興です。」

また有名どころが出てきたな。  
しかもまた女の子で……

もう驚かないけど。

でも、関平と関興って関羽の子供じゃなかったか？

まあ、深く考えるのはよそう。

「それで、今まで何処に居たんだ？」

愛紗おとがギロリとガタガタと怯える一人を睨んだ。

「えっとな、ウチら今まで幽州で帽子屋やって暮らしていたんよ。」

「帽子屋？」

「はい、今や市場では一番大きいお店を出させて貰ってます」

へえそれはすごい。

この歳で店もって生計たててるとは。

「あわわ……関帽子店はよくしってましゅー！」

「はわわ、私達のかびゅってる帽子も関印の帽子なんです！」

へ

朱里と雛里がアイドルを見るようなキラキラした目で、関姉妹を見ている。

「そうだったのか。しかし、息災ならなぜ便りの一つも寄越さなかった。叔父や叔母がどれ程心配したか……」

「あちゃちゃ、そりやすんまへん〜。

せやけどな、ウチらも生きるに必死だったんよ〜」

「なら、家出なんてしなければ良いだろうが！」

「こもつとも。

「わちゃちゃ……墓穴ほつてもうた。」

終始青筋浮かべて怒っていた愛紗だったが、件の二人は反省の色が見えなかった。

流石の愛紗もこれには深くため息をつき、顔にこもっていた怒気を消した。

「それで、私に何の用だ。」

愛紗の問に答えたのはツインテールの関平だった。

「愛紗姐さま。今度の袁紹の連合は参加されるのですか？」

関平の問いに言葉が詰まる愛紗。

すると、愛紗が横目でこちらを伺ってきた。

朱里を見ると小さく頷いてきた。

なら、俺から話すか。

「俺たちは、公孫贄の客将として参加するつもりだよ。」

と答えたが、二人は首を傾げてコチラを見ただけだった。

あ、そうか。



まだ自己紹介してなかったな。

「島津義一だ。よろしく。」

取り敢えず自己紹介した。  
そしたら愛紗が

「私達のご主人様だ」

と、補足してきた。

「ちやちやちや、いつも愛紗ちゃんがお世話になってます」

「美衣紗。」

「せやね、島津はん。いきなりで不躰やけど、お願いがあるんどす。」

「お願い？」

「はい、実は……董卓を助け出してほしいのです。」

そこで俺達が聞いたのは、袁紹からの情報や噂とは反対の事実だった。

十常待の暗躍、そして董卓の善政と不幸。

それは、董卓を悪だと決めつけていた、俺にはショックな事実だった。

なんと盲目！

なんて浅慮！

ろくに事実を調べず、詐りの事実には踊らされていたとは……

「そんな！じゃあ董卓は……」

「ぜんぜん悪くないのだ！」

流石に桃香達も、これにはショックだったらしい。

気まずい沈黙が漂う。

「ご主人様……」

朱里が俺に何か進言しようとするが、その前にどうしても確認したい事があった。

「なあ、関平と関興さ、なんで俺達に……ただが義勇軍連れた客将の俺達にこの話を？」

「はい、私達はハッキリ言って、天の御使いなんて眉唾物の貴方には、なんの期待もしていません。」

「梨衣紗！」

「まあまあ、愛紗……しかし、随分ハッキリ言ってくれるな。」

激昂する愛紗を宥め言い返す俺だが、心の何処かで、まあそうだなと納得していた。

それを見ていた関興がケタケタ笑いながら

「ちやちやちや、仕様がありません。」

ウチらはいんさんよりも、劉備はんの大徳を宛にしていますよて。」

「わ……わたしを？」

「そつどすえゝ他の諸侯頼むのやと、どうしても欲がでますよて。せやけど劉備はんなら、困ってる薄幸の女の子を助けてくれまっしやる？ だからウチらは劉備はんに頼むんどすえゝ」

「お願いします。董卓を助けてください！」

「お願いします〜！」

「私は……私は董卓さんを……」

桃香が何かを求める様に俺をみる。

それに対して、俺は大きく頷いた。

すると、桃香の目に今までで一番強い光が宿った。

彼女は力強く宣言する。

「決めました！ 私は……私達は董卓さんを助けましょう！」

その宣言は仲間の決意の笑みと、力強い頷きで支持された。

「ならば、私達二人も力に成りましょう！」

「ちゃちゃ、ウチらも戦場に連れてって〜な。役に立ちますよて。」

関姉妹が提案してきたが、俺の中にはまだ可愛い女の子を戦場に出すのは抵抗があった。

特に関興なんか線の細い女の子を、連れてって大丈夫なのかな……

だが、俺ね懸念を察した愛紗が、大丈夫と言ってきた。

「梨衣紗……関平は、私ほどではありませんが、腕はたちます。」

へえ、それは凄い。

改めてこの世界の女の子は凄いなと感心した。

「それと……美衣紗……関興なんです……その……」

「関興ちゃんは？」

「男です」



S I D E  
O U T

あれ？

今回小生の出演無し？



第十六話 主人公、小生なんです（前書き）

今回も島津サイドオンリー

第十六話 主人公、小生なんです

SIDE 義一

俺は自分に宛がわれた部屋で、横になりながら今日の事を振り返っていた。

先程の俺達の方針は決り、その内容は

「俺達は反董卓連合に参加し、その際に董卓を救出する。」

既に董卓対袁紹の図式は、出来上がってしまっている。

現状だけを見たら反董卓連合の勝利は難しいだろう。

どんなに袁紹が諸侯の軍勢を集めても、洛陽は漢帝国の中枢。

兵力、防御力共に一筋縄で行くわけがない。

だが、俺の知っている歴史では、董卓は敗北している。

飛将呂布の裏切り……

実際にこの世界でそれが起こるか解らないけど、きっと何かが起こる。

確信は無いけど、そんな気がする。

今現在、公孫贄のもとを離れて董卓につくという選択肢もあるが、其だと董卓が置かれている状況からは救出できない。

ならどうするか……

董卓が敗北し、全てから解放された瞬間に保護……俺達にはそれしか思い付かなかった。

まったく、戦場ではろくに戦えないし、頭脳面でなにかアイデアを出せる訳でも無し。

何とも情けないご主人様だ。

これでは関姉弟（これ重要）に、あてにしないなんて言われて当然だ。

沈んでいく気持ちに、居てもたつてもいられなく、部屋を出て彷徨いてみる事にした。

俺は……何のために此処に居るのだろうか。

思わずため息が出てしまう。

《おや、義一くんではありませんか。》

声を掛けられた気がして、振り返ってみると、そこには文官さんが立っていた。

《こんな夜遅くに散歩ですか？ よるこはちゃんと寝ないと、大きくなれませんよ。》

そう言って少し意地の悪い笑顔を浮かべている。

「すみません。何か寝付けなくて……」

すると文官さんは袖から林檎を取り出して、同じく袖から匕首を取り出して林檎を半分に割った。

《好物でして……おーっどござ。》

「ありがとうございます。いただきます。」

半分の林檎を受けとると、早速かじりついた。

現代みたいに甘くはないが、ほんのりと甘酸っぱい果汁と、林檎の香りが気分を楽にしてくれた。

《何かお悩みですか?》

「悩んでほぐすほどではないけど……」

《でも、顔は正直みたいですよ》

凶星と解つていながら、思わず顔を撫でてしまう。

《ふふ……青春ですね。どうでしょう、この通りすがりの文官に、お話ししてみませんか?》

今の気分を考えると、それはとてもありがたい提案だったが、どこか悪魔の契約を思わせた。

「実は……自分の有り様が解らなくなっちゃって……」

《ほほう……》

「俺は戦場では戦えないし、頭が良いわけでもない。そんな役たたずな俺を、皆はご主人様って呼んでくれて……」

《つまり、彼女達の思いが、重くなってしまったと?》

文官の言葉になぜか何も返せず、ただ頷いた。  
何故かそれだけしか出来なかった。

文官さんは、手に持った林檎を一口かじると俺の目の前に立った。

《義一くん、貴方は何故桃香ちゃん達に、付いていこうと思ったのです?》

「それは……桃香達の思いを……理想を叶えてやりたいと思って……」

《ならそれで良いじゃないですか》

「でも、俺は思っただけで、実際に桃香達の理想を叶えてやる力なんて……」

《いいじゃないですか。想いだけだつて。》

俺は思わず信じられないモノを見る目で、文官さんを見てしまった。

それに対して文官さんは臆気な笑顔で、俺の目を覗き込んできた。

《確かに、想いだけでも、力だけでも、大志は叶わず、世を変えることも出来ません。

ですが、いいじゃないですか、それで。

想いしか無くても、強い想いは力を呼び寄せます。力しか無くても誰かの想いに自分の力を託せば良いじゃないですか。》

そして文官さんは外に面した窓を開けて夜空を見上げた。

俺も吊られて夜空の星を見た。

街灯一つ無い世界の星空は、星々が力強く耀き存在を主張していた。

《義一くん。  
世界はね

支えて、支えられて、  
助けて、助けられて、  
関わって、関わられて

そう言った人の……生き物の……森羅万象の全てが、かわり合い  
紡いでいるんですよ。

君に力が無くても、君の力に成ってくれる人が居る。  
関羽ちゃんや張飛ちゃんがそうでしょう？

自分に力がないと嘆く前に、自分のできる事を……目の前に有る事  
をやってみたらどうですか？

小生から言わせれば、君の桃香ちゃんの理想を叶えるって想いは、  
まだスタートラインですよ。《

言葉が出なかった。

目から鱗とは正にこの事だろう。

そうだ、こんな所でいじけている前に、俺は自分のやるべき事をし  
なければ……！

「よしー」



まずは、生き残る事を考えよう。

まずは、董卓軍に勝つことを考えよう。

そして、董卓を絶対に救出しよう！

これをやらずに、桃香の理想を云々は叶えられない。

よし！ やる気が出てきたぞ！

……あれ？ でも俺は誰と話してたんだっけ？

なんで林檎なんて食ってたんだ？

てか、何でこんな所に居るんだ？

あれれ？

ん〜……ま、いいか。

悩みも解決したし、今日はゆっくり寝て明日頑張ろう！

S  
I  
D  
E  
  
O  
U  
T

第裏話 頑張れ白兔さん 前編（前書き）

裏話をお届けでございます。

一話にまとめるつもりでしたが、

「あれ？ コレってネタバレじゃね？」

と言う諸事情が有ったため、前後編に分けさせていただきました。

てなわけで、裏主人公の白兔さんの物語をどうぞ。

第裏話 頑張れ白兔さん 前編

《探してほしい人がいるのですが》

我が主 李震文智の奇行は今に始まった事ではないが、この時ばかりは何時もとちがく、真面目な顔で命じてきた。

その内容は……

《程立さんと戯志才さんを探してください》

あの二人か…… たしかにあの二人は今は何処にもついていない。

引き込むなら今の内だ。

《ついでに、貴方の姉上も探してください。》

！  
！  
？

《んで、ついでに呂布さんが張遼さんに会う手筈をお願いします。》

「無理！」

《反論はウケツケマセーン》

いきなり何言い出すんだこの × …… (内容が余りにも下品なため作者権限でカットします) ……野郎！

まだまだ貶し足りませんが、切実な話し仕事なんですよ。

「見付けるのは良いのですが……………その後どうするのです？ 私では連れて来ることすら出来ませんよ……………」

《ソコは小生が動きますよ。

袁紹さんが董卓さんに宣戦布告するまでが、勝負ですよ》

「……………わかりました。やってやりましょうチクシヨウ！」

《スレてないでとつと行きなさい。

あ、あと騎士と帽子屋に召集掛けておいて下さい。》

はあ、どうしてこの人に仕えてしまったんだろう。

私は白兔。

幽州太守公孫贊が麾下の文官の李震文智の間諜だ。

少年時代に文智様と知り合いになり、影となることを決めた男だ。だが、最近は少し自分の選択を後悔しはじめている。

取り敢えず帽子屋に会いに行くか。

私は城を屋根伝いに歩き、誰にも見られず門まで来ました。

途中劉備殿や島津殿とすれ違ったが、気付かれなかった。

今日も穩形は完璧なようだ。

つと、なんて悦に入っていたら、前から関羽殿と張飛殿が歩いてきた。た。

私は非公開な存在なので、取りあえず手短な木の影に隠れる。

前を通り過ぎる二人。

が、急に張飛殿が止まった。

なにやら鼻をひくつかせている。

すると……

「ソコなのだ！」

「？！？」

突然、私が隠れていた木を蛇矛が真っ二つにした。

「なっ！」

「思った通り、くせ者なのだ！」

えええええ？！

「なっ、何者！」

ちばいちばいちばいちばいちばいちばいちばいちばい

なんで分かったんだ？

って呆然としていて、いきなり私の首めがけて蛇矛の突きがきた。

「のおおおおお！」

それを気合いで身を捻りかわし距離をとった。

「む？ 避けられたのだ。」

「くせ者め、逃げられんぞ！」

ざわざわざわ……

く！ 賭け事してる訳ではないのに……

とにかく、騒ぎが広まって人が集まってきている。

本格的にまずい。

仕方なく懐から黒い玉を取りだし、地面に投げつけた。

すると、白い煙が辺りを覆い隠した。

「く！ 煙幕か！」



よし！ 見失っている今のうちに……

「逃がさないのだ！」

張飛殿の気合いと共に蛇矛が袈裟斬りに振るわれた。

首筋にヒヤリと冷たいものが走り、体を投げ出す様に、前に飛び出し蛇矛をやり過ぎす。

こええええ……髪の毛が何本か持ってかれた。

けど、このまま逃げ出せそうなので、走って門から飛び出し、人混みに紛れ込んだ。

はあ……生きた心地がしなかった……

「 関羽、張飛SIDE 」

「く……逃げたか。しかし鈴々、くせ者によく気付いたな。」

「美味しそうな匂いがしたのだ。」

「は？」

「そしたら、くせ者だったのだ。」

「そ、そうか。」

(最近鈴々は変な特技を覚えてんな……)

== SIDE OUT ==

はあ、よつやく着いた。

いま私は町の中にある関帽子店の前に立っていた。

「たのもう。」

店先から声を掛けると、今や聞きなれた変な訛りの声が聞こえてきた。

「いらつしゃい。わちゃ、白兔はんやないの。おひさ」

店内から出てきたのは、髪を短く切り揃えた狸を連想させる容姿をした、十二、三歳位の子供だった。

こいつは帽子屋こと関興。

幼いながらも店を構え、今や幽州一の帽子屋となった【男】だ。

見た目だけ見るのなら、少女にしか見えないのだが、やつは列記とした男だ。

「ちやちやちや、白兔はん、今日はどないしたん？ 帽子買ったなら、友達やさかい。  
勉強しますえ」

「商売熱心な所済まないが、李震様から招集がかかった。」

「なぐんや、残念。」

ちやちや、招集の件は了解しましたよて。  
お店閉めたらいきますよて。」

「ああ、ついでに騎士にも声をかけておいてくれ。」

「ちやちやちや、了解しましたえ〜」

ふう、では不意だが、姉（釣りバカ）を探すとしますか……

3日後

居ました。

まごうことなく、我が姉太史慈だ。

相変わらず釣り三昧のようだ。

今も長沙の河辺にて釣糸を垂らしている。

しかし、ここまで文智様に来てもらうには、少し遠いな。

……よし、荊州の山奥に巨大な鯉がいるとでも、噂を操作してあの人の耳に入れよう。

普通の人なら、そんな遠くまで釣りに来ないが、あの人は違う。

そこにヌシが居るなら、前人未踏の地だろうが、釣りに行く【釣りバカ】だ。

まずは、一つ目の任務完了かな？

よし、次に行こうか。

4日後

現在私は陳留にいる。

配下からここいらへんで程立、戯志才の両名をを見かけた、情報が入ったからだ。

まあ、ここを治める曹操を文智様から警戒せよと、仰せつかったので、偵察も兼ねている。

にしても……我等が幽州の土地並み……いや、下手したらウチよりも治安が良いかもな。

これは曹操の手並みによるものか、配下がとても優秀なのか……

まあ、それは私の部下に任せて、私は私の仕事をしなければな。

む？ あれは……

前から数人の兵士を連れ、若い男が歩いてきた。

たしか、あの男は文智様に要注意と言われた北郷一刀ではないか？

ふむ……文智様曰く、種馬との事だが……そうは見えないな。

おや？

横の路地から、白髪の傷跡だらけ女性が合流したな。  
動きから察するに相当な使い手だろう。

む……また女性が合流したな。  
今度は茶髪を横に纏めた眼鏡の女性だ。

……配下の者だろうか？　でも、随分親しそうだな……ぬ？　また女性が合流した。

今度は……でっかい……  
……はっ！

いかんいかん！　合流した女性の胸が余りにも大きくて、我を失っ

た。

……なるほど、文智様が種馬と呼ぶわけだ。

たしか、ああいうのを「はーれむ」と、言つと文智様から聞いたことがある。

なるほど、今なら理解できる。

あの男は我々（モテない男）の敵だ。

そうと決まれば、私は懐から黒い紙を出す。

先日導師から貰った呪符だ。

これをありつただけの怨みを込めて破る。

〓〓一刀SIDE〓〓

「よし、今日も異常無しだ……なあ」

普通に歩いていたら、何も無い所でいきなり転けた。

「いつっ……」

「大丈夫ですか隊長！」

「あ、ああ。だいじょ……」

笑顔で尻に大丈夫だと伝えようとした時、手の中で『ぐにっ』と言  
う感触がした。

恐る恐る目を向けると……

「うわっ……隊長、それって……」

「い、犬のう こなのぉ〜」

マジかよ……最悪……



|| SIDE OUT ||

ヒヤッハアア！ ざまあ〜

くっくっくつてめえは女の尻より、犬の尻でも追っかけてる！

あ〜スッキリした。

さて、任務に戻りますかね。

3時間後

見つからん。

足を棒にして探しているが、見つからない。

もうここには居ないのか……もしかして……

私は後ろを振り返り、一際豪華な建物を視界に捉えた。

城か？<sup>あそこ</sup>

しかし、そうになると会うのは難しくなる。

……どうする白兔。

「はあ……それでも、調べてみない事には何も始まらないか。」

取りあえず、侵入してみる事にした。

が……早くも後悔した。

人目につかない所から屋根に登ったのだが、首筋にただならぬ殺気を感じ、急いで逃げ出そうとした。

のだが、刻遅くバツチリと黒髪の女性と目が合ってしまった。

「貴様は何者だ？」

まずい……

下には屋根に上っている私に、不信な目を向けている女性。

特徴的一致から、夏侯惇だろう。

どうする……

「えっと、アッシは大工でして……屋根の修理に来たんです。」

とりあえず、誤魔化してみる。

「そっか、ご苦労。」

誤魔化せちゃったよ……

噂通りの馬鹿だ。

よし、このまま探索を「とでも言おうと思ったか？ くせ者め！」「無理だったあ！

かなりビビビ！ と来た殺気から背をむけ逃走に移る。

1時間後

なんとか逃げおせた私は、息も絶え絶えで

何故今回の任務はこんなに見つかるだろう？

と、首を傾げていた。

「春蘭華琳SIDE」

「ちっ！ 逃がしたか。」

「騒がしいわね。」

「華琳様！ 申し訳ございません。くせ者を見つけたのですが、取り逃がしてしまいました。」

「そう。まあ、何処かの間諜でしょう。気にするまでも無いけど、警戒だけはしておいて。」

「は！わかりました！ では……くんくん……くんくん……」

「……春蘭？ あなた何をしているの？」

「はい……くんくん……あのくせ者……くんくん……美味しそうな  
……くんくん……匂いがしたので……くんくん……」

「そ……そう。」

== SIDE OUT ==

結局ここでは程立、戯志才の両名を見つけることはできなかった。

が、部下が近隣の村にて発見と報告を受けた時は、今までの苦勞は何だったのかと、がっくり頂垂れた。

とりあえず、文智様に報告はしたので問題は無いだろう。

さあ、後は洛陽だけだ。

第十七話 SEKKYU 実際は結構難しい(前書き)

繋ぎの物語ですので、かなり短いです。

## 第十七話

SEKKYU 実際は結構難しい

「なあ、文智。こんなに兵糧要らないんじゃないか？」

今度の反董卓連合に参加するため、軍備の書類を処理していた時に、公孫贇ちゃんが声をかけてきました。

「こつちは連合なんだし……戦力的に言えばここまで慎重にならなくても……」

あまい！

甘いですよ

連合の戦力は確かに大きいですが、所詮は寄せ集めの軍勢。

肩を並べても、息の合った連携なんて出来るわけない！

しかも、恐らくは盟主には袁紹殿になるでしょう。

あの方の性格は貴女が一番知っているでしょう？

「うっ……確かに……」



あの人の事ですから、ぜええええったい！  
ぐだぐだになるのは目に見えています！

そうなった時、兵糧不足で満足に戦えませんでしたでは、諸侯にも、  
周りにも、示しがつかないでしょうが。

「うう……けどさ、コレじゃ兵站だって、かなりの規模になるぞ？」

はあ、この子は……

そう言って、先日兵糧不足で死にかけたのは誰ですか？

「うう……」

北の騎馬民族を蹴散らしたのは良いですが、兵糧が途中で不足して、  
右往左往してたのは誰ですか？

「うう……」

前から口が酸っぱくなるほど、戦の前には一声掛けて下さいと言っ  
てたのに、無視して自分で勝手に準備して、それに気付いた小生が  
部隊率いて助けに行って一命をとりとめたのは誰ですか？

「うっ……」

だいたい、公孫贛ちゃんの事ですから、桃香ちゃん達義勇軍の分まで……

「うるさい！」

……む？説教が過ぎましたかね？

「文智！ お前は私の何だ！ 父か？ 兄か？」

む……

「違う、お前は私麾下の文官だ！ 主に対して言葉が過ぎるぞ！ 控えよ！」

……御意。たいへん失礼を致しました。お許しを……

「うむ、解れば良い。この兵糧は見直せ、命令だ。」

はっ。

そう言って、兵糧の書類を投げ棄て、公孫贇ちゃんは去っていった。

ふむ……怒らせてしまいましたか。

しかし、公孫贇ちゃんの事ですから、義勇軍の分まで兵糧あげてしまおうでしょうね。

ふむ……ならば、別ルートで兵站の本数を増やしますかね。

今回はかなり兵糧が要るはずですよ。

袁紹さんの事ですから、ライバルは最後の最後まで呼ばずに、話を拗らせるでしょうね。

となると、今度の戦は長期化する恐れがあります。

今は小生にできる範囲で準備をするしかないですね。

はあ……全てが上手くとは行きませんね。

まったく……

あ、恒例の冒頭の自己紹介忘れた。

## 第十八話 ふんだりけつたり

皆様ここにやにやちわ。

無類の猫嫌いの李文智にございます。

さあ、やってまいりましたシ水関

( 何故か変換出ないんですよ…… )

さあ、小生の計画の重要な場面ですよ！

この戦で、我等の陣営の未来が決まると言っても過言ではありません！

その為にも、先ずは先陣を任せて貰わねば。

公孫贇ちゃん！

ここは貴女の腕の見せ所ですよ！

……とは言っても、なんか最近、公孫贇ちゃんが冷たいんですよね。

前回の事で臍を曲げてしまいましたかね？

はあ……憂鬱です。

でも、ここで頑張らないと公孫贖ちゃんは救えません。

小生フアイトです

|| SIDE 義一 ||

「おほほほほ！」

すげえ……あんな高笑いもそうだが、縦巻きロールって実物で初めて見た。

「あれって……」

隣でゲンナリしている白蓮に、コチラもややゲンナリしながら聞いた。

「あゝアレが袁紹だ」

アレがか……

正しく威張り散らす権力バカその物だな。

……美人だけど。

んで、ソレに共鳴するように騒ぎ散らしているのが……

「袁術か……てことは……」

その近くで渋面作っているピンク色の髪（言ってる何だが、ピンク色の髪ってすげえな）のせくすいーな美人が孫……策かな？

「「ご主人様？」」

うお！？

後ろからものっそい黒いオーラを感じる！

やばい、振り返った瞬間に桃香と愛沙から間違いなくOHANAS  
HIされる！

話を何とか逸らさなければ！

「ば、白蓮！アッチの人は誰だい?!」

「あ、あゝあれな！彼女は曹操だ！」

「ソツカ〜！アリガトナ！」

よし、何とかOHANASHIフラグ回避した！

無関係な白蓮も、背後にある黒いプレッシャーは、辛かったのだから。

即興の会話に嬉々として食い付いてくれた。

そっかゝあのロリな女の子が曹操か……………

……………ん？

曹操？！

あれが曹操？

ぜんぜんイメージが違う。

……………てことは、曹操の隣に居る男性が

「もう一人の天の御使い……………」



表情が強張る

話がしたい。

彼は………

== SIDE OUT ==

え〜これは騎馬隊用ので……

これは桃香ちゃん達ので……

「文智様、弓兵隊の編成終わりました。」

おや、ご苦労様です。

え〜では、西涼の馬超さんへの手回しをお願いします。

「は!」

ん? なにやってるのかって?

決まってるじゃないですか。

あ ん や く

ですよ

え？ 公孫贄に自重しろって言われてなかったかですって？

くふふふ……ソコで自重しないのが李文智クオリティーですよ。

なんせ、ここまで仕掛けて来た策の数々が回るか否か、ここで決まりますからね。

大まかな目標は、張遼さんの魏加入。

呂布、董卓、陳宮、賈馮の蜀加入。

そして董卓救出。

最後に華雄の生存。

以上が“最低”条件。

華雄さんの勧誘成功。

真の黒幕の特定。

董卓の家族の救出。

華佗、貂蝉への接触。

ここまで出来たら最高。

小生の策の最高条件が整う。

へ？ そんなんで良いのかって？

いやいや、こう言いますけど、結構難しいですよ？

華雄さんは、早めに確保しないと、関羽さんとの闘いに割って入らないといけませんし、一番最後の華佗、貂蝉への接触なんて、史実に無い小生の存在を警戒してか、貂蝉が使いの者を『ほって』返してくるんですよね……

みなまで言わないで下さい。

小生だって頭が痛いんです。

ん？

おや、公孫贛ちゃん達が帰って来たようですね。

「あゝ疲れた。」

お帰りなさいませ。

軍議はどうでした？

「不毛」

そうですか。

あ、これが現在の我が軍の詳細です。

「ん」

おや？ 義一くん達が居ませんか？

「アイツらなら、曹操の陣地に行ったぞ。」

何でも、もう一人の天の御使いに会いにいくんだと」

そうですか。

「他に何かあるか？」

その言葉に、小生の身が堅くなるのがわかりました。かつての幼馴染みに向ける親愛は感じられず、無感情なただの業務としての言葉。

……いえ……

「では、下がれ。ご苦労だった。」

……御意……

一礼すると、天幕を後にしました。

はあ……何を堅くなってきているのでしょうかね

自業自得とはいえ、主従の有り様としては、今の方が正しいのですがね

……ですが、ある意味好都合ですね。

ここは諸侯が集まっているだけあって、間諜の数が半端ないですからね。

小生の存在を隠すには、今の状況は端からは只の文官の一人にしかみえませんからね。

余程のイレギュラーが起きないかぎり……

「文智様。急ぎの報告が！」

ん？ おや、白兔。

どうしました？

「曹操軍本陣にて、程立、戲志才の姿が確認されました。」

は？ え？ それってまさか……

「おそらくは……文智様の……想像通りかと……」

うわ〜面倒くさいことになってきましたね。

第十九話

大工の文智と料理人文智（前書き）

文智の天敵

それは風

第十九話 大工の文智と料理人文智

〓〓SIDE 一刀〓〓

空気が重い……

軍議から帰ってきてからというものの、華琳の機嫌が悪いのだ。

まあ、理解できなくもない。

あの不毛な会議を延々と続けられたのだ。

華琳のイライラは最高潮だろう。

これは、春蘭や桂花は徹夜確定か。

まあ、こちらはそれ処じゃないし。

軍議中、ずっとこちらを……いや、俺を見ていた人物。

同年代と思われる、一人の男。

彼と視線が合ったとき直感的に『おなじだ』と感じた。

おそらくは、彼が幽州に現れた天の御使い。



気になる……彼は、

「失礼します」

俺の思考を中断させたのは、天幕に入ってきた銀髪の女性、凧だった。

よく、この重苦しい空気の中に入れたものだ。

「どうしたの凧。私の伽でもしてくれるのかしら？」

「い、いえ！ちが……！私はその……」

華琳のからかい……なのか？（かなり本気ぽいが……）  
華琳の言葉に顔を赤くして、慌てふためきながらコチラを、そろっ  
つとうかがってくる凧。

なぜか、その姿に白い犬耳と尾っぽが見えた気がした。

仕方がないので、助け船を出してやる事にした。

「なにかあったのか？」

俺の言葉に、これ幸いと食いつく様に、「はい！」と返事をする凧。

なぜか、華琳から小さい舌打ちが聞こえた気がしたが、無視しておこう。

「隊長にお客様が来ています。」

「客？」

「はい。島津義一と名乗っていますが……」

その一言で、俺は彼だと確信した。

「会う！　すぐに会う！　華琳、良いよな？」

俺の剣幕に圧されてか、少し引きながら頷く華琳。

「え、ええ。いいけど……どうしたのかしら？」

「ちょっと気になって。たぶん……確証は無いけど、俺と……」

俺の一言に、苛つきだけしか無かった華琳の瞳に、好奇心の光が灯った。

「面白そうね。凧、ここに通しなさい。」

「はい。」

凧が天幕から外にいる兵と二、三、言葉をかわすと、程なくして一人の男性と、二人の女性が天幕に入ってきた。

3人とも美男美女だ。

特に、男性……彼が島津義一だろう。

彼の存在感は凄かった。身長は180位だろうか。

線は細く、肩口まで伸びた黒髪は艶を放ち、端正な顔立ちに加え何とも言えない色香を放っていた。

だが反面、堂々とした立ち振舞いに、意志の強い眼差しが強い存在感を放っていた。

その顔に似合わない気迫は将のそれだった。

「お初にお目にかかる、島津義一と申します。」

「劉備玄德です。」

「関羽雲長と申します。」

……予想はしていたけど、劉備も関羽も女の子なのね。

おや？　なんか華琳の様子が……

「曹操孟徳よ」

……気のせいか？　何か嫌なものを見る感じだったんだが。  
っと、自己紹介しないと。

「北郷一刀です。」

「うちの天の御使いよ」

さりげなく、俺の存在意義をアピールする華琳。

おそらく華琳も気付いているのだろう。

彼が俺と同じであると。

「それで、何の用かしら？」

品定めする目で島津さんを見る華琳。

対する島津さんも、不敵な笑みを浮かべ堂々と返す。

「なに、俺と同じ天の御使いに会ってみたいと思いましてね。」

その一言に周りに居た春蘭達が動揺を顕にした。

華琳はやはりとさらに目を細めた。

「出来れば、二人でゆっくり話したいが……陣中なので今は遠慮しておこう。」

「あら、一刀と話したいなら場を設けるわよ？」

「結構。こつ見えても義勇軍を率いる身でね、やるこつが多いのわ。ただ、北郷さん。」

「は、はい。」

びっくりした。

いきなり矛先が此方に向いてきた。

「貴方は、何のために曹操殿の元に居るのです？」

その問いかけに、少しドキツとして目を見開くと、こちらを見据える島津さんの真っ直ぐな瞳が見えた。

意志の宿った瞳が、黒く爛々と耀いている。

その時理解した。

( ああ……この人はこの地で全てを賭ける覚悟が出来ているんだ。 )

だからこそ、堂々とした立ち振舞い。

だからこそ、強い意志

だからこそその問いかけ。

だからこそ、俺はそこに『侍』を見た。

「俺は、華琳を王にしたい。だから、俺はここにいます。」

今の俺にできる精一杯の覚悟で応えた。

島津さんは、俺の目を見て一つ頷き、優しく微笑んでくれた。華琳はその様子を見て小さく「へえ……」と、もらしていた。

「目的は達した。これで失礼させてもらおう。」

そう言つて踵を返す島津さんに「待ちなさい」と華琳から制止の声  
が掛かった。

「……なにか？」

「あなた、私に仕える気はない？ あなた共々、義勇軍の将も兵も  
面倒みるわよ。どう？」

実に華琳らしい。

オモチャを前にした子供の様な目で島津さんを勧誘している華琳。

それに対して、島津さんは少し困つたような表情で

「その言葉は俺が天の御使いだからか？」

「それも有るけど、貴方に興味が湧いたわ。それで、返事は？」

「それは光栄だが……」

そこで言葉を区切ると、更に不敵な笑みを深くし、右手の人差し指

を眉間に当ててウインクをした。

「俺にも成すべき大望が有る。残念だが、貴殿の処じゃソレは成せない。そう言う事だ。」

「そう、残念ね。」

華琳は口ではそう言いながらも、その顔はやっぱりと清々しく笑っていた。

華琳自身、彼が俺たちになびくはずが無いと、どこかで悟っていたのだろう。

島津さんは踵を返すと、今度こそ天幕を出ていった。

「悔しいですが、穢らわしい男だけど、華琳様と同じく王たる風格を持ってましたね。」

桂花の言葉に一堂頷く。たしかに、あの人の颯爽たる様は凄かった。島津と言うことは、あの島津家かな？

「ふふ、面白いじゃない。麗羽はム力つくけど、それ以上の収穫が有ったわ。」



「たしかに、孫策に、島津。今は味方ですが、この戦いが終わったら警戒しないといけませんね。」

皆が今は頼もしくも、強力な敵に気持ちを引き締める中、一人異議を唱える人物がいた。

「あの〜」

「あら？ どうしたのかしら、風？」

それは、いつの間にか俺の隣に居た風だった。

……てか、居たんだ。全然気付かなかった。

「孫策に島津さんが〜凄いの解りましたが〜私としては、もう一人警戒すべき人がいると、具申させていただきます。」

風の言葉に華琳が怪訝な表情を顕にする。

「それは、誰かしら？」

「公孫贇です。」

公孫贇？

その意外すぎる名前に全員が？を浮かべる。

「公孫贇ね……確かに、最近その武勇はよく聞くけど、それほど警戒するほどかしら？」

確かに、最近は何族や北の騎馬民族との戦いで、その武勇は轟いているが、先ほどの軍議で公孫贇を見たかぎり、普通の印象しかうけなかった。

華琳も同じく、一瞥しただけで、興味を無くした様だし。だが、風が語る公孫贇に俺たちは、戦慄せざるをえなかった。

「公孫贇はそれほど脅威ではありません。その後ろに居る人物が一番の脅威なんです。公孫贇の所には、こわいお兄さんが居るんです。」

後ろ？

それはつまり、

「公孫贇には強力な軍師が居るってこと？」

俺の問い掛けに、確りと頷く風。

「はい。今までの公孫贇の武勇もそうですが、幽州の治安、経済、産業など、民の口々に幽州の豊かさが上るのも、その人が影から日向から動いて暗躍した結果です。」

それは凄い。確かに、軍略、政治、経済に通じた優秀な軍師が居るのなら、公孫贇のこれ迄の活躍にも納得がいく。

「ちょっと待ちなさい」

だが、華琳はそうはならなかった。

いや、俺や他の面々と違い、冷や汗を浮かべているほど、その表情には戦慄が張り付いていた。

「桂花、それほどの優秀な軍師が公孫贇に居るなんて、聞いたことが有るかしら？」

「……………いえ、ありません」

???

どういふ事か俺達は分からなかった。

華琳は何を？

「風、その軍師の名は？」

「わかりません」

「貴女と稟は公孫贄の所にも居たことが有るのでしょうか？ その時に会うなり、話すなりしなかったの？」

「いえ、話した事は有りましたが、名前は聞き出せませんでした。」

「顔は？ 特徴は？ 何か覚えている事はある？」

「なにもありません」

風の返事に華琳の表情は更に強張る。

そこに稟が

「華琳様。私も星殿もかの御仁と会いましたが、名前をはじめ、容姿、特徴など、一切を覚えていないのです。」

「だから私達は文官さんと呼んでいました。おそらくは、文官さ

んは導術が使えると思います。」

導術の件で秋蘭達がざわついた。

対して、俺、春蘭、季衣が？と首を傾げた。

「……………」

華琳は更に厳しい表情で何かを考え込んでいる。

「……………成程。考えれば考える程厄介ね。風の言う様に、一番の脅威かも知れないわね。」

流石に限界だった俺は、華琳に聞いてみた。

「なあ、華琳。何がそんなに脅威なんだ？」  
この質問で、周囲の空気が固まった。

「か……………一刀、まさか、分からないのか？」

やべっ……………秋蘭の言葉で、やってしまった感が……………

「はあ……やっぱり男は馬鹿で下賤な生き物ね！」

「あのね一刀、あなたは春蘭に勝てる？」

「無理！」

「当然！」

俺と春蘭の阿吽のやり取りにため息をはきつつ華琳は説明を続けた。

「じゃあ、春蘭。あなた姿が見えず、気配もしない、居場所も分らず、音もしない。春蘭からの攻撃も届かない、けど相手からの攻撃は春蘭に届く。そんな相手に勝てる？」

春蘭は頭から煙を噴いていたが、俺は初めて背筋が凍った。

見えないと言うことは、攻撃できない……倒せない。

けど相手は攻撃できる。

しかも見えないのだから、正面からでなくて良い。

背後から忍び寄り、一突きするだけでいい……なにそれ、どんなチート？

「一刀は理解したようね。春蘭は？」

放心しきっていた春蘭は、華琳の言葉に我を取り戻し、力強く

「どんな相手だろうと、倒す！」

と宣言した。

「ふふ……それでこそ姉者。」

どこかウットリしている秋蘭がいるが、放置しておこう。

「桂花、出来る限り公孫賛の軍師の情報を集めなさい。」

「はい。」

「ふふふ、面白いじゃない。その正体暴いてみせるわ。」

好戦的に笑う華琳。

最初の重苦しい不機嫌な空気も、華琳はどこ吹く風だ。

「あの文官さんの事ですから、この戦場にも何かしら仕掛けていると考えられます。」

「面白いわ。この戦、表も裏も勝つわよ。」

華琳おじの湯に皆が気を引き締めた。

S I D E O U T

さあ、行きますよ！

イメージするのは、赤い弓兵の双剣！

トレース・オン！

.....

なんでフライパンとオタマ？

おっと！いつの間に小生SIDE!？



今回長いから、小生の出演無いかと思ってました。

へ？ なにやってるのかって？

いや、転生時に貰った能力の確認を少し……

小生は5個位決めたらもういいやと言ったら、じゃあ人気の高い順でくれてやるって言われたもので……

で、確認したら投影魔術が有るじゃないですか！

まあ、チートな力ですが、貰ったからには使ってみたいじゃないですか！

んで、エミ屋さんの双剣を投影したら、なぜかフライパンとオタマが手に有ったんですね。

なぜ？

試しに、もう一度……今度はカリバーンにしてみますか。

トレース・オン！

今度は中華鍋ですか……

あんれえ？

ちよつと説明書を見てみますか……

……

なんですかこの……

u n l i m i t e d   c o o k i n g   k i t c h e n   て……

えゝとなになに？

台所用品や大工用具などに特化した投影……なんでさ……

たしかにチート好きく無いって言ったけど、これは無いんじゃない？

……まあ、いいか。

えゝこちらが投影できるもの一覧ですね。

ふむふむ……刃物は投影出来ないけれど、鈍器や調理器具等は投影可能ですか。

原始人や、某連打の名人みたいな戦い方が出来そうですね。

ん？ たしか、某世界一有名な土管工のおじさんも、おんなじ様な戦い方をしていたような……？

「文智様！」

おや、白兔。

そんなに慌ててどうしました？

「は！ 曹操が文智様の存在に気付いた様です！ コチラの陣営や幽州に間諜を放ち、探っている様子！」

あらあら。気付かれましたか。

まあ、今まで公孫贇ちゃんだけでは、不自然な勝率でしたからね。

「しかし、なぜここにきて……！」

ん？それは多分、程立……あ、今は程イクさんでしたか。  
彼女のせいでしょうね。

「馬鹿な！ 文智様を覚えていたと！？ あり得ない！」

ふむ、白兔は『黄金睡眠』と言うのを、知っていますか？

「い、いえ。」

赤ん坊つてのは、凄いですよ〜

大人より遙かに視野が大きく、しかも視野全体を観ている。

我々大人より遙かに多くの物を観ているのですよ。

そして、観たものを寝ている間に整理し、記憶する。

赤ん坊がよく眠るのは、色々な物事や人物を覚える為なんですよ。

彼女の睡眠は、その『黄金睡眠』と同じなのでしょう。

小生の暗示も、会ったその日に総てを忘れる訳では、無いですからね〜。

ちょっとした違和感や記憶を積み重ねて……

「記憶するに至ったと。」

その通り。

しかし、厄介ですね。

これからの行動は慎重にならないと。

はあ、シンドクなってきた。

第二十話 にゃる……いやいやいや！（前書き）

昼飯中の投稿に御座います。

かなり長くなってしまいました。

内容は薄いかも……

いや、まじスンマセン。

第二十話 にゃる……いゃいゃいゃ！

……

これは、とんでもないですね。

おや、こんばんわ。

夜にテンションがMAXになる、夜型人間の李文智でございます。

今ですね、投影の実験をやっているのですが、妙な物を見つけましてね。

『ボールの様な物』というやつなんですけど、試しに投影してみたのですが……

何ですかこの禍々しい魔力は……

ちと診てみますか。

解析・開始

真名『名状し難きボールの様な物』

魔力『マジパねえつす!』

ランク『ヤバイつす! 《約束された勝利の剣》並つす!』

解説『ランクEXの宝具。真名を解放すると、この世に混沌をもたらす。SAN値に注意しないと自滅してしまう。作者としては、絶対に使用しない様に願うばかりである。』

…

…

…

…

…

なんですかコレ

てか、パネエとかヤベエとか、作者って……

メタ公認にも程があるでしょうが!

とりあえず、この物騒なモノは破棄しておきましょう。

さて、良い夜ですね。



月が若くて、雲も多い。  
夜襲には持ってこいですね。

小生の正体の事も有りますし、曹操さんにはちょっとぴり臍を噛んでもらいましようかね。

== 白兔SIDE ==

「なあ、白兔……ホンマにこの位置からでええんか？」

夜の闇に隠れ、連合軍の陣地の傍にある林の中に潜みつつ、部隊の指揮官の張遼將軍が聞いてきた。

月夜とは言え、一寸先は正に闇。

暗い中、その足取りは確りとしており、この女傑が武だけでなく、密偵の様に夜目も利く人物で有ることを語っていた。

「ええ、この位置から真っ直ぐ攻めるよう、文智あつちより指示されています。」

「せやけど、この位置から突撃したら、公孫賛の陣地まで……しかも本陣に入っただけで？」

確かに、この先は曹、馬、公孫の3陣営が直線で並んでおり、此所を攻めれば連合の3つの軍に大打撃を与える事ができる。

「はい、構わず本気で攻めてくれて結構です。ここで手を抜かれると、我々の関係がバレる可能性がありますので。」

「そっか」と小さく返して、この話は終わりとなった。

文智様と董卓と間に交わされた盟約は、この戦いには意味はない。なぜなら、この戦いが文智様が董卓に払う対価なのだから。

静かに時が過ぎていく。

今夜は雲が多く、月が隠れやすい。

夜襲には持ってこいだ。

敵も馬鹿ではない。

当然夜襲が有ることを予測しているだろう。

だからこそ、文智様は私をここに寄越した。

そこそこ強力な策を携えて。

「しっかし正直、気が乗らん。協力者を攻撃するのは。」

！

驚いた。声の主は気配すら無く私の隣に居た華雄將軍でした。

いつの間に居たのだろう。本職の私が気付けないとは……

この人も猪だとか言われているが、本質は違うのかもしれない。認識を改めなければ。

「本気で攻撃してもらわなければ困ります。この夜襲の被害も、文智様の策の一つなのですから。」

「はああ、被害も策の内かいな。徹底しとるな。せやけど、よくそんな策を公孫贇が許可したな。」

「いえ、公孫贇様はこの事は知りません。」

私の言葉に二人が息を飲んだ。

「な、な、ど、独断専行かい！」

「ついでに言うと、董卓殿との同盟も文智様の独断専行です。」

「そんなことして良いのか？」

「いいえ。バレたら文字通り、首を切られるでしょう。」

アツサリと言い放つ私に目を見張る二人の将軍。

「なんでや、なんでそこまでするんや。」

「護れないからです。」

「護れない？」

「はい。この戦いが終われば、勝っても負けても群雄割拠の世が、来るでしょう。」

そうになると、真っ先に消えるのは力の弱い弱者です。」

「その中に公孫贄も入っていると？」

「はい。ですから、そうならない為に、文智様は公孫贄様に嫌われようが、蔑まされようが、殺されようが、出来る限りの事をするのです。」

そう、文智様にはその覚悟がある。

故郷を、民を、愛する人を護る為に総てを賭ける覚悟が……

そして、総てを失わず、救う覚悟がある。

だから私を始め、帽子屋、騎士、猫、そして迷子はその人に忠誠を誓うのだ。

「だから、私も命懸けなんですよ……全てに。」

「はあく難儀やな。あんたも、しい君も。」

「ほつといてください。……つか、いつの間に文智様と真名を交換したんですか？」

「ん〜酒宴の時にな。」

なんて話していると、敵陣に動きがあった。

「別動隊が動いた様だな。」

「ええ、敵は夏侯淵將軍のはず。知勇に優れた弓の名手は、必ずこの策に引っ掛かるでしょう。」

「たいした自信や。ここはしい君のお手並み拝見やな。」

|| || S I D E 迷子 || ||

……動いたか。

自分は木の上で戦場を見下ろしていた。

董卓軍 2000

夏侯淵 2500

兵の数は僅かに夏侯淵が上。

予め夜襲が有った場合の進軍経路を予測していたのだろう。

兵の配置に無駄がない。

対する董卓軍は勢い任せに突っ込んでくる。

夏侯淵は闇に紛れた敵軍を火矢で炙り出し、冷静に矢を浴びせて殲滅している。

冷静だ。

流石は夏侯淵か。

だが、まだまだご主人様の掌の上。たなしころ  
貴様はこれから絶望を知る。

夜襲部隊が引き始めた。予定通りだ。

夏侯淵は追撃せず、現状を維持している。

どこまでも優秀な将だが、これも予定通りだ。

自分は、左手にもった松明を掲げ、ゆっくりと左右に振った。

すると背後の林から第二の夜襲部隊が姿を表し、正面を警戒する夏侯淵軍に突撃した。

突撃した隊は兵500。相手の5分の1。

だが、横槍を喰らわせるなら、十分な数。

だが、流石は夏侯淵。

この横槍にも気付き、冷静に弓を射って突撃を止めた。

だが、それが畏だ。

敵の背後から更に500の兵が突撃した。

流石にこれは防げなかったようだ。

弓兵中心の部隊では、懐深く入られると極端に弱くなる。

更に、最初の部隊2000が再度突撃してくる。

この局面で夏侯淵が打てる手は一つ。

後方に下がり本陣に夜襲を知らせ、援軍を待つ。

己でかたをつけようと、本陣に報せなかったのが仇となったな。

堅実な行動こそ、奇策を破る一手と知れ、夏侯如才よ。

だがどうして、兵を半分に減らされた夏侯淵は粘り強かった。

援軍が来るまで本当に持ちこたえるとは……

まあ、将もない部隊では仕様がなにか。

さて、敵の注意も此方に向いている事だし、相手が将を探し始める前に決定打を撃つか。

自分は松明を対岸にある林に向けて、大きく円を画くように振った。

|| | S I D E | | 白兔 || |



「合図です。行きましょう。」

今まで静かに伏せていた私達は、虎が獲物を狩るが如く駆け出した。敵の注意は別動隊に向いている今が好機！

「全軍突撃！」

華雄將軍の号令に兵達の雄叫びが響く。

その突撃は陣地を囲んでいた防御柵をやすやすと貫き、敵陣に雪崩れ込んだ。

急に侵入してきた敵に曹軍の兵士は驚き、抵抗する間もなく蹂躪されていった。

方々で敵襲の銅鑼が鳴り、混乱の火が上がる。

私はその中で冷静に曹軍と馬軍の兵糧庫を探しだし、火を点けた。

そして真っ直ぐ進み、先に見えるは公孫賛様の本陣！

華雄將軍は気が乗らないなんて言って、一番ノリノリで突撃してい

った。

突撃する華雄部隊。その時、華雄將軍の足元に一本の匕首が突き刺さった。

「む!？」

《ご苦労様ですね。まさかここまで速い突撃とは、時間稼ぎに遊びませんか？華雄さん》

華雄部隊の突撃を止めたのは、我が主李文智と親衛隊だった。

「ほう……私と闘うと？似合わん事はしない方が良いぞ。」

《そうですね。でも足止めはさせていただきますよ。》

「その言葉、後悔するなよ!」

気合いと共に文智様に向かって華雄將軍が駆け出す。

斧を振り上げての怒濤の突進。

対する文智様はゆっくりと後ろに飛び、袖を振って5本の匕首を投

擲する。

低く飛ぶ匕首は全て華雄將軍の足を狙って飛んでいた。その時、華雄將軍が目の前の地面に斧を叩きつけた。

ドゴン！

迫り来る匕首を斧が産み出す破壊の暴風が弾き飛ばす。

なんと言う力！

流石の文智様も、笑みを浮かべている口元がひきつっていた。

「これが、お前の闘い方か。武人の闘い方ではないな。」

《そりゃあ、当然ですよ。小生は文官だし……にしても、凄まじい力ですね〜。》

「お前なら鍛えればできる様になるさ。」

《いや〜無理！ 小生は筋肉付きにくい体なんですよ。》

そう言いながら、両手に4本づつ匕首を構える。

対する華雄將軍も斧を前に構える。まるで力を溜めるように、まえ屈みになり、膝を曲げる。野生的でしなやかな腿、脹ら脛の筋肉が膨らみ、力を解放されるのを今か今かと待っている様だった。

(あゝ文智様死んだなこりや。)

と私が諦めていると、救いの声が間に入った。

「華雄！ 撤退や！」

おお！ 張遼將軍、良い間です！

流石に気を削がれたのだろう。  
華雄將軍は構えを解いた。

「時間だそうだ。中々に楽しめたぞ、文智。今度はお前の本当の得物でやるう。」

《ははは……流石華雄さん。バレてましたか。》

「当然だ。またな、文智。」

《はい。お休みなさい。》

華雄將軍は「フツ」と小さく笑うと、踵を返した。

《さて、白兔。貴方は引き続き、董卓さんをお願いしますね。連絡には迷子を使ってください。》

「は  
」

無茶をするなど内心溢しつつ、私は本来の任務に戻るのだった。

|| SIDE OUT ||

|| SIDE 一刀 ||

夜が明けた。

結局、皆徹夜だ。

俺は結局、部下達と火を消して回った。

「沙和、ソツチはどうだった？」

「駄目ですのお。特に兵糧庫は全滅ですのお。」

くそ！

やられたな。

これじゃあ戦が出来ない。

腹が減ったら何とやらとは、よくいったものだ。

「取り敢えず、華琳に報告しに行こう。」

「了解ですのお。」

とにかく、兵糧の事は報告しなければと、本陣の天幕へ向かった。

天幕の中に入ると、華琳の前に跪く秋蘭の姿があった。

「何か弁明は有るかしら、秋蘭？」

「有りません。全ては私の不明の致す事です。」

華琳が大鎌を手にすると空気が冷たいモノへと変わった。

そうか、昨日秋蘭は敵と戦い、見事に裏をかかれたんだ。

思わず、息を吞んでしまっ。

「……………」

「……………」

どれくらい時間が経っただろうか、まだ数秒しか経ってないだろうが、緊張のせいで何十分か経っている様に思える。

やがて、華琳が小さく息を吐くと、大鎌を納めた。

「まあ、今回は仕方無いわ。あそこまで何重に奇襲を重ねられたらね……………今回は、あなたの責任より敵を褒めましょう。」

「では、私は……………！」

「お咎め無しよ。不服に思うなら、次の戦で挽回なさい。」

「は……………はい！ 必ず名誉を挽回致します！」

「期待してるわ。はい、秋蘭の件はここまで。桂花、今回の夜襲での損害は？」

「はい、今回の夜襲で死傷者は2350人。内死者は1710人に昇ります。」

「……全体の2割ね。戦の前にこつも兵を減らされると、地味に痛いわね。」

おっと、コツチも報告しなければ。

「華琳、こつちの方はもつと痛いぞ。」

全員の意識が此方向に向く。

「何があったの？」

「兵糧がやられた。全滅だ。」

俺の言葉に全員の顔に苦いものが広がった。

さっきも言ったが、食料がないと兵は戦えない。



いま俺達は、戦以前の問題に直面してしまったのだ。

「……桂花、陳留から兵糧が届くのはいつ？」

「早くて明日の朝です。」

それまで飯は無しか……季衣なんて今にも泣きそうな顔をしている。

暗く、絶望ムードが漂うそんな時、珍客が来訪した。

「失礼します！ 幽州太守公孫贇殿がお見えです！」

公孫贇？

こんな時に何の用だろう。

周りを見ても首を傾げている。

華琳も真意を計りかねてか、眉をひそめている。

「……取り敢えず、通してちょうだい。」

「は！」

兵が下がると、代わりに公孫贇が入ってきた。

「よぉ〜曹操殿！昨日は互いに災難だったな！」

「そうね、災難だったわ。それで？ なんの用かしら？」

公孫贇は明るくアハハと笑い、

「冷たいなぁ〜お互い災難にあったもの同士じゃないか。仲良くしようよ〜W」

「うわ、うっざぁ〜」

華琳も嫌そうにしている。

「こっちはそれどころじゃ無いってのに……」

「その災難の後始末が大変なの。手短かに用を言ってちょうだい。」

「つれないなあ……まあ、アレだ、兵糧を持ってきてやった。」

!!

兵糧!?

助かる、これで食を繋げる!

皆の表情にも、明るいものが差した。

だが、華琳だけがその目を鋭くし、憤慨した。

「あら、他人に施しとは、随分余裕ね。憐れみかしら?」

「いや、違うよ。さっき馬超のどこにも兵糧届けに行つてさ、ほら、馬超のどこも同じで兵糧全部やられちゃったじゃん。うちと馬軍で、相互支援の同盟結んでるんで、向こうは兵を、うちは兵糧を支援してるんだ。」

「相互支援?! いつの間に……」

桂花が声を上げた。

その表情は驚きに染まっている。

「驚いたわね。随分と手回しが良いのね。」

「はは……一応な。んで、馬超から曹軍も兵糧全滅だって言っじやん。だから、こうして届けに来たって訳。」

「そう、でも止めておくわ。此方はまだ方策を決めている最中だし。」

華琳はやんわりと断ったが、そこで緩く笑っていた公孫贇の表情が堅いものになつた。

「では、どうする？ このまま撤退するか？ それは無いだろう。まだ戦つてすらいない。ここで引いたら笑い物だ。」

「そうね、それは無いわ。」

華琳は霸王だ。完璧な王を目指す華琳に、戦わずしての撤退はあり得ない。

「では、袁紹にでも泣きつくか？」

その一言で、華琳の表情に怒りが走った。確かに、馬軍が頼れないなら有力な諸侯は、公孫、袁紹、袁術位しかない。

公孫贇を拒むと、袁紹、袁術に頼らざる得ない。

そして、華琳にとって袁家に借りを作るのは屈辱以外の何物でもない。

唇を噛みしめ黙考する華琳。

やがて、大きくゆっくりと息を吐くと、落ち着いた様子で語りだした。

「わかったわ。ありがたく、援助を受けるわ。」

落ち着いた、いつもの華琳に戻ったように振る舞っているが、俺はその手がきつく握り締められているのを、見た。

「そうそう、同じ轡くつわを列べているんだから、助け合おうよ。」

華琳の返事に、また緩い笑顔になった公孫贇。

案外食えない人物なのかも知れない。

それとも、一連のやり取りも、あの謎の軍師によるものなのか……

「取り敢えず、大食いが居るって聞いているから、3日は置いておくぞ。」

たらふく食える量を貰えるからか、季衣から歓声が上がった。

その気遣いは本当にありがたい。

「たすかるわ。ありがとう……公孫贄。」

「いって、いって！ んじゃ、お互い頑張ろうな〜！」

そう残して公孫贄は去っていった。

外では桂花が援助物資の受け渡しを行っている。

程なくして、桂花が戻ってきた。

「無事受け渡しが終わりました。兵8000十分食べれる量です。」

「そう……」

そう答えた瞬間、ドカッと言う音が天幕の中に響いた。

音の方を見ると、華琳が座っていた椅子を蹴り飛ばしていた。

その表情には隠せない程の憤怒が顕れていた。

「やられた……わね……」

悔しそうに親指の爪を噛む華琳。  
こんな華琳は初めて見るかも知れない。

「はい。体よく恩を売られましたね。」

「ええ……風。」

「ZZZ」

華琳が風を呼んだが、相変わらず寝ていた。

「起きなさい。」

「おおう！」

いつもの如く稟が起こして話が進み始めた。

「今回の事は例の軍師の策かしら？」

「その可能性はじゅくぶんあります。第一、公孫贇に華琳様を苛つかせる程の腹芸は、出来ないと思います。」

「そうね、その点に関しては同感だわ。」

皆が頻りに頷いていると、風は更なる爆弾を落とす。

「もしかすると、今回の夜襲も文官さんの手引きだと思えます。」

「……………!?」「……………」

「馬鹿な！ つまりその軍師は華琳様をわざわざ苛つかせる為だけに、味方を殺したと!？」

秋蘭が叫ぶ。

同感だ、正気の沙汰とは思えない。

華琳含め軍師達は青くなりながらも、考え込んでいた。

因みに、春蘭、季衣は会話に着いていけず、既に解脱しており、口から白い靄を出していた。



静かで良いけど。

「……可能性はありますが、まず無いでしょう。」

いち早く思考を纏めた桂花が意見を述べた。

「理由は？」

「旨味が有りません。」

馬軍は兵糧と兵600が、対して公孫軍は兵糧は無事ですが、兵3000被害が出ています。

もし風の言が正しいとするならば、公孫軍の総数は7000。実に兵の半分を今回の代償にしたとなります。」

「確かに、私に恩を売れる以外の旨味は無いわね。」

「またもや沈黙が場を制す。」

誰もが思い思いに思考を廻らせているだろう……やく2名を除いて。

停滞していた場を動かしたのは、華琳だった。

「ふう、やめましょう。私達はまだ戦いの場にすら立っていない。見えない相手の頭の中なんて、解るわけないわ。」

風の言は一考の余地があるけど、今私達がすべきは目の前の事よ。  
さあ、皆持ち場に帰りなさい。  
桂花は謎の軍師の情報集め続けて。」

賛成。

『下手な考え休むに似たり』だ。

やることは沢山ある、体を動かそう。

こうして、俺達は解散した。

……なんか忘れているような……

余談では有るが、魂の抜けた2人は昼過ぎまで正気に戻らず、仕事をサボったことで華琳にこっぴどく怒られたそう。

== SIDE OUT ==



第二十一話 N Kの天気予報の熱射病予報の絵、パリロに見えるんですよ

それは私だけでしょうか？

てか、今の人にパタ 口ってわかる人居んのかな？

では、頼みましたよ猫。

「まっかせて！ ちゃんとボクが皆を幽州に帰してくるから。」

ええ、くれぐれも見つからないで下さいね。

「りよおつかい！ ではでは、死体の皆様！此より出発しますの  
で、指示されるまで絶対に棺桶から出ないで下さいね〜！」

可愛らしい号令に棺桶が了解とばかりに、ガタゴト揺れています。

バレるなって言ってるのに、理解しているんでしょうかね？

どうも、死者に鞭打つ男、李文智でございます。

現在小生の前には、幾つもの棺桶が馬車に乗っかっています。

この棺桶には昨日の夜襲で命を落とした死者が入っています。

ざっと3000樽は有りますかね〜。

これみんな死者なんですよ。

………書類上は

まあ、真相はさておき、取り敢えずリタイヤ組を幽州に帰しませんと、ボロが出ますからね。

兵力は半減してしまいましたが、悔しそうにしている曹操さんが見れるので良しとしますか。

さて猫、出発してください。

「は〜い！ しゅっぱつしんじ〜！ おしんじ〜！」

……あのこはギャグのセンスは0だと前から何度も言ってますが…  
…懲りませんね〜

さて、これで証拠は無くしたので時間は稼げるでしょう。

そろそろ、軍議の時間ですか。

公孫贛ちゃんが帰ってくるまで何してましようかね？

ふむ……………

迷子

「……」

小生の小さな呼び掛けに、背後から応答があった。

全身を黒の装束で包み、影の如く浮かび上がるシルエット。  
全体のラインから女性だと分かる。

彼女は迷子。

主に破壊工作や罖作成に長けた小生の密偵です。

小生の密偵は5人いて、頭の白兎は諜報、騎士は要人警護、帽子屋は商業、猫は変装、そして迷子は破壊工作や罖作成……そして暗殺。それぞれ得意分野がハッキリとしており、小生がひたすらその得意分野を研かせた、正に手足と呼べる5人なんです。

……………なんだから、ワザとらしい説明文になってしまいましたね。

さて、白兎から何か連絡はありますか？

「否、計画順調」

ふむ……そうになると、やる事無いですね。

ん？どうでしょうかね？

公孫贇ちゃんとギクシャクしはじめてから、微妙に仕事を回して貰えないんですよ。

＝ちよっぴり白鬼さ い ど＝

キュピーン

「は」

「ん、どないした？」

「文智様が楽をしている気配が……」

「ふん……仲ええな〜じぶんら。」

「これは帰ったら O H A N A S H I ですね」



＝＝さいどあつと＝＝

ぞくう！

おおう！

何故か寒気が……

なんか白兔を戻してはいけない気がしてきました。

「主」

ん？ どうしました迷子。

「太守帰還」

おや、そうですか。

では、また用が有れば呼びます。

「承知」

そう残し姿を消した。

まるで忍者ですね。

にしても、何で彼女はあんなしゃべり方なんでしょうね？

昔は普通に喋っていたのに……

と、なんてやってる間に公孫釐ちゃんが帰ってきましたね。

お帰りなさい。

「もどった。連合の盟主は袁紹に決まった。」

ようやくですか。

長々と引っ張りましたね。

「仕方ない。昨日の夜襲で袁紹以外は、粗方被害を受けたからな。」

あらあら、狙ってた訳ではないのですが、棚ぼたでしたか。  
いや案外、霞ちゃんが気を利かせてくれましたかね？

まあ、どうあれ好都合です。

「先鋒は我等が受けた。参謀を集める、軍議を開く。」

はい。

次は戦ですね〜

〓 〓 一刀 SIDE 〓 〓

「公孫贇が今回連れてきている文官は6名です。嚴疇、白吏、李震、李寛、黄干、そして参謀頭の趙火。」

連合の軍議の後、桂花の報告が待っていた。

例の謎の軍師の件だ。

「6人……今回の夜襲の事とかを考えると、公孫贇の近くにいるその6人の誰かでしょうね。」

たしかに、夜襲に合わせた公孫贇の対応の早さから考えて、近くで公孫贇に入れ知恵しているのは間違いない。  
それも、すぐ近くだ。

秋蘭の言う通りその6人の中に居るだろう。

「桂花、その中で公孫贄と一番親しいのは誰かしら？」

「参謀頭の趙火です。」

公孫贄と真名を交換しかつ親しいのは、この人しかいません。調べた所、この人物は各地を転々とし、何かの行動をしていた様です。」

なるほど。

それは怪し……………

おや？

なんか春蘭が考え込んでいる。

また珍しい。

珍しいついでに、何を考え込んでいるのか聞いてみる事にした。

「どうかした春蘭？」

「ん〜その、『趙火』でどっかで聞いたような……………」

うを！

てがかり発見！

「何処だ！ 何処で聞いたんだ！？」

「それが、思い出せなくて……」

「思い出すんだ！ 春蘭んんん！」

勢い余って春蘭の両肩を掴み、ガクンガクン揺らす。

「うきゃあ！や、やめ……！」とか聞こえるが止めない「ぐほあ！」  
つて、事をやってたら春蘭にグーで殴られた。

「いたい。」

「うるさい！ お前が悪い！」

「今のは一刀が悪いわ。」

「そつだぞ。いくら姉者が相手とはいえ、やりすぎだ。」

「馬鹿ですね。」

「兄ちゃん……」

「zzzz」

「はあ……」

やめろ！ そんな可哀想な目で見ないでくれ！

「それで、春蘭は何か思い出せた？」

「ん〜……桂花、その趙火の字は繚原ではないか？」

「！ はい！ その通りです！」

「おお！ なら覚えている。洛陽に赴いた時に、一刀の事を聞いてきた商人だ！」

おお！ まさかのビンゴか！？

華琳も同じらしく、少し興奮気味に確認の質問をだす。

「春蘭、その趙火の、顔を、覚えている？」

華琳の質問に首を傾げる春蘭。

その様子を全員が唾を飲み込み、無言で見守る。

やがて顔を上げた春蘭の答えは……

「駄目だ。どうしても思い出せない。」

ピンゴ！

その場にいる全員が、今度は息を飲み、互いの顔を見合つ。身近に居た手掛かりに、誰もがまるで……  
そう、まるで宝探しの暗号を解いたかの様な、興奮に包まれていた。

「当たりみたいね。」

「ですね。まさか、こんな身近に手掛かりが有ったとは……」

「ですが、これで調査が進み、対策が立てられるかもしれません。」

「だな。まずは一步前進だ。」

「桂花、その趙火について更に詳しく調べ挙げなさい。」

「はい……」

命令を出す華琳はとても嬉しそうだった。

「ぐう」

色めきだつその中で、風だけが静かに寝息をたてていた。

〓〓風 黄金睡眠〓〓

文官さん

趙火繚原

公孫賛

夜襲

つながらない



趙火

本当に？

否

公孫贊

呼んでいた

なんて？

趙火？

否

遼原？

否

公孫賛

呼んでいた

思い出せない

趙火は何

畏

誰の

文官さん

つまり、私達は掌の中の孫悟空。

||  
||  
S  
I  
D  
E  
O  
U  
T  
||  
||

オリキャラ設定資料 文智麾下密偵5人衆篇

白兔（本名 太史享）

能力

統率力1

武力1

知力2

政治力1

魅力1

文智の情報収集専門の間諜。

最低の能力値だが、気配遮断、気配察知、穩形、遁走に長けている。

大抵の人物には見付かることは無いが、春蘭、鈴々、恋には何故か見付かってしまう。

だが、それでも逃走し生き残るすごい人。

騎士（本名は関平）

能力

統率力1

武力3

知力 1  
政治力 1  
魅力 1

幼い頃に文智にスカウトされた少女。

関一族であり愛紗の親戚。

要人守護に長けており、公孫釐を影からいつも護衛している。

帽子屋（本名は関興）

能力  
統率力 1  
武力 1  
知力 2  
政治力 3  
魅力 2

幽州で帽子屋を営む。

その実態は商人の情報網を活かした文智の間諜。

関一族で関平の弟。

猫（本名趙火 繚原 真名 鳩）

統率力 2  
武力 1  
知力 3  
政治力 2  
魅力 1 (条件付きEX)

変装の名人

文智の影武者をしたり、公孫贄の影武者をしたり、敵兵士に化けて潜伏したり、公孫贄の参謀頭をしたり、色々忙しい女の子。身長が低く120センチしかない。だが、愛らしい幼顔に、天真爛漫な性格で公孫軍兵士の心をわし掴みのボクっ娘。

ギャグセンスは0

迷子 (本名 不明)

統率力 0  
武力 3 (条件付きEX)  
知力 2  
政治力 0  
魅力 0

破壊工作、罫作成、暗殺に長けた文智の密偵。

文智に異常なまでの忠誠を誓っており、文智の命令ならどんな事で

もする人物。

本名、出身、経歴など、全て謎に包まれており、全てを知るのは文智のみである。

公孫贇が嫌い。

第二十二話 踊る三國志 シ水関を封鎖せよ！ 前編

皆様、この頃どうお過ごしでしょうか。

優雅に午後のお茶を楽しんでいる李文智にございます。

は〜……………平和だね〜

「戦場。平和違う」

現実逃避ぐらいさせてください。

小生達はこれから、九千で二万に立ち向かわなければ、ならないんですよ？

兵法の基本は数を多く揃えるのに……………

戦いは数だよ兄貴！

「兵法同意。然、最後某公国軍將軍、微妙」

……………なんで貴女がドル閣下を知っているんですか……………

「自分、大斧、是夢」



なかなかマニアックですね……

「機動戦士大好」

そ、そうですね。

かなりツッコミ所が多いですが、まゝ貴女ですからね……なんとなく納得してしまいます。

「アツガイは夢と希望の塊だ。」

ソレについては同意しておきましょう。

しかし、久々にまともに喋ったと思ったらアツガイ談義って……

「気にするな。それより、自分、作戦、定位置移動。」

はいはい、頼みますよ迷子。

「承知」

さて、ざっと現状を説明しときますかね。

現在小生達はシ水関攻略の先鋒を、桃香ちゃん達義勇軍が務めて、

その後ろを我々公孫軍が固めているといった状況です。

最初は公孫軍が務めるつもりだったのですが、軍議に同席していた義一くんが

「白蓮達は夜襲で半分の兵を失っている。対して、俺たちは夜襲での被害がない。策もあるので、先陣は俺達に任せてくれないか？」

と、いうので…

「では私が！」

「いや、私が！」

「だから、俺がやるって！」

『どござどござどござ』

「ダ ヨウ!？」

とゆゝやり取りがありました。航りに船とお願いしたんです。

まあ、策と言っても大体想像はついているんですがね。

そう言う訳なので高見の見物決め込んでいます。

あゝお茶がおいすいゝ

お、始まりましたね。

ずずずゝ

ほう、テンプレですねゝ

ん？

ちゃんと描写しろ？

えゝめんどい。

はい。分かりましたから、石を投げないように。

仕方ないですねゝ

じゃあ、現場リポーターの迷子さゝん！

「迷子 SIDE」

はい迷子です……ってなるか！

……はあ。

ご主人様のおふざけは今に始まった事では無いですが、自分にまでメタ発言をさせるのはやめてほしい。

さて、自分は今シ水関を見渡せる丘の上にいる。

陣容は反董卓連合5万にシ水関守備隊2万。

連合の先陣の旗は『劉』、『関』、『張』、そして『の中に十』。

その後ろに我等公孫軍が控えている。

最初は策もなくただ進めと袁紹の命令だったが、二万の守る関門を力押しで落とすのは難しい。

なればこそその策。

太守様の根気強い交渉のすえ、何とか最初の一合は此方の裁量を貰えた。

返せば一合で決めなければ、大損害を出す力押しを強要される。

運命の一戦だ。

「壮観やなく辺り一面敵だらけや。」

張遼が女牆の上に立ち迫り来る連合軍を見渡している。

其を隣にいた華雄がたしなめる。

「降りろ張遼。矢避けの女牆の上に居たら意味がないだろうが。」

「へいへい。しっかし変わったな。ホンマに華雄か疑ってまうで。」

確かに、張遼の隣に立つ彼女からは猛々し鬪気と、それに反する静かな物腰をその身に宿していた。

以前の猛々しいだけの彼女からは、信じられないほどの変わりようだ。

「しかたあるまい。文智と出会い、己がどれだけ慢心していたかを思い知らされた。それに加え、こんな物を貰ってはな……」

そう言って、己の腕を撫でる。

その白く眩しい肌をした腕には、鉛色のゴツゴツした腕輪がはまっていた。

普通の腕輪ではない。

禍々しい模様が彫られており、さらにはその腕輪を封印するように、南京錠の飾りが一つ付いている。

「『凡人の才』やったか？ 己の力を封印するつちゆう力があるんやっけ？」

そう……

あの異様な腕輪こそ、ご主人様がいつも着けている宝具『凡人の才』だった。

「フツ……才が無いと如何に自分が小さく弱いものだど理解したよ。だが、そんな自分が努力して強くなるのが楽しくてな。そして、楽しいのがこんなにも、視野を広げてくれるとは……董卓様の事と言い、文智には何度感謝しても足りないな。」

いい顔。

それが自分が抱いた感想だ。

執着も、意地もない。

ある種の悟りの境地と言っても、過言では無いかもしれない。

「はあ……正直、ウチも今の華雄に勝てる気しいへんわ。

あゝあ、ウチもソレ貰っとけばよかつたわ。」

それは自分も同感だ。だが、その宝具は封印だけでは無いことに気付いていないようだ。

「クツクツク、やらんぞ……む？動いたようだぞ。」

連合軍の中からゆっくりと先鋒が前にすすみだす。  
それを見た張遼が女牆から降り、表情を引き締めた。

「さあ、仕事や仕事。計画通りにたのむで。」

「無論だ。張遼もしくじるなよ。」

「霞や」

「む？ いいのか？」

「今の華雄ならええよ。ウチの真名、受け取ってや。」

「そうか、ではありがたく戴こう。だが、残念ながら私に真名が無いのだ。」

「真名が無い？」

「生まれが特殊でな、だから真名が無いのだ。」

「ふうん……まあええ、華雄は華雄や。ウチの事は真名でよんでな。」

美しい友情が結ばれている中、連合軍の中から関羽がゆっくりと、単騎馬を進めていた。



**第二十三話 踊る三國志 シ水関を封鎖せよ！ 中編（前書き）**

さて、今回は迷子視点のみで続きます。

文智はあと4話位出番は有りません。

第二十三話 踊る三國志 シ水関を封鎖せよ！ 中編

「我が名は関羽 劉備が……」

関羽の挑発の口上が始まった。

予定通りだ。

「ここまで来ると恐ろしいな」

「まったくや、口上まで しい君の言った通りや。  
一体ナニモンなんや、頭良いとかの範囲越えとるで。  
まるで、この出来事を視てきたようや……」

両将軍がそう思つのも無理はない。  
なぜならご主人様は、実際にこの場面を視ているのだ。

関羽の挑発

孔明の策

華雄の暴走

張遼の奮闘

そして敗走

ご主人様にとっては、全てが予定調和。  
全てが一度有ったことなのだ。

だからこそ……

「だからこそこの戦……」

・  
・

我々が主導権を貰う。」

「せやな、相手はまだ華雄を猪や思っとる。一丁痛い目あってもら  
おか。」

獲物を担ぎ不敵に笑う。

自分はこの二人を見て、今から史実を塗り替えるのだと実感した。

「さて、敵の挑発で逆上した華雄將軍は、手勢を連れて暴走してく  
るか。」

「ぶはははは！ 自分で暴走ゆうてたら、ダメやん！ あはははは  
は！」

「言うな。確かに以前の私なら暴走していた。……何か過去の恥を晒すようで恥ずかしいな。」

朗らかに笑い合う二人。

一頻り笑い合った後、和やかな空気が戦場のソレに変わった。

「では、先に行く。」

踵を返し、兵達の所へ。

「おう、気張りいや。」

それを、手をふって送り出す張遼。

いま、三國志史上有名な赤水関の戦いが始まった。

さて、一方の劉備、島津陣営では……

「愛沙ちゃんは、上手くやっている様ですね。」

劉備が心配そうに、馬上で呟く。

その目はシ水関を前に、敵将の華雄を挑発する関羽を映していた。

「はい、愛沙さんなら心配ないと思います。」

同じく関羽を見ていた孔明が応えた。

今回の戦で孔明が立てた作戦は以下の通り。

- 1、華雄を挑発し、シ水関より誘い出す。
- 2、誘い出した敵軍を袁紹の軍が居る場所まで誘い込む。
- 3、袋小路に入った華雄を討ち取る。

と言う流れだ。

「華雄は猛将ではあるが、猪と同じだ。朱里の策を看破できるわけではないさ。」

孔明の頭を撫でながら笑いかける島津。  
だが、孔明はその顔を赤くしながら考えていた。

(……気のせいでしょうか、上手く言えないけど。この戦場には……  
……よくない空気が漂っている。)

その表情は晴れる事なく、シ水関の門が開かれた。

「かかった！ 引くぞ！」

兵達に指示を飛ばす関羽の眼前には、軍を率いてシ水関の門に立つ  
華雄の姿があった。

華雄はその手に持った獲物を関羽に向け、高々と号令を発した。

「ゆくぞ！ 我が武を汚した関羽を討ち取るのだ！ 全軍突撃！」

兵士の雄叫びが轟く。

獣の如く駆ける華雄軍。

ソレを嘲笑う様に逃げる関羽。

そして、その後方からは華雄の後を追うように、張遼軍が出撃した。

「まで！ 関羽！」

その光景を端から見れば、怒り狂う華雄が逃げる関羽を追いかけるという風に、見えるだろう。

実際に、劉備も島津も作戦は順調であると感じていた。

約一名を除いて。

その一名とは当然、諸葛亮孔明その人である。

(順調すぎる)

確かに、作戦通り華雄は暴走し、自ら虎口に飛び込んでいる。後は華雄を包囲して討ち取れば終わりなのだが……

(なんだろう。まるで舞を舞っている様に軽やかに順調に……まさか！)

その考えに至ったとき、初めて諸葛亮に戦慄がはしった。

「いけない！ すぐに愛沙さんに華雄を討つよう伝令を！」

突如慌て出した諸葛亮に、一堂が軍師のその顔を見た。

その顔は青ざめており、状況が切迫しているものと物語っていた。

「どうした、朱里？」

「策を逆手に取られました！ 華雄の目的は愛沙さんじゃないです！」

「「「ええ？」「」」

「華雄の目的は……袁紹さんです！」

まさか！

その場にいた全員が耳を疑った。

だが、直後にその言葉が真実であると全員が確認できた。

なぜなら華雄は、すぐ側の関の旗を無視し、金色の袁の旗を目指して突撃していたのだ。



「やばい！ 伝令！ 愛沙の所に！ 鈴々、愛沙の援護に行ってくれ！」

「わかつたのだ！」

慌ただしく指示を飛ばして行く。  
そのせいだろう、自分達に近づく危機に気付けないのは。

「伝令！ ち、張遼の軍勢が、此方に近づいてきます！」

全員の表情が強張る。  
敵を虎口に誘い込んだつもりが、いつの間にか前門の虎後門の狼の形にされてしまったのだ。

「これは、ピンチだな。敵を甘く見すぎたか。」

そのツケが今の現状。

関羽、張飛を欠き、その隙を敵に突かれている。

「でも、そう悲観した物ではありません。華雄、張遼両将軍が前に出たと言つことは……」

「なるほど、シ水関は空と言うわけか。」

そう、現にその結論に至った曹操、孫策の両軍が前進を開始した。このままでは、手柄を横取りされて目的を遂げられない！

島津の中で焦りが生まれ始めていた。

だが、天は御使いを見捨てなかった。

「伝令！」

その伝令は劉備の者でなく、公孫軍の伝令だった。

「我が主、公孫伯珪より言付けです！ 張遼軍は公孫軍が受け持つ故、劉備、島津軍はシ水関を落とされたし！」

「助かった！」

今の劉備達の気持ちは正に今の一言に尽きるだろう。

安堵の一息をつくくと、迫り来る騎馬の軍勢を横から白馬を先頭にしたら騎馬軍が迅雷の勢いで迎えうつっていた。

「よし！ 今の内にシ水関に取り付く！ 行くぞ！」

史実を外れた舞踏会はまだつづく……

第二十四話 踊る三國志 シ水関を封鎖せよ！ 後編(前書き)

かなり強引な感じが……

第二十四話 踊る三國志 シ水関を封鎖せよ！ 後編

シ水関前には曹操軍と劉備軍が群がっており、そのうしろで張遼と公孫贇が戦っていて、さらにその後ろでは袁紹本陣に向けて、突撃をする華雄。

それを追うように、関羽、張飛、孫策が駆けている。

まだ距離は有るものの、このままでは柵を突破され本陣に雪崩れ込むのは間違いなかった。

ただし一つだけ、袁紹にとって救いがあった。

それは兵種である。

華雄軍は重歩兵を主に編成された軍団である。攻撃力、守備力、突進力は凄まじいものがあるが、裏を反せば俊敏さに欠けると言うことはである。

対して、関羽、張飛軍は義勇兵であり、重歩兵など居るはずもなくいずれも軽装の歩兵ばかりである。

つまり、両軍の速度の差は如何ともし難く、関羽、張飛が追い付くのも自明の理であった。

「追いついたぞ、華雄！」

「関羽か……」

立ち塞がる敵兵を切り伏せて華雄に追いついた関羽だが、その消耗は明らかで肩で息をし、額には珠のような汗が浮かんでいた。

それでも華雄相手に侮蔑の笑みを浮かべ、少しでも止められればと挑発をしはじめた。

「アレだけ馬鹿にされ向かってくる気概が無いとはな、本当に腰抜けらしいな華雄。」

「ほざけ、こんな策すら看破できず、慌てて追ってきて息も絶え絶えな貴様に言われたくないな。」

ぐつと言葉が詰まる。

痛いところを突かれ旗色が悪いが、関羽は挑発を辞めることは、できなかつた。

（ここで袁紹が討たれては、敵に時間を与えてしまう。それだけで無く、先鋒を担ったご主人様や桃香様にどの様な汚名をきせられるか……何かなんでも此所で華雄を討たなければ！）

「屁理屈を、私と武を競うのが怖くて逃げ出したのであろう！」

「先に逃げたのはそつちだろう。それに、これは戦だ関羽。出し抜かれた貴様の言など、負け犬の遠吠えだ。」

可哀想なモノを見る目で関羽を一瞥し踵を返す。

「袁紹を討つ。関羽を足止めしろ。」

「はっ!」「」

手短にいた兵士が3人ほど応え、華雄と関羽の間に入り二人を隔てる壁となる。

重歩兵の厚い鎧と大きな盾は、消耗した関羽には本当に厚い壁に見えた。

(くっ、此処までなのか!?)

絶望を覚え、心が折れそうな時に

「そつは行かないのだ!」

踵を返し走り出した華雄に立ち塞がる様に、希望が現れた。

「貴様は……張飛だったか。回り込んでいたか。」

蛇矛を構え、これより進ませないと闘気で威圧している張飛をみて、奮い立ったのは関羽であった。

「うああああ！」

気合いを発し、一振りにて重歩兵3人を吹き飛ばした。

相変わらず肩で息をし消耗しきっていたが、その目には生気が宿っていた。

「はあ……はあ……ここまでた……覚悟しろ華雄……！」

絶対絶命、そう言っても過言ではないだろう。

関羽と張飛は、消耗しているとは言え、地の武力は華雄より上なのだ。

如何に冷静になり、視野の広がった華雄とさえど、その身は凡人の才に縛られており、一人ならともかく二人を相手では勝てる道理が無かった。



「なるほどな……お前達相手では、分が悪過ぎるな。」

「観念したか。なら………」

「なら………」

関羽の言葉に合わせる様に、口をニヤリと歪め

「勝てる奴に、お前達の相手をお願いしよう。」

瞬間！

張飛に向かってただならぬ殺気が放たれた。

咄嗟に蛇矛を横に構える張飛に、横にいた兵士が横薙の一撃を放った。

「ぐう！」

あまりにも重い一撃に、肺の中の空気が押し出され、うめき声が洩れる。

堪えきれず、張飛は関羽の横に吹き飛ばされた。

一方、シ水関前には曹操が齒噛みをしていた。

理由は簡単だ。

「何故、将が居ないのに落とせないの!?!」

そうなのである。

将が全て出撃し、空であるシ水関を、一万以上の兵をもつても、落とせないのである。

これには理由があるが、曹操の位置からは見えなかった。

そう、見えなかったのだある。

砦に掲げられた3つの旗を……

それを唯一目視する事が出来たのは、島津達だけだった。

「なぜ……なぜあの旗が掲げられているんだ……」

島津が目にした旗にはそれぞれ、『呂』『賈』『陳』の三文字が並

んでいた。

再び華雄達の戦場に目を向けてみよう。

傷つきながらも、華雄を見据える関羽と張飛。

その二人に対して、背を向けて対峙する華雄。

その間に立ち塞がる、一人の女性兵士。

先ほどの張飛を吹き飛ばした一撃を見れば、立ち塞がる彼女の武が  
相当なモノだとわかる。

それこそ、この場にいる誰よりも強いかもしれない。

警戒しつつ得物を構える二人。

対峙する女性兵士も、得物を構える。

その得物を見た関羽の顔色が変わった。

「方……天……画戟……だど？」

「私はこのまま進む。後は頼んだ。」

「……………ん。」

そう言い残し、華雄は駆け出した。

残された3人。

戦の喧騒の中、ソコだけがポツカリと穴が空いていた。

まるで、これから始まる戦いの為の闘技場のよう……

「関雲長！」

「張翼徳なのだ！」

名乗れと言われた訳ではない。

ただ、これから始まる戦いの前に、名乗らずにはいられなかった。

それだけなのだ。

それに応えるかの様に、彼女が口を開く。

「……………呂布……………」

今、史実には無い戦いが始まる。

先行した華雄は順調に敵陣を突破していた。

彼女の目的は、ただ一つ。

袁紹本陣の強襲。

ただ、やはり簡単には物事は進まない様だ。

「酒はここには無いぞ。肴はやるから、とっとと帰れ。」

「つれないのお。戦場で出会ったのじゃから、刃を交えようと思わんのか？」

華雄の前には弓を構えた、白髪の将が立っていた。

呉の宿将 黄蓋

先代 孫堅 の代から仕えている猛将が、立ち塞がっていた。

「貴様の相手は疲れる。年寄りは隠居して酒でも煽ってる。」

「と、年寄りは酷いのお……そう言うお又シだって……」

「……………」

ヒュッ

微妙な沈黙がそこにあった。

「悪かった、そして辞めよう。この話題は互いに危険すぎる。」

「そ、そうじゃな。しかし、変わったのお華雄。正直今現在目を疑っておるぞ。」

その言葉に華雄は、思わずといった感じで自嘲気味の笑いをこぼす。

「なに、挫折を知り視野が広がっただけだ。」

そこで言葉を切り、後ろを振り返った。

「そこにいる小娘に気付ける位にはな。」

華雄の視線の先には、桃色の髪の女性がソロリソロリと、華雄の後ろに忍び寄っていた。

ご主人様であれば桃豹かよ！

とツツコミを入れていたかもしれない。

華雄と目が合った女性が、ギクリといった感じで動きを止めた。その顔には、ひきつった笑みと冷や汗を浮かべていた。何処までも漫画チックな反応だ。

「あちゃ〜駄目だったかあ〜。ちょっと祭、話が違いわよ。」

ジト目で黄蓋を睨む女性。

その顔を見て、華雄は納得した表情で頷いていた。

「なるほど、似ている。お前が孫堅の娘の策か。」

華雄の問いかけに、孫策は優雅な笑顔で応じた。

「ええ、初めまして華雄將軍。ワタシが孫策よ。猪武者って聞いていたけど、随分と印象が違つようね。」

「人は変わるモノさ。」

笑いながらも、警戒は緩めず斧を構える。  
それに合わせて黄蓋、孫策も各々得物を構える。

一触即発の空気。

はりつめた緊張の糸を切つたのは、黄蓋だった。

素早く矢をつがえ瞬く間に5本の矢を放つ。  
精度、速度共に超絶技巧の連弾。

しかも、その矢の全てが急所を狙っていた。

迫り来る凶弾。

華雄はその凶弾を、獣の如く地に四肢を付け、体勢を低くしかわした。

黄蓋はかわされたのを見るや否や、直ぐ様次の矢をつがえるが、放つ事は出来なかった。

伏せていた華雄が地に四肢をつけたまま、駆けてきたのである。

それは正に肉食獣の……地を駆ける銀虎であった。



突如として目の前に現れた華雄。  
慌ててつがえていた矢を手放し、腰の大刀を抜き、地面から放たれる左横薙の一撃を受け止める。  
そのまま鏢迫り合いになる。

「や、やるのお」

「まあ……な！」

言葉と共に左の膝を繰り出す華雄。

「ぐは！」

黄蓋はそれを右の脇腹にくらい、たまらず後に下がる。  
体制を崩し喘ぐ黄蓋。  
追撃にと斧を振り上げる華雄。

その瞬間に何かを察知した華雄は、転がるように横に跳んだ。

「しっ！」

鋭い気合いと共に幹竹割りの一撃が、華雄のいた場所を切り裂いた。  
孫策だ。

気配を消して華雄の後ろからの一撃だった。

「外した!？」

直ぐに華雄に向かって追撃するが、いち早く体制を立て直した華雄が、カウンターの一撃を放った。

迫り来る破壊の暴風に咄嗟に剣を盾にするが、踏ん張り虚しく吹き飛ぶ孫策。

砂煙を上げて地面を転がる。

「いつつ……」

立ち上がった孫策は、あちらこちらを擦りむいて出血していた。

それを見た黄蓋が孫策の前に出て弓を構える。

「お又シ本当に華雄か？ 先代の時と変わりすぎだろう。」

暗に強くなった華雄に驚いているのだろう。

気丈に振る舞っているが、思わぬ強敵に焦りを隠せないようだ。

(まさかここまでやるとは……侮ったか。口惜しいが、今は策殿を……雪蓮を逃がすが先か……)

黄蓋が覚悟を決めた時だった。

「ちやちやちや、その勝負まっつくな。」

戦場には不似合いな声が響いた。

華雄が横を見るとそこには、帽子屋が細身の剣を片手に華雄に走っていった。

華雄の意識が横に逸れる。その瞬間を黄蓋は見逃さなかった。つがえた矢を華雄の頭部に放った。

しかし、その矢は華雄には届かず、間に入った騎士の鉄鞭によって打ち落とされた。

「くっ！ 何者じゃ！」

「ちやちやちや、まっつとくれおす！ まず華雄はん、予想外の出来事どす、今すぐ撤退しておくれおす！」

「予想外の出来事？ 何があつた？」

「張遼はんが敗退してもうたんどす。」

さすがに、冷静を貫いていた華雄にも動揺が見てとれた。

「公孫軍を相手にしてたんどすけど、馬超はんと夏侯姉妹の集中攻撃食らってまっただんどす。」

これには自分も面食らった。

「それは、奴の予想誤差の範囲内か？」

「残念ながら、範囲外どす。頭抱えて啞然としてはりました。」

……嗚呼、鮮明に想像できる。

《おお！やられたああ〜！小生の策があああ！》

と言った所か。

状況を覆された華雄は拳を握り

「くっ……」

肩を震わせながら

「く……く……くははははは！」

笑っていた。

「はははは！ やられたな、如何に神算鬼謀と言えど、やはり人が！」

「ちゃちゃちゃ、仕方ありません。ご主人様も失敗はありますよ。失望せんといえな。」

「いや、失望などしていない。逆に安心した。人外は信用できんが人なら信用できる。」

得物の大斧を肩に担ぎ

「撤退だ、呂布を拾って虎牢関まで引くぞ！」

そう命令し、撤退していった。

さて、華雄と帽子屋が話していた間、孫策、黄蓋達は騎士に睨まれ、動けずにいた。

(こ奴……隙がない。)

騎士の後ろでは華雄が帽子屋と話しており、何を話しているかは周りの喧騒にかき消され聞こえない。

やがて、騎士が口を開いた。

「呉王 孫策様とお見受け致します。」

辺りが凍りつく。

最大級の冷気を放ちつつ、孫策が口を開く。

「何の事？ 呉なんて国は存在しないわ。」

「存じております。ですが、我が主は孫文台殿の意思を継ぐあなた様に、孫呉の地をご返上致したいと思っております。」

「……何が目的？」

「洛陽にて、我が主がお待ちしております。」

「わかったわ。会うと伝えて。引くわよ祭。」

話がまとまり、孫策達は袁術の本陣に帰っていった。

「撤退だ、呂布。」

一方、此方は呂布対関羽張飛の戦場。

傷一つ無い呂布と、傷だらけで満身創痍の関羽と張飛。

正反対の両者の有り様は、越えられない壁が有るように、両者の実力を物語っていた。

関羽と張飛が弱いわけではない。

呂布が強すぎるのだ。

呂布は、了解て言うように一つ頷くと二人に背を向け華雄に続き撤退した。

「ぐっ……まで……！」

青龍偃月刀を杖代わりに立ち上がるが、足に力が入らない。  
今にも倒れそうな関羽を支えたのは、帽子屋こと関興だった。

「ちゃちゃちゃ、無理はいけまへんえ。敵は撤退するみたいや。  
ウチらもひきまひよ。」

「くっ……くそおおおおお！」

関羽は悔しげに、ただ撤退する呂布の背中を見るだけしか、出来な  
かった。

この日、張遼の撤退を皮切りに、シ水関は落ちた。

シ水関への一番乗りを果たしたのは劉備玄德で、一躍連合にその名  
を轟かせた。

だが、その代償は高くついた。



関羽張飛の両名は消耗が激しく、2・3日は動けなかった。

袁紹軍も損害が激しく、編成に時間を要した。

自然と次の虎牢関攻めは、損傷が少ない袁術、曹操軍が受け持つ事となった。

一方の董卓軍は無事撤退を完了し、虎牢関入りが確認された。

だが、その中に『華』の軍旗は無かったと言う。

狂った舞踏会は場所を変え、まだつづく

第二十五話 踊る三國志 虎牢関封鎖できません！ 前編（前書き）

あゝそうか。

なんか違和感あると思ったら、風の一人称が風じゃなく私になってる……

すみませんでした。

順次直していきます。

第二十五話 踊る三國志 虎牢関封鎖できません！ 前編

虎牢関の前

約二万の兵達が整列している。

旗頭は、袁と曹。

高まる緊張のなか、董卓軍VS反董卓連合の第二戦、虎牢関の戦いがいま！

……始まらなかった。

理由は、虎牢関にあった。

「……………」

どの武将も開いた口塞がらなかった。

なぜなら、今虎牢関には人の気配がなく、侵入者を拒むための門も開け放たれ、更にそこから見える虎牢関内には、食料や武器などの物資がそのままのが見えた。

まるで『どうぞ差し上げます』と言わんばかりだった。

「な……何よこれ……」

その言葉は、当にこの場にいる全員の気持ちを代弁していただろう。  
やく一名を除いて。

「離すのじゃ！ 今行けば虎牢関も物資も手に入るのじゃ〜！」

「だっ、ダメですよ！ まんま罷ですから！」

暴れる金髪の少女を、親衛隊とおぼしき少女が羽交い締めにしてい  
る。

袁術に、あれが張勳だろう。

かましい事この上ない。

それを残念そうに眺める孫策一行。

かましいだけだが、硬直した場を動かすには十分だった。

所々で

『アレは畏だ!』

『いや、ハツタリだ! 今すぐ虎牢関に入るべきだ!』

等の声が飛び交っている。

そんな中、じつと沈黙を保つ集団があった。

曹操軍だ。

曹操は虎牢関を睨みつつ考えていた。

(……夜襲に華雄の強襲、そして今度は空城の計? 何なのかしら、この心理にねちねちと来る策は!)

微動だにしない曹操。

恐る恐ると北郷が声をかける。

「どつする華琳?」

発する声は何処か不安そうだ。

「あからさまな空城の計ですね。それだけに、危険度は高いです。」

「そうね、私達が入った瞬間に閉じ込められて火計なんてされたら堪ったものじゃないわ。」

それを想像してか、恐怖に強張り唾を飲む北郷。

考えれば、考えるほど入るのが躊躇わられる。

賢ければ賢いほど陥る思考の螺旋。

曹操始め、荀イク、程イク、郭嘉の軍師達もその無限の思考の渦に飲み込まれていた。

普段の彼女達ならば、ここまで迷うことは無かっただろう。

何故ここまで彼女達を惑わす事ができたのか。

それは、昨日の董卓軍の撤退にあった。

撤退した董卓軍は無事虎牢関に入ったが、それを確認した兵士の報告には、華雄軍の姿がなかったと報告された。

それが彼女達の目を曇らせた。

たかが一軍と一人の将だが、相手は昨日猛威を奮った華雄である。華雄が伏兵で潜んでいるかもしれない。

それだけで、虎牢関に入るのに、二の足を踏ませていた。

暴れる袁術。

傍観の孫策

悩む曹操

さあ、種明かしをしよう。

現在虎牢関には誰もいない。

本当の無人なのだ。

いるのは、回りに居る10の伝令兵のみである。

では、董卓軍は何処に居るのか。

答えは、洛陽と虎牢関の間にある林の中で宴会をしていた。

「ぶうらあああー！」

「うわ！ だれだ！ 馬流羽鳥栖に酒を吞ませたのは！」

「キャハハハ！ウチや！」

「張遼將軍ー！」

「モキュモキュ……」

「料理が足りないぞ！このままじゃ呂布將軍に全部食べられてしま  
うー！」

「呂布殿、この料理もおいしーですぞー！」

「モキュモキュ……食べる……」

「お願いですから、止めてください陳宮様ああああああー！」

「……なんだこの混沌は……」



「さあ？ 明日が決戦だつて忘れてんでしょ。」

対して此方は曹操軍。

「くっ！ 手が読めない！ とにかく、何が来るか分からないから、警戒体制は解かないように全員に伝えてちょうだい。」

「はー！」

『早くせーめーるーのーじゃー！ でないと手柄がー！』

『だからダメですってば！ 畏です！ 死んじゃうんです！』

「……だれか、あの餓鬼黙らせてくれないかしら……」

ただイライラがたまっていた。

そんな中で、孫策軍だけが冷静だった。

「さーて、私達はどうしましょうっ？」

地べたに座り寛いだ様子で周りに問う孫策。

「さて、敵の手の内が読めないからね。何とも言えないわ。」

眼鏡をかけた知的で妖艶な女性が、やる気無さげに応えた。

「私はあく、いつそお休みしちゃった方が良くと思いますう。」

これまた眼鏡をかけた、発育の良い女性が間延びした声で応えた。

「そうね、全軍に休息をとらせて。何かあったら、曹操軍が教えてくれるでしょう。」

孫策の言葉に、各々寛ぎ始める孫策軍。

料理をしたり、夜営の準備をしたりする者も居るなか、じつと虎牢関を睨み付ける目があった。

先程の眼鏡をかけた妖艶な女性だ。

おそらく、彼女が周瑜だろう。

（この前の夜襲。先鋒の公孫賛。関羽の挑発。裏をかいた華雄の強襲。撤退する董卓軍。消えた華雄軍。空城の計。どれも、突発的な行動に見える。）

だが、ある一つの仮説を踏まえると、何れもが計画的な……じつに敵味方を操る計画的な策になる。つまり、この仮説は当たっている可能性が高いと言つこと。）

「連合内に……裏切者がいる？」

そう呟きまた思考しはじめる。

（もし、本当に裏切者がいるなら、この計画を立てた人物はかなり前から……それこそ、袁紹が反董卓連合の話を持ちかける前から、動いていたという事になる。）

そんな事が可能なのか？

もしそうなら、そいつは未来を予見した上で、一連の策を誰にも悟られる事無く仕掛けた事になる。）

突如、周瑜の背中に冷たい物が走る。

（誰にも悟られる事無く……だと？

あり得ない、漢王朝が衰退し始めてから、どこも間諜を放ち互いを見張っているのだ。）

そんな中で董卓と連絡し策謀を巡らせるなど……

もし、もしそんな事をやってのけたなら、ソイツは化物だ！）

ふと、手の中を見る。

そこにはジットリと汗をかいていた。

（危険だ。ソイツは我々にとって危険過ぎる。……蓮華様から思春を借りるか……）

舞踏会は新たな役者と共にまだ、つつく

第二十六話 踊る三国志 虎牢関封鎖できません！ 中編（前書き）

まず、間が開いてしまった事をお詫びします。

かなり詰まってしまいました。

本格的な戦いは次回になりそうです。

では、駄文になってしまいましたが、虎牢関中編をどうぞ。

第二十六話 踊る三國志 虎牢関封鎖できません！ 中編

踊り続ける役者たち。

舞台の名は李文智。

場面は虎牢関。

誰も居ない関を睨み付ける軍勢は、端から見れば異様だろう。

現在は空城の計を恐れて、反董卓連合は二の足を踏み、その場に留まっていた。

とは言っても、何もしていない訳ではない。

斥候を出し、偵察をさせて敵兵の有無や、虎牢関の安全性などの調査をしていた。

時間は最早夕方になろうとしていた。

布陣したのが昼前なので、約半日ばかりとなってしまうた。

やむを得ずとは言え、手痛い時間のロスに曹操も袁術も、そのイライラは最高潮に達していた。

「……桂花、まだ虎牢関の調査は終わらないの？」

「はい。斥候が戻るまで、もう暫くお待ちを……」

「……一刀、袁術殴ってきて。」

「うん、わかつ……って、それはダメだろう！」

……八つ当たりして何とか正気を保っているようだった。

反面、孫策は……

「ZZZZ」

寝ていた。

いや、孫策だけでなく兵達も寝ていた。

この孫策軍の休息は、反董卓連合に有利な状況をもたらす事になる。

そうこうしている内に曹操の出した斥候が戻ってきた。

「報告します。虎牢関に敵軍の影無し！ 畏も有りません！ 虎牢関は無人です！」

「現在先発隊により虎牢関内部を確保してあります！」

「よくやったわ！」

我慢も限界近かったのだろう。

その目は爛々と輝き、それまでの鬱憤を晴らすかの様に、号令を發した。

「全軍、虎牢関に入りなさい！ 全軍前進！」

曹操軍が前進を始める。

それを見た袁術軍も前進を開始した。

ようやく虎牢関に入れる。

無人の虎牢関を相手に睨み続けるのは、思ったより精神的な負担になっただけだ。

前進を続ける兵士の表情には、安堵の色が見えた。

だが、その前進も10歩進んだだけで終わりとなった。

「っ！ 全軍停止！」



突如、慌てた曹操の号令が響く。

突然の停止命令に兵士の間にごわめきだつが、主君である曹操の厳しい視線を辿ると、虎牢関の門に佇む一人の人物が目に入った。

大斧を片手に、門を護るかの様に仁王立ちする女性。

背後には『華』の字が書かれた旗がたっている。

「華雄……………！」

ギリツと、曹操の歯噛みする音が大きく響く。先日の夜襲の事を思い出したのだろう。

その目には怒りが宿っていた。

曹操の視線を受けた華雄は不敵に笑つと、手に持った大斧を掲げる。

『雄雄雄雄雄雄雄！』

応えるかの様に虎牢関から雄叫びがあがった。

ジャーン！ ジャーン！ ジャーン！

銅鑼が鳴り、虎牢関の門が閉じられていく。

「華琳様！ 虎牢関の門が！」

夏侯惇が慌てて主人に判断をあおぐ。

曹操はすぐに突撃を指示しようとしたが、そこはやはり曹操と言っべきか、チラリと西を見ると冷静になり

「全軍後退。夜営の準備を始めなさい。」

後退を指示した。

曹操の見た西の空は既に日が大分沈んでいた。

虎牢関も松明が灯されて夜の準備を始めている。

そんな中、構わず前進を続ける軍団があった。

袁術軍だ。

「っ！ だれか、袁術軍に……」

すぐさま袁術に後退と合同軍議を提案しようと呼ぶが、それを制止する声があがった。

「あの〜華琳様」

程イクだった。

「風、どうしたの？」

「袁術さんにはこのまま夜通しで虎牢関を攻めてもらいましょう。」

「……袁術に攻めさせて、敵を疲弊させるつもり？」

曹操の確認に黙って頷く程イク。

味方を利用する策を、口に手を当てて黙考する。

（今日1日で兵は精神的に疲弊している。このまま虎牢関攻めに加わっても、被害だけが大きくなるだろう。だが……）

「虎牢関をこのまま袁術が落としてしまったらどうするのかしら？」

「それは有りません」

曹操の懸念に一瞬の間も無く答える。

自信の現れからくる返事だった。

「理由は？」

「風達が虎牢関を警戒して睨んでいる間、虎牢関の中にはだれもいませんでした。つまり、董卓軍は風達を尻目にお休みしてただと思います。」

「つまり、空城の計はハツタリで目的は私達の疲弊にあったと。」

コクリと頷く程イク。

それを見た曹操はまたもや強く齒噛みし、自身の不覚を悔やんだ。

一度ならず二度三度と良いように振り回されたのだ。

この霸王の怒りは当然の事だった。

ただ、やはり曹孟徳は何処までも霸王だった。

その怒りは自身を翻弄した相手に向かっておらず、ひたすらに己自

身に向かっていた。

（情けない……曹孟徳ともあるうものが！）

怒りを必死で抑えつつ、指示を出す。

「風の言う通り袁術には夜通し虎牢関を攻めてもらいましょう。」

自責の念で一杯なころ、虎牢関では華雄軍による防衛戦が行われていた。

「慌てる事はない、籠城戦と同じだ。兵力はこちらが上なのだ、的確に防げば後続が何とかしてくれる。」

華雄の激が兵達にとぶ。

そのお陰か兵達に焦りはなく、架かる梯子を倒し、外壁を登っていく敵兵を落とし、飛んでくる矢を防ぎ、的確に敵の進行を阻んでいた。

対して攻める袁術軍には焦りが見えた。

先の空城の計の精神的な効果も有ったのだろうが、だがそれ以上に兵達を追い詰めていたのは、疲労だった。

虎牢関に着いてからずっと、空城の計による奇策を警戒していたのだ。

さらに休みもなく虎牢関攻めをやらされているのだ。

兵達は動きも思考も士気も、今まで休養していた華雄軍とは雲泥の差だった。

「これなら、今晚は持ちこたえるな。」

そう呟くと華雄は曹操ぐんと孫策軍が居る敵軍の後方を見た。

（虎牢関攻めには加わらず、休養をとるか……ここまで文智の計画通りか。）

夜宮の松明の灯りを眺めながら、これから起こる事に思わず曹操と孫策に同情する華雄だった。

さて、そんなこんなで一晩がたった。

結果から言えば、袁術軍は虎牢関を落とせなかった。

そして、曹操と孫策はゆつくりと休息を……

とれなかった。

何故かと言うと、休んでいる両軍に董卓軍の夜襲があったからだ。

とは言っても、夜襲とは名ばかりで、百ほどの騎馬兵で後方の夜営地の目の前を、横切っただけだった。

とても夜襲とは言えないが、両軍にとってはこれで十分だった。

休んでいる所に敵襲と聞き、だれもが先日の夜襲を思い出してしまったのだ。

そんな状況ではだれも休めるわけなく、戦々恐々としながら夜を明かす事になった。

勿論、曹操始め各将達はこの夜襲はハツタリだと気付いていたが、兵達はそうはいかなかった。

結局疲労は回復せず、更に疲れた状態で虎牢関2日目に突入した。

この状況に曹操は笑うしかなかった。

「ご覧の通り、兵達は疲れきっています。昨日1日休息していた孫策軍は幾らかマシですが、現在の状況は大変好ましく無いです。」

「そうね」

郭嘉の報告を晴れ晴れとした顔で返す曹操。

「こんなの策でもなんでも無いです！ ただの嫌がらせじゃない！」

「そうね」

荀イクの言葉にも同じだ。

「確かに、ただの嫌がらせね。でも、超一級品の嫌がらせよ。」

愉しそうに言う曹操。

「華琳、なんか嬉しそうだな。」

北郷が思わずといた様に聞いた。

「ええ、そうね。風、一つ聞くわ。一連の策は誰のモノだと思うか



しらっ。」

「ぐう」

「起きなさい！」

「おお！」

お約束のやり取りを終えて、程イクが口を開く。

「賈馱さん陳宮さんではない事は確かです。賈馱さんは政務よりの軍師ですし、陳宮さんはここまで老獪ではありません。つまり」

「また謎の軍師か……」

吐き出す様に重くその存在を口にする夏侯淵。

「そうね、『また』謎の軍師ね。これでハッキリしたわ。」

一拍おくと、虎牢関とは逆の方を向き

「裏切者がいるわね」

《イッキシツ！！》

「ん？ ……気のせいかな？」

いや気のせいではないが、今は置いておこう。

と、いつか、何故そこに居るんだ……

まずは、大きく間が開いてしまい、誠に申し訳御座いませんでした。続いて、この話で虎牢関を完結させるつもりで後編と銘を打ちましたが、あともう一話かかります。

重ね重ねお詫び致します。

申し訳御座いません。

原因は作者の力不足でございます。

頭を抱えながら執筆を致しましたが、この結果で御座います。面目ない。

力不足な稚拙な文章で御座いますが、少しずつでも書いて行きますので、どうかお付き合い下さいませよう、お願い申し上げる次第でございます。

それでは、虎牢関後編で御座います。

第二十七話 踊る三國志 虎牢関封鎖できません 後編

虎牢関2日目

朝日が完全に昇り、ジリジリと戦場を照らす。

現時点での戦力差

反董卓連合

袁術 6000

曹操 8000

孫策 3000

その他 2000

合計 19000

VS

董卓軍

華雄 3000

張遼 3500

呂布 6500

賈馱 1500

陳宮 500

合計 15000

兵数に関しては反董卓連合の方が上である。  
が、城や砦をはじめ要塞化した拠点を攻めるには、2〜3倍の兵力

を要する。

4000の差は大きいが、攻城戦においては絶対的差ではない。

更に、昨夜袁術は夜通して虎牢関攻めて居たため、12000もいた兵数も今や半分まで減らされていた。

休みも取らなかったなので兵達の疲労もピークである。

そして、孫策、曹操軍は夜は攻めず休養をとったが、どつからともなく現れる奇襲により休むことができなかった。

兵力の減少に疲労。

近代の戦術なら確実に撤退しているであろう被害だ。

特に疲労は不味い。

疲労が蓄積すると、思考が鈍り判断を違えてしまつおそれがある。さらに、心理戦や揺さぶりなどの効果が大きくなり、その結果如何においては自軍の士気を挫く事になり、最悪戦線が崩壊し敗走の憂き目を見ることになる。

それを理解しているからこそ、曹操は迷っていた。

退くか？ 進むか？

現状維持はまずい。

疲労し、優位だった兵数の差もかなり縮まっている。

対して敵は……

チラリと虎牢関に翻る旗を見る。

昨日は『華』の旗が有ったのに、今は『賈』の旗になっている。

これが示す事実の一つ。

（敵は交代で休養をとっていた？）

つまり、最初は華雄が虎牢関を防衛し、こちらが疲れてきた所で賈  
馱に交代する。

ここまで賈馱は休養をとって、交代した後に華雄は休養をとる。  
暗い中での事なので確認の仕様がないうが、間違いはない。

さらに、ここまで姿を見せなかった呂布と張遼。

この二人は無駄にしてしまった昨日1日を、まるまる休養に回した  
のだろう。

調子は万全、士気も十分。

此方とは正しく正反対の状態だろう。

そして其らの事実、敵の次に取るであろう行動を曹操に示してい  
た。

（数の差はあるけど、私が敵の大將なら間違いなくここで、うって出るわ。それほど疲労と士気の差は大きい！）

大攻勢

この言葉が浮かんだ。

おそらく投入される兵力は1万と少しだろう。  
だが此方の兵は既に『かぼちゃ頭』も良いところだ。

突然の反撃に動揺した兵達は、なす術も無く蹂躪されていくだろう。

どうするか、退くか進むか……

ドーン

その音は迷っていた曹操を戦慄させた。

ドーンドーン

その音は戦場にいる者の視線を集めた。

ドーンドーンドーン

腹の底まで響くその音は、虎牢関を攻めていた兵達の手を止めた。

ドーンドーンドーン

だれもかれもがその音が鳴り響く虎牢関をみつめた。

ドーンドーンドーン

何かがおこる。好奇心か、恐怖か、色々な予感を混ぜ合わせ、皆が聳え立つ虎牢関を見上げた。

ドドーン！

一際強く音が響く。

虎牢関の上に立つ『賈』の旗の隣に『張』の旗が立つ。

ドドーン！

更なる音が鳴り響き、虎牢関の上に『華』の旗が立つ。



その様を、ただ見上げるだけの反董卓連合の兵達。

ドドン！

次が上がったのは『陳』の旗。

じわり、じわり、と兵達に恐怖が広がる。

曹操も孫策も袁術も、指示すら飛ばすことも忘れ、呆けた様に虎牢関を見る。

『賈』『張』『華』『陳』と来ているのだ当然、次には……

ドドン！

誰もが固唾を飲むなか、その旗は一際高く掲げられた。

『呂』

その旗が誰を指すのか、全員が理解していた。

そして、疲れた体と脳ミソで考える事すら億劫だが、本能的に皆が悟った。

ああ……自分は此処で死ぬのだと。

そして、曹操は……孫策は……この場にて虎牢関に対峙する将は（一部を除く）悟った。

この為だけに我々を疲弊させたのだと。

### 演出と音響効果

古来より太鼓は神聖なる儀式に使われる事が多い。

その音は遠くまで響き、その圧倒する様な腹の底に響く音は、雷などの自然的な現象を連想させるためか、太鼓の音は神聖なるものとして人々に畏怖された。

そして人は自身を脅かす恐怖には、特に敏感である。

話を戻そう。

疲れきった人間から集中力を奪えば、後に残るのは重い身体だけ。

太鼓の音は疲れきった兵達の集中力を奪うには、格好の小道具だった。

重い身体を身に纏い、朦朧とする頭で見上げる虎牢関の旗は、兵達にどう映っただろうか。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

これまで大きく遠くまで届かせる様な音と違い、小刻みに地面を揺らすような音へと太鼓が変わった。

その音はビリビリと大地を揺らし、反董卓連合の兵達に更なる恐怖を与えた。

この音はまるで……

そう、まるでこの地を埋め尽くさんとするほどの敵が迫って来るようではないか！

実際、そこまでの兵力は董卓軍に無い。

無いが、兵士達はそれをまともに判断出来なかった。

太鼓の音に合わせ、虎牢関の門が開かれていく。

先頭に立つのは飛将呂布。

続いて華雄、張遼。

正しく董卓軍の全力だった。

1人、また1人と恐怖に駆られ兵達は混乱していく。

虎牢関の前にいた袁術兵達は、次々と逃走していく。

無論袁術や張勳は、兵達を止めようとしたが当然力及ばず。

前線が崩壊していく。

ここに、希代の暗躍家である李文智の策が完成しようとしていた。

そう、完成しようとしていた。

「おほほほほ！」

金髪ドリル（袁紹）さえ現れなければ。

「さあ！ 田舎くさい董卓さんを、ケチヨンケチヨンにしてあげなさい！」

ウオオオオオオオオ！

どこから集めたのか、数にしておよそ2万もの兵士たちが雄叫びを上げながら突撃する。

これを見て、もとからこの戦場にいた面々は焦った。

曹操は撤退を決めた直後の登場である。

このまま本気で帰りたいかったが、下がったら何を言われるか解らない。

(あの馬鹿！ 本当に空気読めないわね！)

張遼は迷った。

攻勢に出た直後の敵の援軍である。  
しかも、数がハンパない。

(これも『しい君』の策か？ いや、ありえへん。もしそうなら、  
ウチらに何か連絡が入るはずや！ どないするどないする!?)

袁術は泣きそうになった。

(こ………これで逃げられるのじゃ！ あゝ！ でも、てがらがあ  
ゝ!)

実に欲望に忠実である。

さて、色々な思惑が交わるこの戦場で、一番焦っているのが誰だか  
お分かりになるだろうか？

答えは、李文智である。

1人曹操軍兵士の格好で曹操軍に紛れていた文智は、13のゴゴさんの如く冷や汗にまみれていた。

(マズイマズイ！ これは実にマズイ！)

どうせ袁紹のことである。次に言う言葉は容易く想像できた。

「さあ！ 雄々しく、勇ましく、華麗に進軍なさい！」

じつに策も何もへつたくれも無い。

数にモノをいわせる力押し。

だが、これが正解。

賢しい軍師に下せぬこの号令こそが、実はこの状況で勝利を呼び込める唯一の正解だった。

このぶつちやけおバカだからこそこの号令に、文智は追い込まれていた。

現在戦場は、1万5千 対 約4万の戦いである。

如何に優秀な将が居ようが、数の不利は洒落にならない。

しかも、人材面に関しては董卓軍よりも反董卓連合の方に分がある。

だからこそその奇策。

だからこそその小細工。

確かに、文智は並みいる軍師を出し抜き、翻弄してみせた。

だが、勘違いしないで欲しい。

文智は本来文官であり、政務官である。

本来なら、諸葛孔明をはじめとした軍師達は勿論、武将達ですら戦場での知恵比べに勝つことは難しい。

畑が違うのだから当然と言えば当然だ。

だからこそ、李文智には暗躍しかなかった。

自身もつアベレージは歴史の流れを……

恋姫無双と言つ世界の歴史の流れを知っており、かつ時間が有ったから、様々な罫を仕掛けられたに過ぎない。

文智は軍略家でもなく、策略家でもなく、あくまで暗躍家なのだ。

つまり何が言いたいかと言つと……

(ああ……今晚は焼き魚が食べたいですね)

ただ現実逃避をしながら、事の成り行きを眺めることしか出来なかったと言つこと。

場面が変わるが、洛陽から虎牢関へ猛スピードで駆ける影があった。

我等が苦勞人 白兔 であつた。

洛陽にて董卓を縛っていた十常侍を始末し、董卓の安全を確保して何時でも動けるようにした。



董卓の両親も既に保護済みで、安全な所に避難させてある。

更に玉璽も確保済みだ。

文智の暗躍に必要なモノは殆んど揃った。

あとは、人の動きだけである。

そう考えた途端、白兔は更に走る速度をあげた。

自身の健脚ならあと半刻しない内に虎牢関に着けるだろう。

既に配下から報告は届いている。

文智の事だから、鼻をほじりながら

《だめだこりゃ》

等と呆然としているであろう。

偉そうに悪巧みをしているが、文智は突発的な事態にはとことん弱い。

急がなければ！

白兔が野を駆けているころ、文智は虎牢関の乱戦の真っ只中にいた。とはいっても、周りから認識されていないので、流れ矢でもなければ

ば死ぬことはないが……

ともかく、今の現状は厳しいの一言だった。

大軍を率いて突撃してきた袁紹。

それに無理矢理引っ張られている 曹操 孫策 袁術の3軍。

董卓軍も攻勢に出た直後で虎牢関の中に引けず、なし崩しにこの乱戦に参加せざるを得なかった。

そして、今この現状は文智が描いた絵とは大きくかけ離れており、正直この乱戦はいただけなかった。

(マズイ……どうにかして修正しなければ……でも、どうすれば)

頭が真っ白だった。

さて、今の乱戦の将達の現状を説明しよう。

虎牢関の右翼の戦場では、呂布を相手に孫策軍が総力を挙げてその足を止めていた。

武力に圧倒的差があるが、袁紹 袁術の両軍から援護を受けているため、数の暴力で対抗していた。

此には呂布といえども足を止めざるをえなかった。

……呂布本人はどこ吹く風だが……

中央戦場では、華雄と趙雲がぶつかっていた。

どうやら両将の一騎討ちになっているらしく、兵士は二人の回りを囲むように丸にくり貫いた様に空間を作っており、そのリングの中で二人は獲物をぶつけ合い、文字通り火花を散らしていた。

「はあああああ！」

「おおおおお！」

二人の気合いがぶつかり合い大気を震わす。

両方とも得物が長物なので、そのぶつかり合う様はまるで竜巻の様であった。

「あああああ！」

とてつもない力で空気を震わしながら放たれる華雄の轟閃を超絶技

巧をもつて趙雲が受け流す。

そして隙を見ては最速の突きが華雄を襲う。

「はぁ！」

幾重もの斬撃の合間に隼の如く朱槍の一撃が翔ぶ。

「む！？」

その翔んできた一撃を優れた動体視力と反射神経と経験で反応し、大斧の柄で反らしその反動を利用し、小さく、早く、今までの力任せの一撃でなく、業による達人の一撃を放った。

「っ！ちい！」

流石の趙雲もこの一撃は反応するのが精一杯で、槍を引き後ろに跳んだ。

「今のを避けるか……」

少し息をあげつつ吐き出すように感嘆の声をあげた。

それだけ渾身の一撃だったのだろう。

対する趙雲は「ふむ」と言うと、腕をダランとたらし一息ついた。

「いや、素晴らしい一撃でしたぞ。あと 半歩 貴女の間合いに踏み込んでいたら、避けられず私は二分されていたでしょう。」

と趙雲は言うが、呼吸を乱さず気だるげに言う様は感心しているようには見えなかった。

「はん……上等だ。」

大斧を構え、笑みを溢す華雄。

その笑みは肉食獣のような凄みのあるモノだった。そして、ソレこそが華雄であると言わんばかりに、放つ気が凄みを増した。

その気を受けて趙雲の顔から余裕が消えた。

「……失礼した。どうやら貴女の力を見誤っていたようだ。この趙子龍、全力をもってお相手致しましょう。」

「いくぞー」

「参る！」

ぶつかり合い、再び斬撃の竜巻と化す。

その隣の戦場では、夏侯姉妹と張遼の戦いが繰り広げられていた。

「きつつ〜」

苦虫を噛んだ様に戦局をみる。

まあ、単純に言えば2対1なのだ。

不利になるのは仕方がない。

兵士の数も負けているし、小細工による士気の差も袁紹の援軍により、全てが無に帰している。

覆水盆に帰らずだ。

作戦が失敗したのは誰のせいでもない。

この策は自分を初め、他の面々も納得して実行している。

これ以上の策は無かった。そう判断したから実行したのだ。

文智のせいにするはずが無かった。

(こうなったら、ウチら出来るのは少しでも時間を稼ぐこと。)

チラリと、猛勇を奮う敵将をみる。

「はは……きつそ……」

でもやるしかない！

決意を胸に秘め猛将夏侯惇に向かって重い一步を踏み出した。

第二十八話 踊る三國志 虎牢関封鎖できません！ 完結編

「とめるおお！」

「何としても呂布を止めるのだ！」

「左からかこぶぎあ！」

「虎牢関の呂布は化け物か……！？がはあ」

「ひい！助けてくれ！」

怒号飛び交う戦場は、打って変わって阿鼻叫喚の地獄と化した。

原因はズバリ、呂布である。

数百人単位で囲んで何とか首級を取ろうとするが、呂布は迫り来る兵士をあっさりと一掃してしまうのである。

断言できる。

彼女ならゾンビに集られようが生き残れるだろう。

そんなのが、屍が積まれた丘の上になっっているのである。



彼女の美貌と相俟って神々しさと、恐ろしさの両方を、見るもの全てに与えていた。

「うわぁ……さっすが呂布ね。祭、どれぐらい殺られた？」

「ざっと三千はいきますかのお。」

「正しく一騎当千か……」

どこか他人事のように会話する 孫策 黄蓋 周瑜の3人。

まあ、当たり前だ。

実際、他人事なのだ。

呂布に次々と一掃されているのは、孫軍の兵ではない。

全て袁紹の兵なのだ。

これが孫呉の兵なら、この様に平然としてられないだろう。

特に上下の繋がりが家族の様な孫軍である。

その総大将である孫策が平気な分けない。

「さて、どうしようかな？」

孫策は冷静に周りを見渡した。

誰もかれも、幽鬼の様な顔をして、恐怖に駈られるまま攻めている。

その戦いは危うく、ちょっとした事で反応し、酷いところは同士討ちしていた。

それが特に如実なのが曹操軍と袁術軍だろう。

董卓軍側が圧倒的物量を相手に持っているのは、ソレ故にだろう。

もし袁紹の援軍が無かったら此方は危なかった。

そう考えると今の力押しな状況は悪くない。

だが、やはり全体の半分近くがつかれている。

勝敗を決めるにしても、短期決着に越したことはないだろう。

「……雪蓮、提案がある。」

自分の欠点を補ってくれる友が、頼もしく不敵な笑みを浮かべた。

一方、反対側にいる張遼は夏侯姉妹相手に、苦戦を強いられていた。

兵力の差もさる事ながら、何処か精彩を欠く彼女の戦い方にも原因がある。

何時もの彼女なら、この程度の苦境なら嬉々として、己の武をもつて覆すだろう。

だが、時間を稼がねばという強い使命が、彼女の武をがんじからめに縛っていた。

「どうした張遼！ 貴様の力はその程度か!？」

迫り来る夏侯惇が、間に立ち塞がる槍袞を吹き飛ばし突進してくる。

（くっ！ やはり兵では話しにならないか。せやけどウチが夏侯惇の相手をしてまうと、夏侯淵の警戒が薄くなってまう。あかん……軽く詰んどる！）

張遼の受難は続く。

中央戦場では趙雲と華雄の決着が着きそうだった。

息を切らしながらも、無傷の趙雲。

対する華雄は満身創痍と言える。  
それほど息は上がっていないが、小さい傷が無数に付き、流れる血が体力を奪っていた。

「はあ……はあ……流石に……お互い……次の一撃が最後に……なりそう……ですな」

息も絶え絶え。

趙雲は無傷ではあるが、余程神経を磨り減らしていたのだろう。尋常でない汗をかき、隈が出来ていた。

「ふう……ふう……確かに、私も血を流し過ぎた。」

華雄も少し青い顔で応える。

大きく足を開き、大斧を横に構え、大きく呼吸をし始めた。

それに応えるように、趙雲も槍を構えた。

「……横雑だ。」

「む?」

ポツリと華雄がこぼした。

「私がこれから放つのは、ただの横薙だ。」

「！」

突如宣言をした華雄。

血を流し過ぎて気がふれたか？  
と考えるが、違う。

華雄の目は生きており、確かな闘志と強い意志が宿っていた。

「つまり、避けられるなら……防げるなら、やってみると？」

「まあ、そう言うことだ。このザマじゃ、お前の槍は防げまい。なら、この一撃に全身全霊を懸けるしかあるまい。」

華雄はそう言うと、笑った。

その笑みは、満身創痍の自分を自嘲するような笑みではなく、武人として総てを出せる喜びに満ちた笑みだった。

その笑みを見た瞬間、趙雲の背筋にえもいえぬ痺れが走った。

その痺れは趙雲の体に活力を与え、その心に過去最大の歓喜と闘志を与えた。

趙雲は……彼女はバトルマニアではない。

バトルマニアになるには、彼女は賢すぎた。

武を競う事は好きだが、戦いに喜びを見い出した事は無かった。

どんな戦いだろうと、勝利を得るためにはと最善を無意識に考え、戦いを難しく考えていた。

つまり、彼女にとって武術は勝つための術であると、何処か冷めて見ていた。

だが、極限まで斬り結んだ華雄を、敵味方関係無しに、無意識の内に認めていたのだろう。

その自分が認めた武人が、自分に対し総てを懸けた全身全霊の一撃を放つと、宣言しているのだ。

普段の自分からしてみれば、それは愚かな事だろう。

だが、その後の華雄の笑みを見た瞬間、全てがぶっ飛んだ。

そして悟った。

嗚呼……自分がそうである様に、彼女も自分を認めてくれていたの

だ。

答えにたどり着き、趙雲の人生の中で最大の喜びが走った。

故に

「……ただの突き」

「お？」

勝ち負けなど、どうでもよくなった。

「貴女が全身全霊の横薙なら、この趙子龍は最速の突きにて、迎え撃ちましょう。」

自然と笑みが溢れる。

今は只、この好敵手の一撃に最高の一撃で応えたかった。

互いの気が高まり合う。

静かに……大きく。

周りの兵も戦う手を止め、二人に魅入っていた。  
固唾をのみ、ただこの勝負の行方を見守る。

先に動いたのは……

華雄だった！

「うあああああ！」

鬼気迫る気合いで振るわれる大斧の横薙。

その効果音を表すと

轟

この一文字に冴き渡るだろっ。



普通の武人は、その武の無駄を無くし、最低限の力で最大の攻撃力を求める。

故に剣の達人等の一撃には音が無く、斬られた側も斬られた事に、気付かない事もある。

だがしかし、華雄の一撃はその真逆だった。

そう、華雄は他の達人の様に、無駄を無くすのではなく、己の力任せの剛撃……いや、轟撃を突き詰めたのだ。

達人からすれば、稚拙と言われるような一撃。

だが、華雄は愚直に自分のこの斬撃を突き詰めた。

たとえ無駄と言われようが、たとえどんなに否定されようが……

結論から言おう。

人間を侮ってはいけない。

虚仮の一念は岩をも通すものだ。

華雄の放った横薙の一撃は大気を轟かせ、聞く者を震わせる程の音を出しながら振るわれた。

## ソニックブーム

皆さんこの言葉は聞いたことが有るだろう。

物体が空気の壁を突破する速度……つまり、音速を越えると発生する衝撃波である。

華雄の大斧は 一瞬 だが、音速の壁を突破した。

大斧より放たれる轟音は、壁を突破した事によるソニックブームの音である。

現代においても、戦闘機の飛行によって発生するソニックブームは、地上の建物の窓ガラスを割るなど現象が確認されている。

遙か上空で発生したモノでも、この威力なのだ。

趙雲はソレを至近距離で受けた。

カウンターで放たれた最速の突きは、槍の穂先を衝撃波で破壊され、趙雲も壁に撥ね飛ばされる様に吹き飛んだ。

1回……2回……

ボールの様に跳ね転がっていく趙雲。

両腕があり得ない方向に曲がり、額から血が流れる。

対する華雄も、限界を超えた一撃をはなつたため、両腕から夥しい量の血が流れていた。

「ぜつ……ぜえ……わた……私の……か、勝ち……だ……」

息も絶え絶え、失血により意識も朦朧。それでも勝ちを宣言した。

趙雲は気絶しているのか、返事がない。

いや、死んでいるかもしれない。

実際、死んでもおかしくない吹き飛び方だった。

「死ん……だか？ 気絶か？ ……いや……どちらに……しても……  
…ふう……印を頂戴する。」

大斧を杖代わりに趙雲に近づいていく華雄。

曹操軍の誰もが趙雲の最後を覚悟した。

「っ！」

いち早く飛んでくる氣弾を察知した華雄が、倒れるように回避をし

た。

その隙に2つの影が趙雲と華雄の間に立ち、2つの影が趙雲を懐抱した。

「沙和！ 星は！？」

「大丈夫なの〜！ 気絶しているだけなの〜！」

「真桜！」

男が指示を飛ばすと、趙雲を懐抱していた一人が、地面に何かを投げつけた。

そこから『ポフン！』と煙幕が広がった。

煙玉だ。

もうもうと焚かれる煙幕が晴れた頃には、あの4人も趙雲もいなかった。

「逃げられたか……。」

座り込む華雄が、吐き出すように呟く。

《そのようですね。》

すると、いつの間にか曹操兵の格好から、官衣に着替えた文智が隣に立っていた。

「いたのか。」

《ええ、最後の一撃は素晴らしかったですよ。やはり、アナタにソレを貸したのは正解だったようですね。》

「まだ借りていて良いか？ コレに教わることも、まだ沢山有りすぎる。」

そう言って自分の腕にある武骨な腕輪をなでた。

《ええ、構いませんよ。しかし、随分とやられましたねえ？》

「半分は自業自得だな。」

《どれ、小生の切り札のチート一つで、治療してさしあげましょう。》

文智は座り込む華雄の頭の上に手をかざし、まるで塩を摘まむように親指、人差し指、中指をくつつけた。

《刃を納めなさい羅生丸》

そう言つと、指を擦り合わせる。

すると、パラパラと光る粉が文智の指から華雄に降り注ぎ……

「おお！これは！？」

失血して青くなっていた顔色が、どんどん赤みを増していき、傷口が塞がっていく。

満身創痍だった華雄がみるみる内に回復していく。

《さあ、どうですか？ 痛む所とがありますか？》

「いや、大丈夫だ。しかし……白兔から聴いてはいたが、これが仙木の力か……」

《ふふ……今日だけ特別ですからね。さあ、どうやら白兔が戻って来た様ですので……》

「了解した。これより華雄隊は姿を眩ます。幽州で合流で良いな？」

《ええ、お願いしますよ。》

「では、いくぞ」

『応!』

号令と共に華雄隊は姿を消した。

《ちて……》

チラリと孫策軍の動きを見る。

《流石に元気ですね。昨日は早めに休んだので、他とは動きも判断も違いますねえ。》

視線の先には、乱戦に紛れて虎牢関を目指す孫策達がみてとれた。

この孫策軍の判断は、董卓軍には一番効果的な行動である。

実は、主力が全て出張っているため、虎牢関はスツカラカンだったりする。

《ふむ……これはちょっと孫策さんと交渉していきますかね。》

一方その頃、張遼は夏侯姉妹に負け、捕らえられて曹操の前に居た。

「で？ 返事は？」

原作通りならこのまま曹操軍に下る所だが、既に史実と違い張遼は文智に懐柔されている。

まあ実際、文智が指示した作戦も曹操軍に入ると言う事だが、実は前提があり……

《白兔が戻って来るまで時間を稼いで下さいね。》

と言うのが、前提だった。

(うはぁ……どないしよっ……)



冷や汗をかきながら、どう返事を延ばそうか考えていた。

（張遼將軍）

そこに救いの白兔が現れた。

……とはいっても、声だけの登場だが。

だがそれでも、張遼からはピンチの補正もあって、何よりもその声を神々しく感じた。

（無事、董卓様は指定の場所に待機済みです。曹操に下って大丈夫ですよ。）

（た……助かった〜！）

こうして、張遼は曹操に下った。

**第二十九話 踊る三國志 董卓を解放せよ！（前書き）**

あゝ内容うっす！

周瑜さんの口調が……度忘れしてしまいめちゃくちゃです（涙）

月の云々は白兔さんに語ってもらおう予定です。

董卓戦は次話にて終了予定。

と、申し訳ありません。愚痴ってしまいました。

29話です。

第二十九話 踊る三國志 董卓を解放せよ！

各所で激戦が続くなか、混乱に紛れるように戦場を駆ける影が2つあった。

島津と劉備だ。

二人は董卓保護のため、先行して虎牢間から洛陽に入る気だった。全力で走る島津だが、劉備が後ろを気にしつつ、チラチラと振り返っており、なかなかスピードに乗れなかった。

「桃香急げ！」

島津から濁が入る。

だが劉備の顔には陰りがあった。

「……………」

島津は仕方なしと嘆息し、足を止めて後ろを走る劉備を振り返った。

「桃香……愛沙や鈴々が心配なのはわかる。だが、それで俺達が目的を果たせないのでは、あの二人の頑張りが無意味になってしまう。……桃香、俺達の目的を言ってみろ。」

「……董卓を救うことです。」

「そつだ。その為に、この戦いに参加した。俺も、桃香も、愛沙も鈴々も朱里も雛里も！……だから、だからこそ俺達が此処で止まっちゃうだめだ。今動けない愛沙や鈴々のために！」

「……そつだよね。」

顔を上げた劉備の顔には、先ほどの影はなく確たる意志が宿っていた。

「うん、行こう！ ご主人様。」

頷き合う二人。

戦場という場所でありながら、二人の立つ空間はまるで何人たりとも近寄れない、聖域のような空気を醸し出していた。

ちなみに、周りから「リア充氏ね！」と言う声上がるのは仕方がない。

戦場でラブ臭醸している二人が悪いのだ。

問答無用で敵味方から矢を射掛けられないだけ、まだましだろう。互いに手を取り合い、いざ洛陽へと駆け出そうとした時、

パチパチパチパチ

拍手が二人の足を止めた。

二人は警戒を大にし振り返り、その人物を見て直ぐ様警戒を解いた。

「「ぶ……文官さん」」

拍手をしていたのは文智だった。

……因みに、このKY登場に周りの兵達から文智へ、GJと敵味方関係無しにサムズアップが贈られていた。

《いや〜良いものを見させていただきました。結婚式には是非呼んでくださいね。》

文智のからかいの一言に思わず頬を赤く染め、再び桃色ラブ臭を醸し出している二人。

それを見て『チッ!』と舌打ちして、殺気立つ周りの兵達。

……なにげに、戦の最中だと言うのに、結構息が合って仲が良いよ

うだ。

放たれる殺気は敵ではなく、桃色ラブ臭を醸し出す劉備と島津に向けられていた。

モテない男にとって、彼女持ちは共通の敵のようだ。

……失礼。

殺気立つ兵達の中に女性も混じっている様だ。

外見から察するに、少し年が……

ゲフンゲフン！

失礼。

……人生経験豊かそうな永遠の少女達が、劉備と島津に殺気を飛ばしていた。

……なぜだろう。

書いていて涙が止まらなくなってきた。

少し重い空気の中、冷や汗を滴しながら島津が文智に問い質した。

「文官さんは何故此所に？ たしか、公孫贇軍はまだ後方だったはず……」

《小生は馬軍への支援でここにきています。》

「へ？ 馬超達、ここで戦っているんですか？」

《ええ、いらっしやいますよ。ほら、あそこです。》

文智が指差した先には、はじっこの方で張遼軍と戦う馬姉妹の姿があった。

「「あ……居ただ……」」

……なぜだろう……

馬超の扱いが公孫贇並みになっているような……

《まあ、支援と言っても、武器や食料の支援しか出来ませんがね。して、あなた達はどうしてここへ？》

文智の問いかけに互いを見合い、アイコンタクトを交わす劉備と島

津。

(どうする?)

(文官さんなら良いだろう。話せば力になってくれるかも?)

コクリとお互いに意思を確認し、文智に向かって口を開く。

「実は……俺達は董卓を救いに行くつもりなんです。」

「文官さん聞いてください、董卓は悪政なんてしていないんです!」

自分達が掴んだ情報を文智に話す劉備。

文智は黙って劉備の訴えを聞いている。

全てを聞き終え、《なるほど》と頷いた。

《やはり……そうでしたか。》

「そうでした? どう言う事ですか?」



《いえ……実はですね、小生の手の者を先に洛陽へ先行させていまして、その者から十常侍に殺されかけていた少女を保護したそうなんですよ。んで、その少女が董卓を名乗っているそうなんです。》

「ええええ〜！」

「そ、その子はどこに?」

《案内させましょう。白兔さん。》

「お側に。」

文智が呼ぶと傍らに白い装束と白い覆面をした人物が佇んでいた。

《お二人を案内してくれませんか?》

「御意。では、島津様、劉備様、ご案内致しますので後についてきて下さい。」

「あ、はい! 文官さん、ありがとうございます!」

「ありがとう文官さん！」

礼を言つて白兔についていく二人に、文智はひらひらと右手を振つていた。

《さて……此方の用事は終わりました。出てきたらどうですか？》

そう言つて後ろを振り返ると、物陰から二人の女性が姿を現した。

一人は眼鏡をかけた美女で、もう一人は少しキツイ感じの少女だった。

「なかなか鋭いな。初めまして、裏切者さん。」

《裏切者とは随分ですねえ。何を根拠に小生が裏切者なのですか？》

「残念だけど、とぼけても無駄よ。李文智。」

名前を言い当てられて、内心動揺する。

《おやおや、小生も有名に成つたものですねえ。目立つ事は何一つ

して無いんですがね」

「そうね、貴方自身は何もして無いから、探すのは苦勞した。けど、部下はそうでもないわ。」

「先程の白い男とは刃を交えた事がある。」

《っ！……なるほど、そっち経由でしたか。盲点でした。》

にこやかに相手に対応する文智。

だが、内心はこの危機をどう回避するか必死で考えていた。

「悪いけど、お前は厄介過ぎる。ここで消えて貰うわ。」

美女の言葉で武器を構える少女。

チリンと小さく鈴が鳴る。

《うう！……ま、待って下さい！と、と、取引をしませんか？》

「問答無《貴女方が故郷を取り戻すのに、必要な物を差し上げます！》……なんだと？」

《これです!》

慌てて懐から金色の物を取り出す。

ソレをみた美女が、目を剥いた。

「なっ! ソレはまさか!」

《ええ、玉璽です。》

切り札を出して、相手の手が止まったのを確認したからか、いくらか文智の顔に余裕が戻ってきた。

「……なぜ、ソレを?」

《先程言った様に、部下が洛陽へ潜入しまして、董卓さんを助けたついでで見つけました。》

強調するように、前に玉璽をつきだす。

《如何でしょう、これを貴女達に差し上げます。ですから、小生を見逃してくれませんか？ 周瑜さんに甘寧さん。》

文智は必死で、相手の目を見て話し掛ける。

その文智の目をじっと睨み付ける周瑜と甘寧。

「……良いだろう。ソレは頂こう。」

周瑜の言葉に、ほっと息をはく。だが、それが致命的だった。

取引は、成立間際が一番危険なのだ。

周瑜の意を汲み取った甘寧が動く。

その手に持つ刃は、静かに文智の心臓を貫いた。

《……がっ……は……》

「だが、お前はこの取引以上に危険だ。なので、殺して奪う事にする。」

ずるっと血に塗られた剣を抜く。

文智は、貫かれ空いた穴を塞ぐように、貫かれた胸を掴む。

だが、流れる血は止めどなく、文智は己の血で出来た海に前のめりで沈んだ。

第三十話 拠点（あんやく）フェイス その1（前書き）

まずは、感謝を。

ルチア様、青い石様。

お二方が書いて下さいました感想をヒントに、今まで悩んでいた周瑜との交渉内容が、決まりました。

深く感謝を申し上げます。

これからも、未熟な作者に、色々ご指摘、ご指導頂ければ幸いに御座います。

では、

拠点フェイスその1

に、御座います。

### 第三十話 拠点（あんやく）フェイス その1

いまだ喧騒絶えぬ虎牢関。

幾人もの人間が数秒ごとに命を散らしていく。

地獄……実際の地獄に比べれば、まだ生ぬるいだらう。

だが、渦中にあつて戦う人間には、その屍が広がる風景にこの世の地獄と思えるだらう。

そして、ここ虎牢関にて二人の女性が消え行く命を見ていた。

その路傍の石でも見るような視線の先には、血溜まりに横たわる一人の男性の遺体があつた。

「呆気ないな。名だたる軍師を手玉にとつた男も、こつなれば只の肉か……」

「……………」

「何やら不満そうだな、思春。まあ、仕方無い。実際会ってみても小者だった。」

「……………」



「まったく、杞憂だったか。唯一の収穫はこの玉璽だけだ。……いや、玉璽を手にいれただけ……!?!」

喋っている周瑜を突然甘寧が押し倒した。

その後、周瑜が立っていた場所に大きな何かが、回転しながら通り過ぎた。

その何かが通った位置は、丁度周瑜の首があつた位置だった。

そう、甘寧が周瑜の話しに無反応だったのは、敵の存在を察知して警戒していた為だった。

「な……!?!? なにが……」

突然の事に動揺し、事態の把握に勤める周瑜。

その背後に黒い影が音もなく立ち上がる。

太陽でさえ照らせぬ黒い影は、血走った眼で刀を振り上げ、周瑜の頭部めがけて振り下ろした。

凶刃は周瑜の頭部を二分する直前、間に入った甘寧によって防がれた。

「何も「だああまねえええええ！」っ！」

殺気だった影は、迷子だった。

その目は怒りに染まっており、放つ殺気は刺すように痛い。  
黒い包帯を何重に巻いた覆面の上からも、その表情が憤怒に歪んで  
いるのが見てとれた。

「貴様等ああ！ よくも……よくも坊やおお！ 殺す！ ころ  
す！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！  
クロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コ  
ロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス  
！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス！  
殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す  
！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！  
ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころ  
す！ コロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！  
クロス！ 殺す！ ころす！ コロス！ 殺す！ ころす！ コ  
ロス！ 殺すううううううううううううううううううう！」

「なっ………！」

「く………！」

迷子から放たれた狂気……いや、凶気は、目の前にいる二人の身を  
すくませた。

「あああああ

あ あ

！」

最早ソレは人の声では無かった。

荒れ狂うジャバハウオック魔獣は、凶気に促されるまま、二人に突進した。

凶気に吞まれ動けない周瑜と甘寧。

次の瞬間、いくつもの鋭い風切り音が、二人の命を救った。

風切り音と共に無数の矢が、迷子に降り掛かりその身を穿った。

「  
がああああああ！」

手を、足を、肩を、背中を、首を、目を、荒れ狂う迷子の至るところに矢は刺さり、その動きを止めた。

矢を放ったのは、周りで戦っていた兵士達だった。

董卓軍も、曹操軍も、袁紹軍も、袁術軍も、皆戦う事を止め、その視線は殺気を込めて迷子を見ていた。

さて、賢い皆様なら気付いていらっしやるだろう。

そう、周瑜と甘寧が居るこの戦場には、孫策軍の兵士が居ないので

ある。

それは何故か。

「残念だったな、化け物。既に虎牢関は、我々孫策軍が落とした。ここで戦っていた兵は皆、我が軍の精鋭だ。」

そう、ここにいる兵は皆孫策軍の兵士だった。

敵の主戦力が全部攻勢に出た今は、虎牢関の守りは手薄。落とすなら今しかないと乱戦の合間を縫って、孫策軍は虎牢関に攻め入った。

勿論、たかだか3千程度が攻めた所で、簡単に落ちる虎牢関ではない。

では、どうやって孫策軍は虎牢関を落としたのか？

答えは、敵が居なかったから。

そう、孫策軍が虎牢関を攻めた時敵は一人も居なかったのである。実は、この状況は周瑜の読み通りだった。

周瑜は董卓軍のこれ迄の戦い方は、相手の裏をかいた搦め手の様に見えるが、その実は時間稼ぎがしたかったのではないかと読んだ。

ソレが確信に変わったのは、空城の計の時である。

そうになると、敵の勝敗条件は一体何なのか？

周瑜はソレを董卓の生存だと読んだ。

そうになると、全てが繋がる。

此方の行動を読んだ足止めの策。

兵力への損害ではなく、兵糧や士気への損害を目的とした搦め手。

今や知らぬものが居ないほど、その武を示した華雄。

そして、その華雄の名の威を使った威嚇牽制。

全てが、敵を倒すために無く足止めのさせるために使われていた。

おそらく、董卓を逃がすための時間稼ぎなのだろう。

だが、ここで一つ疑問が浮かび上がる。

董卓を逃がしてどうする？

逃げた所で、董卓の巻き返しは不可能だ。

そう成るくらいなら、徹底交戦をすればいい。

現に此方は今までの搦め手に、撤退の危機まで追い詰められていた。

思えば、シ水関の時もそうだ。

張遼が撤退しても、構わず袁紹の首を取れば、此方は大打撃を受けていただろう。

何故なら兵数の大半が袁紹の兵なのだ。

それだけで優位に立てるし、大義名文を掲げる袁紹が死ぬだけで、この連合は揺るぐ。

それをしないのは何故か。

答えは第三者の意思。

周瑜は連合に裏切者がいたと言った。

もし、これ迄の戦いがその裏切者の策に依るものだとすると、なんという予定調和……

まるでくると決まった踊りをなぞって舞っている様ではないか。

おそらく、その第三者は董卓と何等かの取引をしたのだろう。

その代償がこの戦い。

これだけの大規模な戦なのに、未だ将が誰一人として脱落していない。

もしこれが全て決まりきっていたのなら、その裏切者は己の掌たかひじころ一つで、この戦場にいる何万の人間を操りきったと言う事になる。

周瑜の背中に薄ら寒いものが伝う。

そして、その考えが真であると確信したのが、虎牢関での袁紹の援軍である。

周瑜は見た。

攻勢に出た直後の董卓が、大軍を目の前にして僅かに動揺したのを

……

周瑜はソレを直ぐ様予定外の出来事なのだと悟った。

同様に、コレは好機なのだと。

即座に周瑜は孫策に虎牢関攻めを具申した。

と同時に、虎牢関が落ちた後、指揮権を一時的に譲渡してほしいと

……

周瑜はこう考えた。

もしこれが裏切者にとって予想外の事なら、まだ余力がある我々が虎牢関に殺到すれば、更に焦るはず。

そうなれば、態々戦場に孫策へ使者をよこす様な奴だ。

何等かの行動を起こすかもしれない。

その予想は中った。

虎牢関に入ってきた二人の男女。

たしか劉備と島津を、虎牢関から遠ざけた後に声を掛けてきた。

その落ち着き様から、今この場には孫策軍の兵しか居ない事に気付いているのだろう。

余程肝が据わっていると思いきりや、命乞いをしてきた。

流石に興を削がれたので、殺してしまったが……

「なるほど……もとから坊やを殺す気だったと言っわけか。」

針鼠の様に矢が突き立っているのに、何事も無いように喋る迷子。

そう、文智の存在を脅威に感じた周瑜は、始めから文智を消すつもりだった。

その為に、虎牢関を占領したあと、まだ戦っている最中を装い、中を孫呉の兵で固め、一種の封鎖空間を作り出した。

「くっ……くく……くはははは！　そうか！　そこまで明確な殺意を持っていたか！（第……門……い）」

急に笑い出した迷子。

体のいたる所から血が流れ出て、明らかに重体であるにもかかわらず、関係無しにと殺気を放ってくる。

「化け物め……！」

思わず吐き捨てる周瑜。



ソレを聞いて、迷子は覆面の上からも分かるニタアとした笑いを魅せた。

「そうさ、お前達は化け物に全員殺される。坊やを手にかけて事を悔いて死にな。」

第5杜門……開！」

何かが変わった。

今までとは全く違う。理性を失なった獣でなく、理性を持ったまま目の前の存在は人外になった。

其を察知した兵達は、槍を構え周瑜と甘寧を庇うかのように、立ち塞がった。

「周瑜様！ お逃げください！ この者はいじよ（グバァ！）」

逃亡を促した兵は最後まで喋る事が出来なかった。言い終わる前に、迷子の拳で頭を砕かれたからだ。

「逃がさない。」

飛び散る脳症越しに、狂気と殺意に染まった目が、孫策軍の兵を…

…周瑜と甘寧を捉えた。

虐殺が始まった。

断末魔の声はない。  
声をあげる間も無く兵達は粉碎された。

その死因をなんと表記すればいいだろう。

撲殺？

斬殺？

銃殺？

いや、どれも違う。

死に方は爆殺ともとれるが、爆発して死ぬのではない。

先程説明した通り、砕かれていくのだ。

あえて言うなら、砕殺だろう。

あまりの光景に、周瑜は呆然自失となった。

周瑜を立ち直らせたのは、甘寧だった。

「退きます。」

「なっ……だが……！」

「アレはどう仕様もありません。」

「くっ！……わかった」

話が纏まると、対峙していた兵が周瑜に言った。

「我々が時間を稼ぎます。どうか、お逃げください。」

「すまない。後を頼む。」

そう残すと、周瑜と甘寧はその場を後にした。

「うあああああ！逃がすかあああ！第6景門かああいいいいいい  
」

数分後、周瑜と甘寧はまんまと逃げきった。

虎牢関には、細かな肉片と、大量の血と、横たわる文智の死体と、ボロボロの迷子だけだった。

第三十一話 拠点（あんやく）フェイズ その2（前書き）

中途半端ですが、悩んだあげくここで一旦切ります。

理由は、後書きのアンケートにて説明します。

第三十一話 拠点（あんやく）フェイズ その2

赤

赤

赤

ただ赤が広がる血の海。

虎牢関内部は、辺り一面血の海となっていた。

その中心に立つ黒い影。その両手両足は赤黒く染まっており、黒の装束を更に暗い色に染め上げていた。

この血は彼女が流したものではない。

彼女と戦っていた孫策軍兵士のものだ。

しかし、不思議な事に彼女の周りには血の海しかない。  
肝心の死体が存在しない。

何故か？

目を背けたくなる程の惨劇の後だが、良く目を凝らしてみると、血の中に何かの塊がある。

それもその筈。

彼女は敵を文字通り粉碎していたのだ。

尽く、形すら遣す事すら赦さず、その拳で粉碎した。

「逃がした…… コロス…… 許さない…… 逃がさない…… 逃がさない……！」

殺し尽くし血にまみれ、なお更なる殺戮を求めると言うのか、口からは止めどなく呪詛が吐き出されていた。

「そこまでだ迷子。」

狂気に塗り潰されていた彼女を正気に戻したのは仲間の声だった。

「……止めるな。」

「命令だ、止める。」

迷子の背後には騎士こと関平が立っていた。

「命令？ 誰から？」

彼女達は、猫以外は公孫贖の直臣ではない。

なので、彼女達に命令できるのは一人しか居ない。

その事実が狂気に染まった迷子を、だんだんと正気に戻していた。

騎士も

「そんなの、一人しか居ないだろう。」

と返しつつ、血の海に沈んでいる文智の側に立つ。そして……

「いい加減おきろ！」

容赦無くその死体に、蹴りを入れた。

「ぶぎぢやあー！」



左の横つ腹を蹴られた死体からは、男性の声ではなく可愛らしい少女の悲鳴が聞こえてきた。

そして、死んだはずの文智が何事も無かったかの様に、ムクリと起き上がった。

「うっ……酷いよっ蹴ること無いじゃないのさー！」

不満げな表情で、蹴られたのは左横つ腹なのに、なぜか左側頭部を痛そうに撫でている。

「知るか！ いつまでそんなのを着ているつもりだ。さっさと脱げ。」

「うっ、わかったよ。」

すると、文智の体が持ち上がり、横にどしゃつと倒れた。

倒れた文智のスカート状の文官衣から、小さな足が覗いており、タバタともがきながら小さな女の子が出てきた。

白兔と同じ白く動きやすそうな装束を着た小さな女の子だ。

「……………猫？」

迷子が呟いた。

そう、文智の中から出てきたのは、文智の密偵5人衆の一人『猫』だった。

「では、坊やは……」

「ふっふっふ！ 似てるでしょ。これね、僕の作ったカラクリなんだよ！」

鼻息を荒く小さく平らな胸を張る猫。

対して、真実を知った迷子は呆然といった感じだ。

「……はっ！ で、では、この大量の血は？」

迷子が指差す文智のカラクリが横たわる場所には、鮮やかな赤の血溜まりが出来ている。

「一口舐めてみる。」

「……?」

とりあえず、騎士に言われるままに、指に血を付け覆面の隙間から舐めてみた。

「これは……石榴？」

「そうだよ。手に入れるのに苦労したのに……ホントに大盤振る舞いだよ。」

「つまりこう言う事だ。文智様は猫に自分そっくりのカラクリを作らせ、猫を代理にたてられた。見ての通り、猫の身長は文智様の腰の辺りまでしか無いからな。わざわざ文官相手に足下を攻めるのは居ないだろう。確実に仕留めるなら……」

「首か心臓」

「その通り。袈裟斬りで左半身の急所でも良いがな。その何れかを攻撃すると、石榴の汁が勢い良く飛び出ると言うわけだ。まあ、臭いや色で簡単にバレるが、人の体から赤い液体が飛び出るのは、一見ただけでは分からんさ。」

いったん言葉を切り、騎士は真っ直ぐ迷子を見る。

「直後に乱入者がいたのだ。違和感があっても、それ処ではない。」

つまり、迷子の暴走も文智の計算の内だったのだ。

「成程、我不動、策」

完全に落ち着いたのか、迷子にいつもの調子が戻ってきた。

「だな。お前の怒りが真に迫っていた為、甘寧もその刃に付いたすっぱい汁なぞ気付かなかつたし、周瑜も騙せたと言うわけだ。」

騎士は迷子に歩み寄り、懐から平べったい薄桃色の物を迷子に渡した。

「『騙してすいませんでした。』だそうだ。」

平べったい物を受け取った迷子は、口元の覆面をずらし、平べったい物にかぶり付いた。

どうやら果実……桃のようだ。

辺りに特有の甘い香りが広がっている。

「問題無、我忠誠不動」

そう言つて桃をほお張り、プツと種を吐き出した。

「美味しそつだな〜僕も食べたいな〜」

迷子が桃を食べるのを見て、猫が人差し指をくわえながら、羨望の眼差しで見っていた。

「仕方無いだろう。迷子の体は、技の反動でボロボロなのだ。アレを食べなければ死んでしまう。」

「う〜ボクだつて頑張つたのにい。頭の上を刃物が通るのつて、物凄く恐かつたんだよ！」

「はいはい、後で文智様に頼め。」

やれやれと頭をふる。

「で？ 迷子、身体は大丈夫か？」

「是、完全回復」

桃を食べ、身体のアチコチを動かしながら、迷子が答えた。

「そうか……しかし、

『八門遁甲』だったか？ 強大な力が入るとは言え、命と引き換えとはな……難儀な技だ。」

「裏蓮華、修得必要？」

「いや、辞めておく。敵を倒しても、死んでしまっただけでは護れないからな。護衛組には下策な技だ。」

下策な技だと一蹴され、少し哀しそうな迷子だった。

「閑話休題、主何処？」

「あ……」

問いただされ、少しバツが悪そうに頭を書く騎士。

そこにKYにも、にこにここと無邪気な猫が、言い辛そうにしている  
騎士の代わりに口を開いた。

「ご主人様なら、孫策軍の本陣にいるよ。」

「はっ。」





第三十一話 拠点（あんやく）フェイズ その2（後書き）

はい！

と言っわけで、31話でした。

さて、前書きにもありましたが、かなり不自然かつ中途半端な所で切らせていただきました。

なぜか？

それは、これから先は文智目線で書くか、第三者目線で書くかを迷ってしまったわけです！

ええ、今回の董卓の乱ではいつの間にか第三者目線になってましたからね……

理由？

ぶっっちゃけ……

そっちの方が書きやすかったから。

……

……

……

ごめんなさい！

ごめんなさい！

だから石を投げないで！

それはっ……

ア　　！！！！

(しばらくお待ち下さい)

失礼しました。

てなわけで、ここはぶっちゃけ読者の皆様に判断を仰ぎたいとおも  
いまして。

これからの話しは……

- 1・文智目線がいい!
- 2・第三者目線で!!
- 3・使い分けでよくな?

のどれか、ご意見をお聞かせください。

厚かましい事では御座いますが、ご協力ほど、よろしくお願い申し上げます。

わがみち でした。

**第三十二話　まだまだ拠点（あんやく）フェイズ（前書き）**

お待たせ致しました。

かなりツッコミどころの多い内容ですが、取り敢えず投稿させていただきます。

最初に言っておきます。

呉ファンの皆さま方、ごめんなさい！

今回に関しては、皆様寄り目気味でご覧ください。

### 第三十二話 まだまだ拠点（あんやく）フェイズ

虎牢関から命からがらと脱出できた周瑜と甘寧は、ようやく孫策軍本陣についた。

「めっ……冥琳！ 思春！ どうしたの?! ボロボロじゃない！」

土にまみれ、衣服もボロボロの二人に驚愕したのは、総大将の孫策だった。

「大丈夫よ。しかし、抜かった……あんな化物がいるとはね。」

息を調え、土を払い、身嗜みを治す。

「他の兵は？」

気を持ち直そうとした所に、主から痛いところを聞かれた。

自覚してしまうほど、沈痛な面もちになり、ただ一言

「すまない……」

その謝罪に、どれ程まで贖罪をこめたらここまで悲壮と感じるだろうか。

周瑜の謝罪はそれだけで心に訴えるモノがあり、それ故に、その言葉が心からのモノだと感じる事ができた。

「そう。」

故に、孫策もそれ以上は何も言えなかった。

周瑜が己の責任と、心を砕いているのである。

主としては、それを受け止め以後の対処に動くしか無い。

末端の兵に至るまで、家族の様な絆で結ばれた孫策軍だからこそその光景だった。

「しかし、そこ迄の化物が相手にいたとはね。私も少し迂濶だったかな。」

少しおどけながら、俯く周瑜の肩に手を置き慰める。

「面目無い。預かった大事な同朋を……」

「冥琳が生きてただけ僥幸よ。」

「ごめんなさい。今日の汚名は必ず灌ぐわ。」

決意を新たに、宣言する周瑜。

それを温かく見守る孫策。

その光景は、まるで一枚の絵画を見ているかの様に神々しく、美しい光景だった。

招かれざる乱入者が居なければ……

パチパチパチ

何処からか、乾いた拍手が聞こえてきた。

『『『!?!?』』』

何処からともなく響く拍手の音に、警戒を顕にする。

だが音はすれども、姿が見えない。

360度見渡しても、だれが拍手しているのか、分からない。



「何者じゃ!」

見えない敵にいち早く気付き、気配を掴んだのは、老練な黄蓋だった。

油断無く弓を構え、その先には天幕の入り口に佇み拍手をしている文官衣の男が立っていた。

何者と誰もが思っただろうが、この場にいた全員は違う共通の疑問をだいた。

いつから其所にいた?

当然見張りの兵は油断無く警戒していた。

陣内の兵も警戒を怠る事はなかった。

なのに、その男が此処まで侵入した事に誰も気付けなかった。

「お前……李震!」

侵入者に対して、声を上げたのは、周瑜だった。

「李震？ たしか、公孫賛の次席政務官だったわね。」

《おやおや、よくご存知で。》

文智は拍手をする手を止めると、孫策達に歩み寄る。

《いやいやいや、素晴らしいモノを見せていただきました。感動…  
…そう、実に感動しましたよ。》

ぼんやりとした笑みを張り付け近寄る文智に、周りの兵も否応なしに緊張が高まる。

《美しき主従の絆……実に美しい。》

人を馬鹿にしたような笑みで近寄る文智に、お返しと周瑜が毒を吐いた。

「なんだ、羨ましいか？ お前と公孫賛の不仲は聞いている。」

《あいたたたた……見事にシッペを返されましたか。》

「なぜ生きている。」

周瑜の殺気のまじった問い掛けに、ただ笑みをもって受け流す。

周瑜の疑問に答えたのは、文智ではなく甘寧だった。

「これを。」

甘寧が周瑜に差し出したのは、自分の武器だった。

先ほど文智の偽物を貰ったモノだ。

その刃には、赤い液体が乾燥して染みの様にこびりついている。

一見、血を拭うのを忘れてしまった様に見えるが、周瑜はその違和感に気付いた。

匂いだ。

その染みからは、血液特有の鉄が錆びた様な匂いがしない。

それどころか、果実の様な芳しい香りがしている。

「成る程、人ではなかったか。」

「おそらく、ハリボテかと」

《そゆことゝ残念でしたね》

軽い口調の挑発に、周瑜と甘寧から殺気がもれる。

いや、二人だけではない。

周瑜の行動を把握していた孫策からも、鋭い殺気が発せられていた。孫策からしてみれば、同志の死がが無駄死になってしまったのだ。

逆怨みと自覚してはいるが、納得がいかなかった。

《おや、怖いですね。また小生を殺しますか？　ここは密室ではなく、目がありますよ。》

虎牢関とは、状況が違う。

閉ざされた空間ではなく、各勢力の密偵が耳をそばだて、此方の行動を窺っている。

「ふん。でも、侵入者を捕らえるなら、何も問題無いわよね。」

《あら？》

咄嗟に思い付いた言葉だが、結構会心の仕返しになり、イタズラ小僧の様な笑みを浮かべる孫策。

対しておもいつきりアテが外れて、絶体絶命？ になってしまった文智。

「なわけで、捕らえちゃって。」

ニツコリと優雅に微笑み命令が下される。

主の命令で周りにいた兵士が槍を文智に向ける。

《あ、あららら……これはピンチ。前にでばってきたのは、失敗でしたかね？ 似合わない事はするものじゃないですねえ。》

「観念してお縄につきなさい。」

兵士から発せられる気配が、高まる。

本格的にヤバいと悟った文智は、開いているのかいないのか分からない程の糸目を閉じて、見開き一言命令した。

《皆さんすいませんが、動かないで下さい。》

強くはなく、やんわりとした口調。

敵である文智の命令に、孫策軍の兵士は動きを止めた。

「何をしているの、早く捕まえなさい！」

突如として動きを止めた兵士に、戸惑いながらも命令を下す。

しかし、主である孫策の命令でも、兵士は動こうとはしなかった。

「ちよっ……ちよっ！ みんなどうしたの?！」

動かない兵士に狼狽える孫策。

「すみません、殿。ですが、動かないのです。手も足も……指すら動かさないので。」

「動かないって、大丈夫なの?！」

苦しそうに、主の問い掛けに答える兵士。

さしもの孫策も、外面を取り繕う事もせず心配しだす。

「李震！ 貴様……何をした！」

周瑜は冷静に文智の仕業と警戒しだす。

黄蓋も油断無く弓を構え、甘寧は原因である文智を仕留めようと動き出す。

だが、その全ての機先を制したのは文智だった。

《あ、孫策さん達も動かないでくださいね》

チラリと孫策達を一瞥し、動くなど言葉にする。

すると、己の意思に反して孫策を初めとした将達の動きが止まった。

「うそ?!」

「なっ！」

「う、動かん……!」

「……不覚っ！」

各々驚きの声を上げつつ、状況を打破するため四肢に力を込めて抗うが、ピクリとも動かず、孫策は兵士の方を支えた体制で、周瑜は文智を睨み付けた体制で、黄蓋は弓を引き狙いを文智につけた体制で、甘寧は正に文智に向かって走り出した体制で、彫刻の様に止まっていた。

《すみませんね、不便かと思いますが、争いに来たのではないので、動きを止めさせていただきました。》

済まなそうに言いながら、孫策に近づく文智。

《そんなに睨まないでください。小生は交渉をしに来たのですよ。》

交渉？

周瑜はその言葉に、何処か異質な違和感を覚えた。

「（ためすか？）それは、お前から奪った玉璽の事ですか？」

周瑜の言葉に、周りにいた孫策達は度肝をぬいた。



何度も言つが、ここは虎牢関とは違い各勢力の間者が聞き耳を立てている。

そんな中でその様な事を言えば、他の諸侯に自分達を誅する口実を与えるだけでなく、後々の弱味になりかねない。

そんな事は百も承知している。

だが、周瑜の中のナニかが告げるのだ。

この男に主導権を渡してはならない！

根拠はない。

だが、この直感とも言つナニかは無視してはいけない気がするのだ。

だから懐に飛び込んでみた。

これに対して文智は、まるで心外と言わんばかりに驚きの表情を周瑜にみせ、体の動かない彼女の顔をのぞきこんだ。

《玉璽？ 何を言っているのです？ アレは差し上げたんじゃないですか。》

これには主導権を握るために、懐に飛び込んだ周瑜が戸惑った。

襟を掴んでこれから投げようとした刃を、逆に投げ返された様なものだった。

しかし、文智の攻撃は終わらない。

周瑜は文智からトドメの一撃をくらう。

《小生のお願いを一つ聞いて戴く変わりに、玉璽奪還と言つ手柄を譲つて差し上げたんですよ。忘れちゃったんですかあゝ？》

そついう事か！

周瑜は全てを理解した。

してやられた！

いいように踊らされ、悔しさのあまり唇を血が出るほど噛みしめる。だが、諦めない。

無駄かもしれないが、言葉を返す。

「ああ、そうだったわね。玉璽は、お前が譲ってくれたのだったな。でも、お前の願いを聞くとというのは、約束はしていないはずだが？」

## 舌戦

周瑜と文智の間には、いつの間にか舌戦が繰り広げられていた。

互いに微笑みながら、言葉にて斬り会いをしている。

《いやだな〜忘れたんですか？ あんなに快く承諾してくれたじゃないですか。》

「そうか？ ……いや、やはり記憶に無いな。」

《いやいや、確かに約束しましたよ〜》

「ほう……では、ワタシがお前と確かに願いを聞くと云う約束を交わした証拠があるのか？」

そんなもの有るわけがない。

実際に二人の間にそんな約束は交わされていない。

それに、所詮は口約束。こちらに其を守る義理はない。

しかし、周瑜の顔色はすぐれない。

それは、文智が何を仕掛けているか、分かっているからだ。

（無駄な足掻きと解っている。しかし、何もしなければもっと状況が悪くなる。）

このあたりは、さすがは周公瑾といった所だろう。

実際に文智は心の中で合格と、喝采を上げていた。

これから主と故郷の背中を預けるのだ。

これくらいの苦難は軽く越えてもらわないと、未来は無い。

《実は虎牢関にいた時に、お客様を招待していましたね。今も主の元でお茶でも飲んでいるでしょうねえ。》

はぐらかしてはいるが、ようは

“言うこと聞かないと大変な事になるZ〇”

と脅しているだけである。

《あそこで乱入者がいたんですよ？ 他にも誰かが見ていたとは思

「はいませんか？」

「ここにこと可能性を突きつける文智。」

「そう、可能性である。」

「実際に、あの場で起きたことを、他の勢力の者が見ていたと言う確証はない。」

「文智のハツタリである可能性が高いのだ。」

「だが同時に、文智の言っている事が本当である可能性も存在するのだ。」

「周瑜にしてみれば、孫家に害なす存在を、早めに排除せねばと取った行動は結局、自身の首を締めたただだった。」

「（くっ……ぬかった。かくなる上は、この身にかえてもヤツを……！）」

「密かに覚悟を決めた周瑜だが、」

「あんまりウチの軍師を、いじめないでほしいな。」

「先程までの口調と違って変わって、かなり砕けた口調で声をかけてき」

た。

《うふふふふ〜周瑜さんみたいなクールビューティーってSっ気を  
撥られるんですよね〜》

「く、くーる、何？ 何か解らないけど、君はワタシ達に何を要求  
するの？」

何かが彼女の琴線に触れたのだろうか、面白いオモチャを見る子供  
の様な目で文智を見ていた。

「駄目だ！ その男の言うことを聞いてはいけない！」

周瑜の警告なんのその。

一つウインクを返し、文智を見る。

対する文智も、さすが小霸王と心の中で賞賛しつつ本題をきりだす。

《小生達と同盟を組みませんか？》

「同盟？」

少し拍子抜けだった。

てつきり、弱味に漬け込まれ物凄いいことを要求されると思っていた。拍子抜けしている孫策とは違い、周瑜はその同盟で発生する利益、目的、危険性を冷静に見抜いていた。

「成る程、曹操と袁紹に対するための同盟か。」

《さすが周瑜さん。話が早くて助かります。》

「どーゆーこと?」

軍師二人で通じあっている内容に、?を浮かべる孫策。文智は丁寧なそれを説明した。

《もし、貴女方が袁術さんから独立し、呉の地を取り返し、領地を広げるとしたら……恐らく北に曹操さんと袁紹さんを置いて動く事になるでしょう。》

文智の説明に周瑜が続く。

「だが、我々の敵は北だけではない。我々が旗揚げをしたら、民の混乱を理由に周辺にいる諸侯が攻め込んで来ることもある。」

《当然そうならば北に守りを割いてなどいられませんね。》

「そこで我々と幽州の公孫贛が手を組めばどうなる？」

《丁度あの二人は北と南に挟まれた形になりますからねえ》

「奴等が何か行動をおこす場合、常に背後を警戒しなければならぬ。」

《それに、あの二人は犬猿の仲ですからね。手を組むなど、まず無いでしょう。》

「それ処か早早互いに食い会つかもしれない。そう成ったが最後、我々の同盟関係の存在で下手に動けなくなる。」

《その際に我々は力を付けるなり、対策を講じるなりすれば良い。》

「呉と幽州……つまり北京、北平、遼西は海に面している。つまりは塩が取れる。」

《内陸に位置する曹操さんと袁紹さんは喉から手が出るほど欲しいでしょうねえ。そのジレンマは凄まじいでしょうねえ。》







「と云うか、儂等何時までこの体制のまま固まって居ればいいのかの？」

《ああ、すいませんね、今解除します。》

先ほど迄の殺伐とした空気が嘘の様な、和やかな空気が流れ出した。

第三十三話 拠点(きよてん) フェイズ 李文智 その考察(前書き)

久々文智視点でございませう。

第三十三話 拠点(きよてん) フェイズ 李文智 その考察

文智SIDE

「まずは、蟠桃河の防波堤の設置に關しまして……」

どうも、李文智です。

現在小生達は洛陽から幽州に帰ってきました。

孫策さん達とは良好な関係を築く事が出来ました。

その後反董卓連合は洛陽に入り、史実通り帝を救出し解散しました。

その功績で桃香ちゃんは平原の相になりました。

ええ、史実通りですね。恋姫の世界では元から蜀が存在していたような流れでしたが、こちらの世界は幾分正史の流れが存在するようです。

まあ、思いがけないハプニングがありました……

「2年前からペンギン……失礼、北京村の南に建設していたら連砦ですが、つい先日完成致しました。幽州に横たわる長城になりますので、南からの進行は……」

まず、公孫度を始めとした幽州の勇が、公孫贇ちゃんに降伏してきました。

これには小生もビックリしました。

歴史的にも有名な引きこもりですが、実際に会ってみると……

押し入れに引きこもった女の子でした。

公孫贇の使者として遼東に行ったら押し入れの前に案内され、扉越しに会話する事になりました。

アレは不思議体験でしたねえ。

まあ其を踏まえた結果なんと、

『幽公 公孫贇』

が、誕生しました。

なんとまあ、我が幼馴染みは偉くなったモノですな。

今や国持ちです。

小生も仕えがいが有るというものです。

……今までなのですが。

実はもう一つハプニングが有りまして、実に個人的な事ですが……

小生、降格しました。

今までは次席政務官だったのですが、書官に降格されました。

理由は暗躍しすぎだからです。

ちとフリーダムに動きすぎたか、勝手に他勢力に交渉した為に、公孫贇ちゃんの不信を買ってしまった。

まあ、今までの功績に免じて追放ではなく降格で済みましたが……少し哀しいものが無くはないです。

なので、今現在は北平の城の中の会議室にて、会議の内容を記録しています。

「白蓮、涼西の馬家から先の董卓の乱のお礼が届いたよ！」

「鳩、ここでは真名はやめろって言っただろ。まあ、いいか……で、何が届いた？」

「金銀に馬が100頭ほどだよ。」

まあ、知略の面では猫が居るので大丈夫だと思います。

問題は公孫贇ちゃんですね。

幸か不幸か、公孫贇ちゃんは史実、原作よりも偉く成ってしまいました。

つまり、半端無く責任の大きい立場にいると言うのは、庶民凡人代表のヘタレ権現公孫贇にはかなり辛い立場でしょう。

しかもあの子はピンチにはトコトン弱いですからねえ。

袁紹さんが攻めてきたらどうなりますかね？

……まさかとは思いますが、コレを見越して公孫度は降伏した？

公孫贇が思いのほか力を着けてきた。

もしこのまま力をつけて領土を広げる場合……

流れは違えど同じ公孫一族。

とはいえ、背後に位置する自分達が邪魔になり、攻め込まれるのではないか？

ならば、排除するか取り込まれるか？

自分が降伏すれば幽州は、ほぼ公孫贇に降る。

そうなれば、最北の地とは言え漢中で最大の領地を拝する君主が誕



生ずる。

小生の尽力が有ったとは言え、善政で幽州を豊かにした事で有名な公孫贇ちゃんだ。

民は諸手を上げて新しい大公を歓迎するでしょう。

もちろん歓迎する者が居れば、面白く無い者も居るでしょうねえ。

その最もたる人物が袁紹さん。

自分のすぐ側に自分を抜いて偉くなった人が居るのですから、自尊心の大きいあの人には面白く無いでしょう。

さらに言うなら、曹操さんを警戒させてしまったかもしねませんね。

冥琳さん（この前の交渉のときに真名交換しました。）に袁紹さんと曹操さんが手を組む事は無いと断言しましたが、どうやらマズイ事に成りそうですね。

「北平城の警備に関しては、豊かに成ってきた弊害が、スリが増加しています。」

先の反董卓連合を省みても、同盟などが組まれるのは、巨大な敵に対して利害が一致した場合です。

今回の公孫贇ちゃんの立場は正にソレでしょう。

例え犬猿の仲といえ、不戦協定を結ぶ……いえ、不戦協定を結ばせるだけの脅威足り得るでしょう。

これは、未然に防いだはずの袁紹戦を覚悟しなければなりませんかねえ。

「今年度の収穫は豊作とはいかないものの、昨年度と比べると十分に……」

更に……公孫度……

小生が立てた仮説……

恐らくは全てが彼女の掌の上でしょうね。

公孫度……遼東……少し裏から仕掛けてみますかね？

**第三十四話 拠点フェイズ 李文智 公孫贊 その温度差（前書き）**

この作品はフィクションです。

実在の人物、団体とは一切の関係はありません。

なので、設定も独自の設定が登場します。

第三十四話 拠点フェイス 李文智 公孫贇 その温度差

幽州 北平城

執務室に公孫贇と、猫こと趙火が黙々と仕事をしている。

先程までの会議にて上げられた報告は何れも良い報告ばかりだった。

スリが増えているのには少し頭を悩ませたが、警備の数を増やすことで一応の対応にしておいた。

大量の書類に囲まれながら、自身の治める国について考える。

仕事は幽公になる前に比べると、10倍に増えた。

理由は簡単。

優秀な政務官である文智を、書官に降格してしまったからだ。

それまで文智が処理してきた仕事が、回り廻って自分に返ってきた。

因果応報と言えはそうだが、李文智と言う人物の優秀さを、嫌と言うほど実感できた。

それと同時に、公孫贇の中にはある思いが強くなっていった。

(やっぱり文智は……)

「白蓮」

物思いに耽っていた公孫贄は趙火の呼ぶ声に我にかえった。

「なんだ鳩？」

疲れているが、年下の小さな妹分を心配させまいと、精一杯の笑みで返事をする。

「あのさ……」

なのに、自分を呼んだ妹分は目を伏せて言い辛そうにしている。

「あの……文智さん、もう許してあげたら？」

趙火の口からでた幼馴染みの名前に、困った様に深く息を吐く。

「アレは彼奴の自業自得だ。私は警告したんだ。勝手な事はするなと……」

「でも、それは幽州の地の事……ううん、何よりも白蓮の事を思っ

て「黙れ！」……白蓮……」

強く発した否定の言葉に、妹分は哀しそうに自分の真名を呼ぶ。

まったく、自分は何時からこんな小さい人間に、なってしまったのだろうか？

何もかもをかなぐり捨てて、泣き言を言いたくなる。

そういえば、アイツが自分の隣に居た時は何時も泣き言をいっては、ヘタレ呼ばわりされていた。

でも、もう戻れない。

いや、戻ろうと思えば戻る。

自分が頭を下げ泣きつけば、文智は自分を許すだろう。

けど、戻ってはいけない。

そう決めた。

自分の想いのため、アイツのために。

自分は文智ほど頭は良くないし、性格も普通だ。

けど馬鹿では無いと自負している。

いや、馬鹿では居られなかった。

文智のために、アイツに言われた通り勉強した。

自分だって気付いている。

ズル賢いあの引きこもりの事だ。

袁紹、曹操をけしかけ、此方の背後を突く積もりだろう。

分かっている。

分かっているが故に、放置した。

過保護な幼馴染みの事だ、たぶんそろそろ……

《失礼します。》

そら来た

公孫贇は冷めた視線で執務室に入って来た文智を睨んだ。

「なんの用だ？」

《先の会議のまとめと報告書を提出に参りました。》

公孫贇はよくもまあココまで空々しい会話が出来るもんだと、自分

と文智を誉めたくなった。

実際に、この二人の会話を聞いている趙火は、哀しそうに二人を見ている。

「そうか、じゃあ此所に置いといてくれ。」

執務机に空間を作り指示をすると、其処に書類の束を置いた。

「ん、ご苦労だった。下がって良いぞ。」

そう言って追い払う様に手をふるが、文智は動かさず袂から新たな書類を取り出した。

《殿、実は見ていただきたい物が有りました。》

「ん？」

文智から書類を受け取り、中身を確認する。

( 流石は文智。よくもこれだけのモノを調べられたものだ。 )



「この買い付け表は？」

《遼東の物でございます。日付は5日前のものです。》

そう、文智が公孫贄に渡したのは買い物の一覧表だった。

公孫度の行動に不信を抱いた文智は、まず商人の情報網を使い、遼東に出入りしている商人に接触した。

その時に領内で資金が不正に使われてないか調べると、商人に公孫度がここ1ヶ月で買ったものの一覧表を作らせた。主に食料関係は細かく作らせた。

それが今公孫贄が持っている書類である。

「……干し肉、塩魚、漬物……特に塩と干物が多いな。なんだ？ 遼東の公孫度は冬籠りでもする気か？」

冗談めかして言ってみる。

《さあ？ 彼女の事ですから……冬は本当に熊と一緒に冬眠しているんですね。》

軽く振れば、軽く返してくれる何時もの空気。  
それを泣きそうに成りながら振り払う。

「遼東は海都市とは言え、農地も少なく山々が険しい。食料対策は必須だろう。」

どうでも良いと書類を机の上に放り投げる。

《本当に冬籠りなら良いのですがねえ……》

含みをもった笑いを浮かべ、文智は壁に掛けてある地図を見る。

《遼東は確かに豊かとは言えませんが、海産物が豊富ですし、塩も十分に取れます。》

「……それで？」

《なぜ、今さら塩を買う必要が有るのでしょうか？》

公孫贇は文智の言いたい事は理解はしている。  
その上でシラをきり、文智の次の言葉を待った。

《冬籠りにしては妙です。まるで、敵に対して籠城の準備をしているみたいではないですか。》

ここで、遼東という土地について考えてみる。

遼東は漢中の中でも、涼西と同じく最北に位置する。

海産物と塩を各地に輸出している土地だ。

また、朝鮮半島に面していたり、北には異民族からの侵攻が有ったりと、お世辞にも良い土地とは言い難い。

だが、攻めるとなると格段に難しい土地になっている。

理由は公孫度が居城

『襄平城』

である。

一見只の城にしか見えないが、実は漢の国境にそって建てられており、異民族や朝鮮に対して一面一面を晒している。

異民族がこの城を攻める場合晒されている一面だけを攻めるしか無く、兵を要所要所に配置するだけで鉄壁を誇る作りになっている。

また、この法則は国外だけでなく国内にも適応される。

とはいっても、内部から攻められる場合、陸海2面から攻められるが、いずれにしても背後を気にせず防御に徹せるのは、大きな強みである。

さて、話を文智が持ってきた報告書に持ってこよう。

戦に……特に籠城に必要なものと言えば、まず食料が挙げられるが、それ以上に大切な物が『水』と『塩』である。

激しく動く場合、これがないと食料云々以前の問題である。

現代においては実感が難しいだろうが、スポーツドリンクを誰もが一度は口にした事が有るだろう。

運動後や運動中にスポーツドリンクを飲むのは、汗によって失われたミネラルや水分を補給するためである。

これ等が不足していると、体温調整が上手く行かずに怪我や失神などをしてしまうし、最悪死に至る事もある。

少し大げさと思うかも知れないが、現代ならいざ知らず、昔はこれが実に深刻な問題であった。

故に、塩を買いだめるのは戦の準備の基本と言っても過言ではないのだ。

「仮に……公孫度が戦の準備をして、どこで戦うんだ？」

《シラをきららないでください。袁紹さんも、戦の準備を進めています。》

「つまり、幽州を裏切り袁紹に売ったと？」

《正確には、殿を……》

「……それで？」

公孫賛の冷静に視線を受け止め、文智は心の中で最後の覚悟を決める。

《遼西に至急兵を派遣すべきです。》

「正気か？」

幾分殺気のコもった目で文智を睨む。

冷たく接していても、幼馴染みである。

その意見は無下にはしてこなかったし、何だかんだ言っても公私を

はつきりとさせたただけであって、仲は悪くはなかった二人である。

この様に殺気を向けるなど、一度も無かった。

だが今回ばかりは事情がちがった。

確かに現在遼東は戦の準備を進めているかもしれない。

そう、『かもしれない』だ。

実際は、日持ちする食糧と塩を買っただけである。

公孫贇を裏切った訳ではなく、また裏切ったという証拠もない。

ただ買い物をしただけで、兵を動かされ警戒されれば、臣下として  
どう思うだろうか？

主従としての前提条件を疑われているのだ。

如何に腹黒臣下といえ、いい気はしないだろう。

しかも、此方はそれを声高に抗議されようなら、他の幽州太守の公  
孫贇に対する忠誠にも影響が出るかもしれない。

まだ安定しない公孫贇の立場では、それは絶対に避けたかった。

「無理言つな。今は内部に喧嘩を売っている余裕がないのは、算盤  
弾いていたお前が良く知っているだろう。」

(左遷したのは自分だけどね……)

と心の中で付け加えた。

「そんな時に遼西に兵を動かしたら、首都である北平の守りが儘ならない。何より、領内の太守に対して兵を動かすことは出来ない。」

《口実は有ります。

急増しているスリや暴漢に対する警備増強のために、臨時人員として兵を派遣すれば良いのです。》

要は、軍事の為でなく治安維持の為と大義名分を掲げて、兵を動かそうと言っているのである。

これならば、いい気はしなくても民のためであるため、文句は言えない。

《実際にあから様な敵対行動は取らなくても、相手……公孫度に攻めにくいと思わせれば良いのです。》

少しでも躊躇して、タイミングを外せば、挟撃の意味は無くなる。

そう言う意味でも、文智の策を実行すれば、公孫贇は背後を気にせず防御に専念できる。

だが、公孫贇は頭を振り文智の進言を却下した。

「それでも駄目だ。兵を動かせば、太守だけでなく領民に不安を与える。それに、五連砦が完成した今、南から攻めてきて後手回っても十分に対処できる。」

《本当にそうでしょうか？ 後手に回るよりも先手を取るに越した事は無いでしょう。》

「悪戯に立場を悪くしてまで、先手を取る必要が何処にある！」

《それ程までに、我々が背後を取られるのは危険なんですよ。》

二人の言い合いは徐々に熱を持ちはじめた。

公孫贇はいつの間にか立ち上がっており、執務机を挟んで文智に詰め寄っており。

文智は冷静であったが、その眉間には縦に皺が刻まれていた。

「何のために遼西の東に砦が存在すると思っている！」

《例え砦が堅牢でも、我が軍に二面防御を展開する、兵力も、人材もいませんよ。》

「華雄が居るだろう！」



《人の……将の力の質には攻と守が有りますので。華雄さんは攻の資質は有っても、守の資質は有りません。》

「なら、関靖でも単経でもいい。あいつ等なら十分だろう！」

《力量は確かですが、あの二人が居なくなれば誰が北平の守りを受け持つのですか？ 後手で処理人事を考えるくらいなら「もついい！」……殿？》

「もう良い、よく解った。」

《では？》

「お前は私の決定が……主人の考えが気に入らないのだな。」

《な……なに……を？》

何時もと違う暗い公孫贄の声に、狼狽する文智。

「だってそうだろう。事有る毎に私の決定を否定して、間違ってい

ると説教して！

ああそうだとも、優秀な李文智に競べたら私なんて凡人さ！  
だけどな、私にだって考えが有る！

幽大公なんて身分に成ってから嫌って言うほど考えたさ！  
それを……それを！」

おさなしみ  
公孫賛の叫びを聞いて文智は（マズイ！）と焦っていた。

（凡人代表ヘタレ権現なんて評したのは小生ですが、まさか此処まで追い詰められて居たなんて。この子のメンタルケアを怠った小生の責任ですね。いい気になって暗躍していた過去の自分を殴ってやりたい！ 大切な……好きな娘がこんなになっていたのに気付かなかったなんて！）

ここで我が儘を言って癪癪を起こしている公孫賛より、自分を責めるあたり実にこの男らしいと言えるが、果たしてその考えは正しいのだろうか？

それはさておき、文智が一体何を焦っているのかと言うと

（しかし、この考えはマズイ！ このままでは、この子は自分の周りにYESマンしか集めなく成ってしまう。そう成ったら、あの豊臣秀吉と同じ間違いを犯してしまう。）

《殿！ 落ち着いてください。小生は……》

「煩い！ だまれだまれだまれええええ！ お前は私が嫌いなんだろう！ 私が幽公なんかになったのが気に入らないんだ！」

《なっ……「ち、違う小生は……俺は白蓮の力に」

「黙れ蚩尤！」

そして、彼女は決別の言葉を口にした。

「お前はもう要らない、出ていけ！ お前を……李震を追放する！」

第三十五話 拠点フェイス 公孫贇 その慟哭

幽州 北平城

長い廊下を一人の女性が走っている。

長い黒髪が乱れるのも気にせず、急ぎ走る走る走る。

この走っている女性は公孫贇が首席政務官の田楷である。

彼女が事の報告を受けたのは今朝であり、メイクもバツチリ若作りして、さあ仕事だと机に座った途端、慌てて来た単経に聞いて飛び出してきた。

何時もはその頭上に首席政務官としての証である帽子をかぶっているのだが、走っていて何処かに落としたりらしい。

帽子の中にアップしてしまっている長い黒髪を、流したまま走る走る走る。

その少し年齢を感じるが、端正な顔立ちには苦渋に満ちていた。

（何故気付かなかった！ 予兆は有った筈だ。こんな事になる前に手を打てた筈だ、なのにどうして！？）

目的の場所までもう少し、息が苦しくても走る。

あの子の苦しみはこんなものではない！

（如何にギクシヤクしていても、あの二人なのだ、どんなに喧嘩をしようが、結局は元の鞘に戻ると思っていたのに。夫婦喧嘩は犬も喰わぬと静観せずに、説教の一つもするべきだった！）

どんなに自分を責めても気が収まらない。

だが、今は最愛の妹分の元に急がなければ。

と、執務室に向かって走る。

やがて、扉が見えて勢い良く開く。

「白蓮！」

と其所には

「ん？ 莎霧か、そんなに慌ててどうした？」

「あ……あなた……」

その姿を見た田楷は、言葉が出なかった。

いつも後ろでくっついている、彼女の性格を表すかのような赤く明るい髪は、所々が解れ色褪せていた。

泣いたのだろう、赤く腫らした目には隈が出来ており、白雪のような肌は何処かくすんでみえた。

「どうしたじゃないわよ。今日は仕事は良いから、アンタは早く休みなさい！」

急いで公孫釐から、書類を取り上げ、仕事を中断させる。

「何をするんだよ！ 今日中に決済しなきゃならない物が……」

そう言っつて書類に手を伸ばそうとするが、ピシヤリと田楷はその手を叩いた。

「んなもん、アタシ達がやっておくわよ！ アンタ、只でさえ普通の顔が酷い事になってるよ！」

「普通って言うな。」

自身の禁句に反射的に反論するが、それを見た田楷に深い溜め息吐

かせただけだった。

「アンタねえ、自分の状況解ってないわね。何時ものアンタなら、禁句を言われた瞬間もっと鋭いツツコミが飛んでるわよ。」

「……………」

田楷あはこの言葉に何一つ返せない公孫贛。

黙りこんでしまったあたり、自覚は有るらしい。

「とにかく、これはアタシがやっておくからね。」

書類一式と筆を取り上げ、床に置くと『バン!』と、手のひらで机を叩いた。

「んで、本題だよ。」

すっと目を細め、目線の位置が公孫贛と同じになるように、顔だけ詰め寄る。

「アンタ……………何で文智くん……………いえ、

『幽賢老師』を追放したの？」

『幽賢老師』と言う言葉も気にはなるが、公孫贇は文智の名前にビクリと反応した。

「家臣団の中には未だに信じられず混乱しているのも居るよ。」

責めるように発せられる田楷の言葉に、段々と憔悴した顔に張り付いた君主としての仮面が剥がれていく。

「仕方無いだろう。アイツは主人である私に、断りも無く軍を、将を、人を動かそうとした。只でさえ幽州軍は規律が緩みがちなのだ。ここで……」

公孫贇が何かを言う前に『バン！』と、田楷が机を叩き公孫贇の言葉を遮った。

「なんか……勘違いしてるようだね。アタシはね、幽公　公孫贇のご高承な言葉を聞きに来たんじゃ無いよ。  
白蓮ってヘタレで可愛い妹分の言葉を聞きに来たんだよ。」

一枚……また一枚……厚く、決して剥がれない様にと塗り固めた仮面が音を立てて剥がれていく。



「文智は主人である私を軽んじた！ このまま文智が力を持つと、我々は内部分裂を起こす！ だから、追放した！」

その言葉を聞いた田楷は額に怒りの青筋を立て、熊はおるか鬼ですら裸足で逃げ出すほどの眼光を放ち、その右手を一閃した。

「ふいお?!」

一閃された右手は正確に公孫贇の両頬をガシリと掴み、強制的に艶やかな唇をタコ唇にした。

「にゃ……にゃにゅをしゅりゅんしゃ！」

「お黙り！ このアタシに舐めた口きいてる生意気な口を剥がして、白蓮の口を引っ張り出してやる。」

田楷は残る左手でタコ唇に成っている公孫贇の口を……

万力のように掴んで引っ張った。

「フギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

響き渡る猫の様な悲鳴にて、北平城の猫が一斉に逃げ出したそうな

……

それはさておき、田楷によるお仕置きにより、タコ唇からタラコ唇にグレードアップした公孫贄は、息を荒くしつつも田楷に怒鳴った。

「にゃ……にゃにゅを……」  
「ほん！ 何をするんだよ！」

公孫贄の非難の声に、両手をその細い腰にあてて、ドシンと足音を立てて仁王立ちして一喝した。

「お黙り！ 他の家臣ならいざ知らず、アンタのオシメを変えた事もあるアタシにそんな言い分通用すると思ってるのかい？！」

オシメと言う言葉に顔を少し赤くしつつ

「そんなの関係ないだろう！ たかが5歳年上なだけで威張るな！」

「ほじ……」

公孫贇が反論したとたん、田楷の瞳にキラリと危険な光が宿った。

「言ったね？ その5歳しか変わらないアタシに4歳の時に、おねし  
『うわああああ！』をてつだった事が有ったわねえ。」

田楷の然り気無い暴露に、羞恥で真っ赤の公孫贇が声をあげる。

「なっ……なっ……なんて事大声で言うんだ！」

その公孫贇の表情を見た田楷は、愉悦の色と共に更に瞳の光を増した。

「たしか〜5歳の時に、文智くんとは『だあああああああ！』  
とかあ、同じく5歳の時に河でさ『ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiii  
いい！』をしてえ、文智くんにくち『やああああめええええ  
てええええええ！』れちやった時とかあ、あと、事故とはいえ、ぶ  
ん『ごめんなさあああああいいいい！』とかあ……うぶぶぶ  
ぶ〜ま〜だ〜ま〜だ〜あるわよおん。」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

精根尽きたといった感じで両手両膝をつき、頂垂れる公孫贇。

その様を見て仁王立ちし、その豊かな胸を張り大きく鼻息をフン！と鳴らす田楷。

「見たか！ お姉ちゃんは無敵なのだ！」

特定個人限定じゃん……

と密かにこのやり取りを覗いていた趙火が、心の中でツッコミを入れていた。

「さて、白蓮。何か言うことは？」

「申し訳ござっせんしたああああ！」

蛇に睨まれた白蓮は、その眼光に負け土下座していた。

「さあ、キリキリ話してもらっわよ。なんで文智くんを追放なんてしたの？」

その真剣な眼差しに、誤魔化しは効かないなと思い、執務机の下から一つの巻物を取り出した。

「これは？」

巻物を紐解き広げて内容を確認する。

そこにはこう書かれていた。

袁紹に戦の兆しあり。兵を集める事、数十二万。さらに増える模様。

「じゅ……十二万だと？」

自然と巻物を持つ手が震えた。

現在の幽州全域から兵を集めても、精々5万位が良いところである。

ここ北平でも、今現在動員できるのは精々2万5千位だろう。

この時点で既に5倍の兵力差。

「最終的には二十万まで膨れ上がるみたいだ。」

「に……にじゅう……まん……？」

4倍の……いや、下手すると8倍の兵力差に啞然とするしか無かった。

何か活路は無いかと必死に考えてみるが、絶望的な物量の差に頭は空回りするだけだった。

如何に五連砦が堅牢でも、敵の侵攻を遅らせる事は出来ても、敵に勝利するのは難しいだろう。

（駄目だ！　いくら考えても敗北しか浮かばない！）

諦めかけていたその時に、頭を過つたのはボンヤリとした笑顔だった。

そつだ、文智なら何か逆転の一手を打てるのでは？

そつ考えたが、やめた。

いくら幽賢老師と呼ばれる賢人でも限度がある。

戦略を見ずに戦術だけで勝利せよなど、かの孫子でさえ裸足で逃げ出すくらいの無理難題だ。

戦略にて大勢を決し、戦術にて詰めとするのが常道なのだ。

王のみで全ての駒を持った相手に勝てと言うもの。

こちらの敗北はあきらかだった。

そこで、田楷はハタと気付いた。

「白蓮、あんたまさか……逃がしたのかい？ 文智くんを……」

田楷の呆然とした言葉に、公孫贇は背を向け表情を見せまいと答え  
た。

「衢で、文智がなんて呼ばれているか……知ってるか？」

文智の幽賢老師以外の呼び名……

田楷はそれを思いだし、辛そくに眉をしかめた。

「幽公に過ぎたる宝刀」

それが文智のもう一つの二つ名だった。

「白蓮……あなた……」

その表情は見えなかったが、田楷には泣いているのだと分かった。

これ程までにこの子は自身の劣等感に苛まれていたのか。

今すぐ抱き締めてやりたい気持ちになったが、

（まだまだ、まだこの子は全ての事を吐き出していない。我慢しろ莎霧！）

公孫贇は更に言葉を続けたため静聴する。

「アイツはさ、こんな凡庸な主人に使えて良い様な奴じゃないんだよ。」

アイツは凄いヤツなんだ。だから、私の所でなく、もっとアイツを上手く使ってやれる、優秀な主人に……それこそ、曹操みたいな奴に使えていた方が良いんだ。

それに、もう直ぐ袁紹が攻めてくる。

二十万の大軍を引き連れてだ。

二十万だぞ？ 勝てるわけ無いだろう。」

その声は段々嗚咽が混じりはじめていた。

「分かってたさ。アイツは富や名声なんかのために、私に仕えてたんじゃないってさ。」

ただ……ただ私のために……ぐす……アイツのやること全てが……私のために……言うこと全てが私のために……ひぐ……嫌いなわけ無いじゃないか……嫌いになれるわけ無いじゃないか！

自分の為に全てを懸けてくれる……文智が嫌いなわけ……」



「白蓮、もういい。」

「だから……文智をこんな……こんな私の為に死なせるなんて……」

その言葉……いや、もはや慟哭と言っても良いだろう。

一人の女の愛故の泣き声は、田楷の強い抱擁によって止められた……いや、隠されただろうか？

その泣き顔を胸に抱き、抱き締めた両手で背中と頭を、ゆっくり撫でて落ち着かせる。

「もういい。もう分かったから。十分にアンタの気持ちは分かったから。」

静かに泣き声消す姐の抱擁のなか、白蓮は涙と共に小さく心の底から本心を溢していた。

「会いたいよお……文智に……会いたい……！」

**第三十六話 背後に動くモノ（前書き）**

昼飯中にストック投稿。

年内の更新はこれが最後になりそうです。

## 第三十六話 背後に動くモノ

幽州 遼東郡 襄平城

ここ襄平の太守である公孫度は変人で有名である。

なにがと言うと、誰もその姿を見たことが無いのである。

それは当然襄平城の廊下を、書簡片手に歩いている血縁の少女も例外ではない。

燃える様な赤い髪を後ろで三つ編みにして、一本にした髪型をしているこの少女の名前は公孫康 真名を紅蓮と言う。

歳は十四、五といった所だろうか、無駄な肉が極限まで付いていないアスリート型の身体を、軽鎧と両手の大きい……なんと言うて良いか……

一言で言うと、ロケットパンチだろうか……鉄製の手の形をした物を装備している。

彼女は太守 公孫度の妹であり、一軍を任されている將軍である。

そんな彼女は今ある扉の前に立っていた。

その木で出来た質素な扉には

『物置小屋』

と彫られており、その下に

『公孫度のへや』

と書かれている。

更に、その下には木の板がぶら下がっており、ソコには

『立ち入り禁止。入った者の命と精神の保証はしない！それでも入るといふキミには、勇者の称号と変態の二つ名をくれてやるう！』

と、書かれている。

そう、この物置小屋こそ太守公孫度のへやなのだ。

それだけでは無い。

公孫度はこの物置小屋に住み着いて、一度も外に出た事が無いのだ。

コレこそが変人と言われる所以である。

無論、産まれた時から物置小屋に籠っているわけではない。

はあ……と、一つため息を吐き、最後に姉に会った時はいつだったかを思い出してみる。

紅蓮と公孫度は10歳離れている。

その頃は、公孫度はちゃんと外で遊んでいたし、家族とも一緒に食卓をかこんだりもした。

彼女が物置小屋に引きこもる様になったのは、紅蓮5歳、公孫度15歳の時である。

両親が死に、公孫度が遼東を継いで太守になった頃だ。

その頃から小屋に引きこもり出てこなくなった。

(生きてるし、会話もできるけど……)

一心、生存は確認されている。

政務は勿論、食事も中で取っているし、洗濯物も毎朝扉の前に置いてある。

当然、食事は料理人が作ったもので、洗濯物も使用人が洗ったものだ。

扉の前に置いておくと、いつの間にか消えているのだ。

おそらく、その時だけ扉を開けて、補給物資を巢穴しゅうけつに持ち込むのだろう。

しかし、その瞬間まで見られた事が無いのだから、徹底している。

(はぁ……嘆いててもしかたない。先ずは仕事だ。)

「姉さん、紅蓮です。」

公孫康が扉の前で声をかけると、直ぐに中から返事が返ってきた。

「紅蓮ちゃん？」

中から返ってきたのは、儂げな声だった。

「おはようございます姉さん。」

「おはよう紅蓮ちゃん。」

物置小屋の扉越しで無ければ、微笑ましい姉妹の朝の一時なのだが

……

「姉さん、御変わり有りませんか？」

「うん、元気だよ。紅蓮ちゃんも元気？」

「はい。姉さんも元気そうで何よりです。」

「そうだ、昨日ね、流れ星が流れたんだよ。紅蓮ちゃんは見た？」

「流れ星ですか？ いえ、自分は昨日は早く寝てしまいましたので……」

「綺麗だったよ。ね、知ってる？ 流れ星が消えるまでに、3回願い事を言つと叶うんだって。慌ててお願いしちゃったよ。」

「そうですか、何を願われたので？」

「うん、老師と結婚できますようにって。うふふ、思わず必死になっちゃったよ」

「そうですか……」

老師ね……と、心の中で愚痴る。

幽賢 李老師

先日、公孫賛に降伏した時に遣わされた文官。

幽州で知らぬものが居ないほどの賢者。

そして、姉さんの思い人。

いつからだろうか、姉さんが老師の事を想うようになったのは。

たしか……董卓の乱が起きる直前に、受けた報告を聞いてからだろうか？

っと、そうだった報告報告

「姉さん、その老師の事で報告があります。」

「あら、なあに？」

「公孫贇が老師を追放しました。」

「まあ、何て事を……嗚呼、お可哀想に老師。故郷を逐われ今頃途方に暮れてお腹を空かしていらっしゃるかもしれないわあ。」

よよよ、と声をだして哀しみを表現する公孫度であったが、公孫康はよくやると内心で呆れていた。



（何が『よよよ』さ。自分がそう仕向けた癖に。）

と、公孫康はわざとらしい姉の態度に、ため息を吐いた。

さて、公孫度は一体何を公孫贄と文智に仕掛けたのか？

公孫度がやったのは、噂を流しただけである。  
その噂はこつである。

『幽賢老師は幽公 公孫伯珪には過ぎた宝剣である』

そう、公孫贄と田楷の会話を思い出して欲しい。

その時に出てきた文智の二つ名が

『幽公に過ぎた宝剣』

だった。

そう、この文智の二つ名は、公孫度が仕組んだ噂が基だったのだ。

「紅蓮ちゃん、直ぐに老師を見つけ出して、保護してさしあげて。」

「分かりました。」

一礼して、物置小屋から離れる公孫康。

動機はどうあれ、命令はもらった。ならば後は動くだけ。

公孫康は姉のため、歩み出す。

後に残された物置小屋。

その中から細く細く笑みを広げる公孫度。

そして、突然歌い出した。

「ららら〜可哀想な〜可哀想な〜公孫賛

ちよこつと噂を流しただけでえ

劣等感に泣いちゃった白蓮くん」

その声は所々音がアツチにいたり、コツチにいたり……お世辞  
さえ言えないほどの歌だった。

その笑みも、無邪気なのに何処と無く不気味な気配を潜めている様  
に見えた。

「宝剣すてたあ〜公孫賛      ざんねん！ざんねん！      老師もあきれ  
るざ〜んね〜んさあ      」

クスクスクスクスクスクスクスクスクス

鈴がいくつも鳴る様に小さい笑い声が反響する。

「ふふ……本当に残念な公孫賛。失うのよ……国も、地位も、財産も、故郷も、命も……そして、愛する人さえも……クスクスクス……」

クスクスクス

小さく薄暗い物置小屋に笑い声が響く。

「待ってて下さい老師。いま黒蓮が御側に参ります。」

薄暗く、影しか見えない小屋の中に薄く光がさした。

その薄光に照らされて、中に座っている公孫度を照らした。

その顔は……

白蓮と瓜二つだった。

第三十七話 花の冠（前書き）

入院する前に秘かに予約投稿。

38話は2月1日に投稿予定。

それまでに、退院出来るかな？

### 第三十七話 花の冠

草原を二人の子供が駆けている。

お互い笑顔で無邪気に世界の、命の、自然の、そして、お互いの素  
晴らしさに心の底から笑い駆ける。

一人は女の子。

赤い髪が美しい女の子。

一人は男の子。

黒い髪が光を反射して輝く男の子。  
目が細く、キツネみたいな印象の男の子。

二人は駆ける。緑が、花が咲き乱れる草原をその小さな足で駆ける。

疲れたのだろうか。

女の子が飛び込むように草原へダイブした。

かなりの勢いが有ったのだが、生い茂る緑の命がやさしく女の子を  
受け止めた。

やがて、男の子が追い付き、伏している女の子の隣に座った。

『伯珪は速いな。俺じゃ追い付けないや。』

息を整えながら、男の子が隣の女の子に声をかける。

それに反応し、顔だけムクリと起き上がると、女の子はニッ！と歯を見せて笑った。

『私が速いんじゃないよ。文智が遅いんだよ。』

『ははは、そうか？』

『はははじゃないよ。もっと体力つけないとダメだよ。』

口を尖らせながら、ゴロゴロと寝た状態で転げ回る。  
服が汚れるのもお構い無しだ。

『あゝあ……伯珪、それはダメだって前に言っただろう。』

男の子が眉をしかめて注意を促すが、女の子はお構い無しに笑いながら転げ回る。

『あははは、文智もやってみなよ。なかなか気持ちがいいよ。』

はあ……と、ため息を吐いた男の子は、転げ回る女の子の側に歩いていき、横に正座した。

『ほら伯珪、こっちにおいで。』

男の子が手招きすると、うん！と元気に返事をして、起き上がった女の子が、トテトテと駆け寄ってきた。

『ほら、座って。』

男の子がそれだけ言うと、コクリと一つ頷いて背を向けて胡座をかいた。

男の子は背を向けて座った女の子の、赤い髪の毛に優しく指を入れて

『あゝあゝ……こんなに草だらけにしちゃって……』

と、草を取り除き手櫛を入れ始めた。

少しくすぐったいのだろうか、男の子が髪を透く度に『ふひっ！』



と、肩をすくませ身を振る。

『動くなよ』

男の子が文句を言う。

『だって、くすぐつたいんだもん！』

静かに、時間が流れる。

草原に吹く風が、さわさわと草木を鳴らし、その中にポツンと存在する小さな二人を薫りで包む。

男の子は優しい目で、目の前の女の子の髪を透く。

女の子は気持ち良さそうに、されるがままにその美しい風景をその目に撮す。

静かな時間。

『よし、綺麗になった。ほら伯珪、次はまえだ。こっちを向いて。』

男の子が女の子に促すが、女の子は手元に集中して何かをやっており……

『伯珪？ 何をやっているんだ？』

『ん〜もう……ちょっと………できたあ！』

女の子が作っていたいた物は、草で編んだ小さな環だった。

『えへへ、草の冠だあ！ すごいだろう！』

その小さな手の中にある冠を見た男の子は、『ほう』と小さく感心をした。

歪ではあるが確り編まれており、ちょっとやさっとでは、ほどけそ  
うに無い物だった。

『うわ、凄いね伯珪。器用なんだね。』

『>>>>』

褒められて嬉しいのか、フニヤツと表情を崩して照れている女の子。

(ん〜しかし、草だけか……何て言うか、伯瑛らしいっちゃらしいけど……)

チラリと周りに目を走らせる。

『伯瑛、ちょっとその冠をかしてくれない?』

『いいけど、貸すだけだよ? あげないからね。』

『分かってるって』

そう言って冠を受け取った男の子は、周りの花を摘み始め、冠に編み込み始めた。

『じゃ〜ん! 草花の冠だあ!』

『おおお!』

男の子の手にした草の冠は花が咲き乱れ、自分が作ったものより更に輝きを放っていた。

女の子はそれをキラキラした目で見ている。

男の子は『はい』と、手にした冠を女の子の頭に載せてあげた。

『うん、とても似合っているよ伯珪。まるでお姫様みたいだ。』

『え？ そつ？ えへ……えへへ……』

女の子が照れてうつ向いた時、突風が吹き草花の冠を飛ばしてしま  
った。

『あつ』

女の子が気付いて冠を見た時、男の子の左手が冠を『ぱし』と、手  
に掴み

『はい』

と、女の子の頭に再び載せてあげた。

『あ……ありがとう』

女の子は顔を赤くし、うつ向きながらお礼を言った。

『風が出てきたね。雲も多くなってきたし、雨が降らない内に帰ろ。』

『……………うん』

帰ろうと男の子は手を差しのべるが、女の子は何処か納得していないようだ。

『どっしたの？ 遊び足りない？』

男の子が聞くと、うつんと首を振る女の子。

『もう一個……………文智の分が無いから……………』

『もう一個？ ああ、冠のこと？』

男の子が聞き返すと、コケリと頷く女の子。

『文智の分の冠が無いから……………』

その言葉に思わず男の子は優しい笑みを溢す。

『優しいな伯珪は……でも、今日は帰ろう。またいつでも作ってやるから。』

『ほんと？』

純粹なその視線に、男の子の笑みが深くなる。  
娘を見る父親の様に、温かく、優しく、女の子に約束をした。

『うん！ 約束してあげる。また花の冠を作ってあげる！』

その言葉を聞いた女の子は、まるで花が咲くように笑った。

『じゃあ、約束のために真名をあげる！ わたしはね、白蓮ってゆーんだよ。』

『いいの？』

『うん！』

『じゃあ、俺の真名は蚩尤だよ。白蓮、よろしくね。』

「っ!？」

そこで、白蓮は目を覚ました。

周りを見渡すとソコは峽にある草原では無く、何時も自分が仕事を  
している執務室だった。

どうやら、疲れて机に伏して寝ていたらしい。

少し腰の所に重さを感じる。

ずっと前屈みに伏していたので、凝り固まってしまったようだ。

「夢か……」

伸びをして、肩、背中、腰と伸ばして解していく。

「ずいぶん、懐かしい夢をみたな。6歳位の時だったかな？」

ポキリポキリと節々を鳴らしながら体を解していく。

「昔は楽しかったな。気軽に文智と一緒に居れたし、気楽に笑っ

てられた。」

と、目の前に積まれた書類を見る。

「でも、もう……」

自分がした事を振り返る。

後悔はしていない。文智を自分から解放するために、必要な事だった。

「花の冠か……」

確かに、文智はあの後何度も花の冠を一緒に作ってくれた。

それは今まで続き、自分の頭上に掲げられた花の冠も、大きくなり幽公と言う名の冠にまでなった。

でも、自分はちゃんと言った筈だ。

自分の分だけでなく、文智の冠も欲しいと。

なのに、あの男は自分は無視して、私の冠ばかり作っていた。

本当に……



「バカだな……文智も……私も……結局、告白は出来ずか。」

何度も言うが、後悔はしていない。

惜しむべくは、自分の想いを文智に<sup>バカ</sup>伝えられない事だけか。

本当にバカだと自嘲する。

今の世は群雄割拠の時代に突入した。

あの日、袁紹から送られて来た連合結成の為の書状を見た時から、予想していた事……

大將軍暗殺から始まった権力闘争。

董卓が討たれれば、暴力の時代がやってくる。

そんな時代に、自分の様な凡庸な人間は真っ先に狙われる。

現に、袁紹の剣は自分の首目掛けて放たれようとしている。

何度も足掻こうとしたが諦めた。

だから、せめて自分にできる責任は全うしなければ。

意思を確認し、席に着いて書類を処理しはじめる。

降伏するにしろ、逃げるにしろ、コレを処理しなければ困るのは民だ。

袁紹出陣まであと9日。

急がないと！

所変わってとある森の中。

「雪蓮聞いたか？」

「なにが？」

息を潜める兵士に混じって、準備に余念がない……と言うか、主にエネルギー（酒）補充に余念がない孫策に、周瑜が話しかけた。

「公孫贇が李震を追放したそうぞ。」

「へ〜」

気のない返事を返しながら、件の李震を思い出す。

「あ〜……冥琳と気の合っていたあの人が。」

ん？　じゃあ、あの時話していた同盟の話はどつなるの？」

「さあ？　まあ、李震の事だから。何かしらの事を仕掛けているだろう。それより……」

そこで一度言葉を切り、此から始まる戦いに気持ちを切り替え、表情を堅くした。

「先ずは自分達の事だ。袁術から独立しなければ、同盟云々を交渉する席にすら、つけないからな。」

「そつね。」

返事と共に、ぐいぐい……と酒瓶を煽る。

その行動に、呆れた表情で周瑜が質問した。

「今更だが……なぜ戦の前に酒盛りをしているの？」

「だって、今回先頭に立つのはワタシじゃ無くて蓮華だし。しかも、相手は油断しきった袁術だし。正直、素面じゃ殺つてられないのよね。」

そう言つて、またぐいいい……と酒瓶をあおる。  
さしもの周瑜も、目の前の拗ねた孫策に、深く、疲れた様に、大きなため息を吐くのであった。

「しかし、解らないでもない。まさか、李震がここまでするとはな。

」

独白し、辺りを見回す。

（資金に装備、食料と情報にまさか調略の為の資金と人員すら出すとは……）

派遣された人員はとても優秀で、既に袁術陣営の埋伏を成功させ、此方が攻め込むと同時に内部から反旗を翻す予定に成っている。正直孫策達はやる事が無い状態だ。

周瑜は同時になるほどと納得した。

（この状態で開戦すれば勝利までが全て予定調和になる。そう、董卓の乱と同じように！これが李震か……！）

背筋が寒気で震えた。

(十全をもつて準備とし、必勝をもつて策とし、詰みをもつて戦とするか……何とも恐ろしい程の用意周到な男だ。)

そこで、思わず考えてしまつ。

(もし、李震が我が陣営に居たらもつと早く……いや、この戦さえも……)

「やめておきなさい」

孫策の声で、深い思考の海から強引に引き上げられる。

その表情は酒が入っているとは思えないほど、真剣なものだった。

「今、李震をウチについて考えていたでしょう。やめておきなさい。」

手に持った酒瓶を脇に置き、真つ直ぐ周瑜を見つめるその目には鋭い光と共に、憂いに似た光が揺れていた。

「確かに李震は……え〜と……『幽公に過ぎた宝剣』か？」そう、それぞれ！確かに、李震つてのは名剣かもしれないけどね、あれは魔剣よ。しかも傾国の類いの魔剣よ。」

苦く吐き捨てる様に話す孫策。

周瑜は珍しそうに、その様子を見ていた。

「傾国の魔剣か……言い得て妙ね。しかし、雪蓮なら使いこなせるのでは？」

感心する周瑜の言葉に孫策は「無理！」と即答した。

「ワタシじゃ無理よ。アレを使いこなせるなら、よほど器でないとね。」

「雪蓮が無理なら、誰も使いこなせ無いじゃない。現に公孫贇は使いこなせているのだから……」

「それでも無理！ 公孫贇は使いこなせているのでは無くて、使われているだけ。アレを使いこなせるのは……そ〜ね……曹操に劉備、そして……」

そこで曹操は言葉を切り、此から攻める城を視界におさめた後、城に続く道をたどり、近づいてくる松明の群れを見た。

「蓮華だけよ。」

孫兵復活まであと数分

### 第三十八話 草の冠

白蓮が幼い頃の夢を視ていたその頃。

実は全く同じ夢をシンクロして、視ていた人物がいた。

我等が影の薄い主人公、李文智である。

寝台から上半身を起こした状態で、ボリボリと頭を搔きながら

「あゝ」

と、ダルそうな声を上げた。

「また……懐かしい夢を視ましたねえ。」

今気付いたが、彼には何時ものボンヤリとした気配が無かった。

覚えたくても覚えられない面長な狐顔や、少し藍色がかった襟に掛かるほどの黒髪。

そして、はつきりと存在を主張するバリトンの美しい声。

いつも稀薄な空気はどこにいったのか。

今では10人中10人が振り返る存在感に充ちていた。



「あの子は、草で冠を作るくせに、花を使うと言つ事をしませんでしたからねえ……」

布団から出て寝台に腰かける形になって、辺りを見回した。

少年時代に自分が使っていた部屋だ。

そうだったと昨日までの自分を振り返る。

( 追放されてしまったんですよねえ…… )

哀しい……と言つより、少し虚しい。

( ……てか、小生ってば……公孫贄ちゃんと真名を交換していたのですね。 )

それを忘れるのは、どうなのよと、更に落ち込んだ。

だが、嘆いていても仕方ないと、自室を後にした。

戸を開けて居間に出ると、母である李蒿が食事の支度をしていた。

「ん？ 起きたのかい。おはよう。」

「はい、おはようございます。」

母に挨拶を返し、食卓につく。

そこには、箸とお浸しが置いてあり、続いて母の手によって麦飯と焼き魚が置かれた。

質素であるが、久しぶりのオフクロの味が置いてあった。

「いただきます。」

「ん、食べ。」

糧となる命に感謝の言葉を捧げ、魚に箸をつける。

うん、美味いと舌鼓をうつ。

すると、文智は対面に座る母が料理を口にしていないのに気付いた。

「食べないのですか？」

「……落ち込んで、いないようだな。」

そう言い放つと、いただきますと食事を開始した。

「てつきり、白蓮から三行半みくだりはん叩き付けられて落ち込んでると思っただけだね。」

「三行半って……（と言うか、この時代の中国で三行半って習慣が存在していたのか？）」

まあ、恋姫の世界だしと深く考えるのをやめた。

「別に、恋人ではないのですから、三行半はおかしいでしょう。」

「そうか、まあ落ち込んで無ければ良い。しかし、声を出して会話しているのは、珍しいな。」

そう、文智は今、何時ものボンヤリとした話し声ではなく、キチンと声をだして会話している。

そのよく通る美声は、文智の丁寧な（どちらかと言うと慇懃無礼かもしれないが……）物腰と相まって、えもいえぬ気品を漂わせていた。

「……別にいいでしょう、小生の勝手です。」

拗ねた様に顔をそむけ、食事を続ける。  
李蒿は、その様子に思わず吹いた。

「ぶっ！」

「……何ですか。」

「くっくくく……いや、可愛いじゃないか。お前が外面を繕えないほど、動揺するとはね。」

「ほっといってください」

更に拗ねた様に、頬を膨らませ食事する文智。

普段の飄々とした態度からは想像出来ない程の、子供っぽい態度だった。

翌日

幽州 北平城にて重大な会議がおこなわれていた。  
田楷を初め、趙火、単経に閔靖、そして華雄など、主だった将や文官は全て会議室に呼ばれた。

華雄を除き全員顔色が蒼白になっている。

「今のが、我が方の置かれている現状だ。」

厳かに公孫贇が蒼くなっている面々に告げた。

「袁紹軍は、今現在で12万まで膨れ上がっていて、最終的には20万までになるだろう。」

「20万……だと？」

掠れる様に彼女……単経が、震えた声を出す。完全に圧倒的な戦力差に怯えているようだ。

「いったい、どれだけの金が有ればそんな人数集められるのよ……」

顔が完全に隠れる程の黒髪を垂らしながら、貞……ではなく、閔靖が呆れたと呟く。

他にも各々絶望の言葉を洩らしている。

「私は、致し方無しと降伏をするしかないと思っている。」

ざわ……ざわ……

公孫贇の宣言に、先程までの絶望とは違っただざわめきに、会議室が満たされる。

「勿論、私の独断に兵や民を巻き込むつもりは無い。

既に幽州各地に布礼を出して逃亡する者は平原か西涼、もしくは陳留で受け入れて貰えるよう手配した。

お前達も同じだ。

桃香……劉備や曹操の所に行くなら受け入れて貰えるように書状を用意した。

劉備は問題なく受け入れてくれるだろうし、曹操も私に借りが有るので拒む事はしないと思う。

もし出立するなら私を訪ねてくれ、書状を渡す。

ただ、あまり時間はないので4日以内に判断してくれ。

今日はそれだけだ。

解散してくれ、私は執務室に居る。」

そう言い放つと、公孫贇は逃げる様に会議室を後にした。

会議室にいた面々は俯き悲嘆に暮れていたが、唯一人逃げて行くように去っていく公孫贇の背中を冷静に見ている人物がいた。

華雄だ。

華雄は去っていく公孫贄をみて、先日北平を後にした主の言葉を思い出していた。

『済まないが俺の居ない間、公孫贄から目を離さないでくれ。』

予想が正しければ、5〜6日でバカな輩が出てくるはずだ。

守ってやってくれ。

頼む。』

その言葉を聞いた時の衝撃は、凄いの一言しか無かった。

『お前……普通に喋れたんだな。』

思わず出てしまった本音に、苦笑いをする狐目の優男を思いだし

「仕方ない、恩人の頼みだ。」

所詮拾われた命。

今更死地が2、3増えようが、大して変わらない。

なら、恩人の想い人を守るのも一興か……

決意を改め、公孫賛の後を追うべく席を立った。

袁紹出陣まであと8日

「しかし、文智の素顔は割り好みだったな……」



第三十八話 草の冠（後書き）

さて、ここから が分かりますが……

どっしょうかな？

迷っています。

次話投稿はまだ未定

第裏話 頑張れ白兔さん 中編

さて、公孫贇より追放という処分を受けた文智。

背後で糸を引く公孫度。

彼らのこれからの物語を語る前に、少し過去の話をしよう。

正直、聡い方なら文智が何を仕掛けたのか直ぐに露見してしまうだろう。

だが、あえて語らせていただく。

時は文智が董卓と会見するまで遡る。

洛陽のとある一室にてその会見が行われた。

記録には残らない李文智との会見である。

張遼將軍のとりなしによって実現したこの会見には、賈馮、張遼、華雄、李震、白兔にて行われた。

互いに緊張高まる中で、一人胃を押さえる人物。

白兔であった。

（私は何でこの場に居るのでしょうか？ ……てか、必要ないよね

?！ 私は会見に必要ないよね?!)

隠密がメインの白兎である。

記録には残らないとは言え、この様に堂々と偉い人の前に顔を晒すのは多大なストレスだった。

《さて、この度は会談に応じていただき……》

「前置きは結構。ぼく達は暇じゃないから単刀直入で用件を言っ

」

文智の言葉を遮り軍師の賈馱が先を促す。

《あらら、手厳しい。今この事態を引き起こした本人の台詞とは思えませんか。》

お返しとばかりに特大の毒をはく。

机の下で静かに張遼と華雄が得物に手をかけ殺気を放つ。

「まあまあまあ、喧嘩するためにここに居るのではないでしょう?」

双方に手のひらを向けて何とかなだめる白兎。

胃がいたいののに、頭痛まで加わってきた。

はあ……と一つ盛大にため息を吐いて、キッ！と文智を睨み付ける賈馱。

「それで？ 月を守るためって事だけど……」

《おやおや、名軍師賈馱が何の解決法も無いとは思えませんね。正直、建前を詰める気は無いですよ。》

「貴様ア！」

ふてぶてしい文智の態度に華雄がキレた。

傍らにある大斧を手に立ち上がろうとするが、文智が華雄の目を見て

《動かないで下さい。座ってください。》

と発すると、華雄は動きを止めストンと椅子に座った。

「な?! 何だこれは! う、動けん!」

華雄は力を入れて動くこうとしているのだろう。

顔を赤くして唸っているが、身動き一つできなくなっていました。

その様子を見て、賈馱はチラリと白兔の方を見る。

「ふうん……白ねえ。」

白兔の白装束を見て納得している。

「まあ、華雄はそのまま大人しくしてて。」

「そんなあ！」

放置された華雄に呆れたように張遼が声をかけた。

「なに涙目になつとんねん。そんなの懐刀ひとつで……あゝ、そういう事かい。華雄には見えへんのやな。」

「納得していないで助ける！」

ニヤニヤと動けない華雄をからかう張遼。

それを尻目に、話は進む。

《さて改めて、もう既にどうすべきか考えついてらっしゃるのでし  
よう？》

駆け引きもへったくれも有ったものではない。

関係なしと確信に踏み込んでくる文智。

「ええ、もう策は整っている。だから？ 用件はそれだけ？ な  
ら……」

賈馱が話すことは無しと、立ち上がるつもりだったが

《おや、董卓さんのご両親は良いので？》

文智の一言が止めた

「何の事？ あまりいい加減な事を言つと只じゃすまないよ。」

賈馱の視線がさらに鋭いものになる。

それに呼応するように、隣の張遼の殺気も高まる。  
白兔はぶつちやけ、今すぐ文智を殴ってジャンピングDOGGEZA  
をしたい気持ちにかられた。

(ヤバイ……ヤバイですって、この雰囲気は！)

しかし、そんな白兔の焦りをよそに文智は話を進めていく。

《いけませんねえ〜いけません。》

そんなあからさまな反応に対しては、肯定している様なモノです。》

そこで張遼の殺気が爆発した。

手に持った堰月刀が鋭く文智の首を跳ねた。

ひいひい！ と青くなりながら、

(何てモノを見せるんだこの人はああ！)

と心のなかで愚痴った。

首を跳ねた張遼も脂汗を流しながら文智を凝視していた。

確かに首を跳ねた

それは張遼も、賈馱も華雄も白兔も確かに見た。

しかし、目の前の文智は無傷で茶を啜っていた。

(なんや、なんやコレ?! 確かに手応えはあった。せやけど、何で……くっ!)

戸惑いながらも、今度は確実に殺すと堰月刀を振りかぶる。

《これ以上は勘弁してください。今度は逆に貴女が死にますよ?》

「なん……やと!」

今の張遼の言葉は感情によるモノではなく、驚愕によるものだった。

賈馱は張遼の視線を目で追うと、いつの間にか滲み出るように黒い影が張遼の横から円環状の刃、『坤』を首にあてていた。

賈馱はあり得ないと、驚愕した。

張遼程の武人が気配すら気付か無いなんて。

(異常だ……コイツら異常だ……!)

賈馱の体が自然と震え出す。



しかし侮るなかれ、軍師としての冷静な部分が文智の力を看破していた。

（あの男の力は色を見えなく……いや、色を強く感じさせて、特定の色を認識させづらくする事！

だから、華雄は自身を縛るものが見えないし、霞はすぐ側にいた黒ずくめの敵に気が付かなかった！）

そして改めて文智の顔を見た。

その顔はボヤツとしていて、特徴などを覚える事ができない。

（たぶん、白粉をしているんだ。服装が白と赤を基調とした文官衣だから存在を認識できるけど、覚える事ができない。）

そこまで考えて途端に目の前の男が恐ろしくなった。

先ほどの黒衣の敵は勘の良い張遼や華雄ですら認識出来なかった。

では、この男は？

神がかった勘……恋等はこの男に気付けるだろうが、他の兵士達は気付けるのか？

いや、無理だろう。

つまり、この男が入れない場所はない。

皇帝の寢室に誰にも気付かれず潜り込めるし、それこそ月の部屋にも……

明確に目の前の文智を敵と……命に代えても殺すべき敵と認識する前に、文智が先手を打ってきた。

「そこまで。」

相手に手札を見せないのは駆け引きの基本ですが、窮鼠に噛まれたくありません。」

文智がそう言うと、今までぼんやりとした顔がハッキリと認識できるようになった。

白粉の塗られた顔は、面長で細くつり上がった目が特徴だった。体形も細く白粉で真っ白な顔もあいつて病的な雰囲気醸し出していた。

美男子……というわけではないが、醜男という訳でも無い。

どう表現していいか微妙な容姿だった。

「敵ではない証として、手札をさらさせていただきました。これで小生の顔がハッキリと見えるはずです。」

これに仰天したのは白兔と張遼の横にいる迷子だった。

「文智さま、よろしいので？」

声は我々の最大の……いえ、正体が曝されるのは危険では？」

懸念を口にした白兔に同意するように、迷子も小さく頷く。

それに対し、相変わらず飄々と茶を啜る文智はどこ吹く風と肯定した。

「構いません。ここは下手に事を構えるより、誠実に行きましょう。さて、お掛けになったらどうですか張將軍？」

既に迷子は刃をおさめており、張遼は仕方無と頭を掻いて腰をおろした。

「九品がようやるわ。まあ、ええ……ここは詠に任せるわ……にしても華雄が静かやなってかゆううう？！」

張遼の視線の先にはブクブクと蒼い顔をして泡を噴いている華雄がいた。

「あらあ……強く絞めすぎましたかね？ あは、あはは……」

文智が「パンパン！」と手を叩くと、華雄の周りに潜んでいた白装束の白兔隊が、華雄を縛っていた白い縄をほどいた。

「なるほどなあ、あの白いのが華雄を縛ったんかい。縄は見えたけど、あいつらは全然見えへんかったわ。」

次々と曝される手札に相手を気絶させたのは不味いのでは？

不安がキリキリと白兔の胃を締め付ける。

「良いじゃない、静かで。」

「まあ、華雄やし……ええか！」

良いのかよ！

ここで声を出さずにツツコミをいれた白兔は、流石だと言えるだろう。

等と自画自賛はともかく、どうやら眼前の二人は、かなりおおらかな御人のようだ。

「さて、静かになった所で話を続けましょう。」

あなたもスルーなのですね……

心の中のツッコミはとどまる事を知らなかった。

文智は続ける。

曰く

事の始まりは大將軍何進の宦官の排除から始まる。

曰く、

宦官の復讐で大將軍殺害に逆上した袁紹が十常侍を皆殺しにした

曰く、

袁紹の肅清を生き残った十常侍が帝を連れ出し逃げ出した。

曰く、

逃げ出しさ迷う帝を、董卓が保護し洛陽に封ぜられた

曰く、

賈馱はコレを利用し、董卓の勢力拡大を狙うが、逆に董卓の両親を質にとられ傀儡になってしまった。

曰く、

嫉妬した袁紹が檄文を各有力者に送り、挙兵する動きが有ること。

曰く、

董卓に残された手段は、勝つか、董卓が死ぬか

「ですが、そこで董卓のご両親が足を引っ張る形になってしまった。  
「文智は浪々と謡うように董卓の現状を、口にした。

細部まで調べあげられた情報に、賈馱はぐうの音もでないのか、俯き唇を噛んで拳を震わせていた。

「そうよ……悔しいけど言う通りよ。ぼくが月の為に献策したのに結果、月を追い詰め命まで危険にさらすハメになってしまった。」

「……小生も主に仕えるこの身は軍師の端くれ……心中お察し致しますしょう。」

そして、だからこそ理解できてしまう。

貴女は董卓さんの地位も財も名前も……そして肉親すらも見捨てて逃がすおつもりでしたね。」

その時、どこかで小さく息をのむ音がした。

本当に幽かですかで誰も気付けないほど小さい音

しかし、職業柄か唯一 白兔だけが気付く事ができた。

小さくその事を文智に報告すると、珍しくハッキリと目を開き、苦虫を噛み潰したかのように顔を歪めた。

「失敗しましたね。予め全ての準備段取りを済ませて事にあたるせいか、突発的な事に弱く脇が甘くなってしまう……小生の悪い癖ですな。」

その場に居る誰もが疑問符を浮かべる。

「隠れてないで出てきて、その御尊顔を拝見させて頂けませんか？  
董仲穎殿。」

文智の言葉に誰もが驚きを顕にした。

部屋の戸が開き、そこから一人の少女が入ってきた。

「月！　なんで……」

驚きの声をあげる賈馱

その様子から察するに、どうやらこの場で自らの主君が聞き耳をたてていたのに、気付いてなかったらしい。

そして直ぐにその表情は悲しそうに歪み、董卓から顔を背けた。

当然だろう。

つい先ほど文智により、自らの非常な策を暴露されてしまったのだ。

今更どんな顔で敬愛する主君に会えば良いのか。

「詠ちゃん……その……わたし……」

「その男が言った事は本当だよ。」

「っ！」



「最悪、おじさんとおばさんを殺してでも月を逃がすつもりだった。」

その独白にはどれ程の悲痛な決意が込められていたのか。

真っ直ぐ董卓を見る賈馱の瞳には、冷たい軍師の意識だけが有った。

「どっして……」

「それが軍師として出した最善の策だから。」

この先、ぼくが死のうが霞が死のうが、月が生きていれば再起は可能だから。」

淡々と事実を述べていく賈馱。

端から見れば、ただ合理的に最善策を述べているだけだろう。

だが、文智の目には違う風に映った。

「わたしは、そんな事……望んでない……」

小さく、優しく、悲しく、賈馱に訴える董卓。

主君にそんな顔をさせる、賈馱の胸中を締め付ける想いはいかほどのものか。

表情を殺し、淡々と賈馱<sup>くんし</sup>は答える。

「月が望んでなくても、ぼく達が……兵達が……民が世界が時代が！……月の治世を「嘘ですね」っ！ 李震！」  
問答を続ける二人に文智は水を差した。

埒があかないというのも有るが、文智自身がそれ以上見ていられなかった。  
全くもって

「茶番ですね。」

「アンタに……アンタなんかは何がわかる！」

「解らないですね。というか、解るわけが無いです。貴女と会ったのは今日が初めてですよ？  
そんな人物の心情なんぞ理解できるありません。」

「なら、口を出さないで。これはぼく達の陣営の問題よ。」

それは当たり前前。

文智の言葉も当たり前前。

賈馱の反応も当たり前。

ただ違う部分がある。

それを指摘する為に文智は己の仮面を外した。

「甘えるなよ賈文和！ 貴様先ほど軍師としてと言ったな？ ふざけるな！

負ける献策をするのが軍師ではない！

主君の為に勝つ為の策を己が全てを使って捻り出すが軍師よ！  
負けを主君に具申する時点で貴様は軍師ではない！」

この言葉には白兔と迷子が驚きに目を見張った。

この二人は親や公孫贄を除けば文智とは一番付き合いが古い。

故に文智の性格も、地のしゃべり方も知っている。

それ以上にこの李文智と言う男のセコさ臆病さ慎重さ、そして鉄面皮を知っていた。

どんな場面でも目を細め、口許に笑みを絶やさなかった男が、顔に他者に対する怒りを顕にしている。

仮面を、いつもの丁寧なしゃべり方を、全てかなぐり捨てて目の前の少女を罵倒していた。

そして……

軍師ではない

その言葉に賈馱は怒りを顕にし、激情に駆られるまま叫んだ！

「違う！ 僕は軍師……月の為の軍師だ！」

「未熟！ 怒りに流されている時点で貴様は軍師失格よ！」

「黙れ！ アンタにほくの……ぼく達の……月の苦悩の何が解る！」

「先ほども言った通り、解るわけがなかつた！」

そこで文智は怒りの表情を和らげ

「でも、解る方が側に居るじゃないですか。そうでしょ？ 仲頼殿。」

先ほどとは違い、優しく諭す様に賈馱に語りかける文智。

言われて思わず横にいる儂げな少女に目を向ける。

「何が軍師としてですか、君は最初から賈文和と言う少女としてしか話してないでしょうに。」

逃げないで、怨まれる覚悟があるんだから足掻きなさい少女。」

「詠ちゃん……わたし解るよ。詠ちゃん、わたしの為に恨まれ役になつてくれたんだよね？」

「月、今回の……董卓討つべしという風潮は今現在も大きくなりつつあるの。」

もしかすると、ぼく達じゃ守りきれないかもしれないんだ。」

俯きながら、悔しそうに吐き捨てる賈馱

当然だろう、如何に洛陽が帝のおわす都市と言えど、各地から昇る董卓討つべしと言う小さなうねりは、集まれば洛陽すら飲み込む大きなうねりになる。

「恋や霞が……一応華雄も居るとはいえ、今度ばかりは無理かもしれない。だから、ぼくは月だけでも生きていてほしい……」

賈馱の言葉は最後まで続かなかつた。

その小さな体を、同じくらい小さな少女が抱き締めていたからだ。

「もう……いいよ。大丈夫、ありがと。」

「ゆ……え」

「でもね、わたしは嫌だよ……生きていても一人は……いやだよ」

「ゆえ……月……！」

「だから、頑張ろう……皆と一緒に、生き残ろう。わたしも頑張るから……！」

「……」

だれも、言葉を発する事が出来なかった。

この二人の尊き友情を、誰も邪魔する事が出来なかった。

（私達空気ですね、文智様）

（しゅ、今良いところなんですから静かに）

（あんたらナニやってんねん）

気絶している華雄以外の3人が部屋の角にある衝立に隠れ、顔の半

分だけを出して2人を見守っていた。

「……バカだなあ、本当にぼくは……バカなあ……」

その絞り出した反省の言葉は、ただ只涙に濡れていた。

第裏話 頑張れ白兔さん 中編（後書き）

何故にここにこの話を持ってきたと疑問に思われるでしょうが、次回後編はもろもろネタバレな話になりますので、ここに持ってきました。

ホントにいろいろスイマセン



第裏話 頑張れ白兔さん 後編(前書き)

油断した……

弟に恋姫とパワプロ持ってかれた……

やべ……続きかけるかな？

あ、あと警告。

詠さんキャラ崩壊注意です。

第裏話 頑張れ白兔さん 後編

「二人とも、落ち着きましたか？」

衝立から出てきた文智は、抱き合いながらわんわん泣いていた賈馱と董卓に声をかけた。

「ええ、世話をかけたわね。」

目を赤く泣き腫らしながら、吹っ切れた表情で答えた。

「いえいえ、お気になさらずに。」

そして、お初に御目にかかります仲穎殿。

姓を李 名を震 字を文智と申します。」

「へう!？」

いきなり話を振られて驚いたらしい。

ビクッ! と肩を震わして文智を見る董卓。

「は、はい。董仲穎です。よ、よろしくお願いします。」

えと……李震……さん……?……李?……」

おどおどと、躓きながら自己紹介をした董卓だが、文智の名を口にすると、考え込む様にうつむいた。

「仲穎殿？ 小生の名になにか？」

少し心配になった文智は、自分に何か失礼な事があつたかと動揺しながら、自身の行いを振り返る。

心当たりは無い。

とりあえず、何か声を掛けようかとした時、董卓は先ほどとは違う強い目で文智に問い掛けてきた。

「天の旗はまだ墜ちては無いですか？」

「っ！！！！」

董卓の言葉に文智の顔色が変わった。

ゴクリとカラカラの喉を唾を飲み込んで無理矢理潤す。

文智は今動揺しきっていて、表情、感情の制御が出来なかった。

「マジかよ……一本とられた。正直悔ってた。」

小さく、何時もの口調すら忘れて呟いた。

ふう……

大きく息を吐き出し、最低限表情だけは取り繕う。

「驚きました、まさか小生の出自を言い当てられるとは……」

反応してしまったからには、文智に出来るのは肯定する事のみ。

その文智の反応に、花が咲く様に笑顔になる董卓。

題をつけるなら、

『イタズラ成功』

だろうか？

とは言っても、嫌らしい笑みではなく、とても愛らしい笑みだった。

「やはり、趙李一族の方だったのですね。今代の大天は貴方ですか？」

「いえいえ、大天だなんて恐れ多い。」

しがない一族の末弟でございます。  
にしても、よくお分かりになりましたね」

文智が問いかけると、スツと文智の首に飾ってある羽飾りを指差した。

「趙李一族は、首に白羽の飾りをつけていると聞いたので……カマをかけてみました。」

「こりゃまあなんと……完敗です。」

そう、普段なら認識を阻害させる暗示や、賈馱の仮説の様に色の認識をずらすなどしているのだが、今は全て解除している。

つまりは、能力に頼りきって出自を示すものを身に付けていた、文智の油断である。

また一つ自身の失敗に後ろ頭を掻いて誤魔化すしかなかったのだが

……

「ふふ……一本いただきました。」

董卓は先ほどの文智の素の眩きを聴いていたらしい。  
完全に文智はKOされた。

両手両膝をついて頂垂れる文智をよそに、賈馱が董卓に問い掛けてきた。

「月、趙李一族ってなに？ 李震のこと知ってるようだったけど。」

「趙李一族は高名な軍師を祖とする、知の一族で……えと、ごめんね、これ以上は帝か本人の了解無しには話せないの。」

困ったように眉を歪める董卓。

その仕草一つ一つが保護欲をかき立てるのは生来のカリスマ故か？ 等と考えつつ、文智は何とか立ち上がり、つつい董卓の頭を撫でてしまった。

「……………へう」

文智が頭を撫でると、たちまち熟れたトマトの様に真っ赤になって俯く董卓。

ナニコノカワイイイキモノハ、オモチカエリイィ「したらダメだからね」

文智の目に怪しい光がともった瞬間、賈馱からツツコミが入った。

「何の事でしよう？」

「アンタ目がヤバくなってたよ。しかも心の声だだもれ……気持ちは解るけど（ボン）」

「おや、こりゃ失礼」

因みにこのやり取りの間も、文智は董卓を撫で続けており

「……………へう」

更に消え入りそうな声で、羞恥に服の裾を握りながら、更に真っ赤になってうつつむた。

それを見た駄目人間二人は

「「うはあぁ！」」

吐血した。

「こっ……これは、脳髓を横から殴りつけるかのような！  
何という破壊力！  
これが董仲穎か！」

「なんてこと、ただ赤面するだけでここまで愛が溢れ出てくるとは  
！」

ふと、文智と賈馱の目が合う。

「ふっ……ここで萌え死ぬなら逆に本望！」

「萌えが止まらない……けど、月の為なら溢れ出る愛もまた良し！」

ガシィィィ！

と互いの手を勢い良く組む。

「「我が萌え生に一片の悔い無し！」」



ここによく分からない友情が誕生した。

「つか、全然話が進まないのですが。」

そしてこの男、白兔のツッコミも、よく分からない流れに力無く入るのだった。

「ZZZZZZ」

「張遼將軍、現実逃避して寝ないでください。てか、貴女もツッコミに参加してくださいよ。」

「無理や、ウチはボケやもん。」

「ナニコノカオス」

白兔の咳きは、淡く空気に溶けていくのであった。

ちなみに迷子は既に退避して居なかった。

閑話休題

「さて、本題に入りましょうか。」

「そうね、李震の口ぶりだと、ぼく達の策は全て理解していると考えて良いのね？」

先ほどの錯乱は何処吹く風と、素知らぬ様子で話を再開する二人。

正直、張遼は我関せずと狸寝入りを決め込んでいて、事の推移を視ていた白兔は、部下から胃薬をもらって健気にも文智の隣に控えていた。

ちなみに、華雄はまだ気絶したままである。

「まあ、策と言ってもこんな戦を仕掛けられた時点で詰んでいるけどね。」

苦々と呟く賈馱に同意するように頷く文智。

実際、既に檄文は飛んでおり、諸侯は戦の準備を進めている。

反董卓連合に参加不参加を問わずにだ。

何故なら董卓を逆賊として討てば、その旨味は計りしれない。

落陽を落とせば領地を拡大できるし、小さい地に封ぜられている者なら、洛陽に居を移すことができる。

そして何よりいまだ幼い皇帝がいる。

事実がどうであれ、逆賊から皇帝を救出し漢の丞相にでもなれば、その権力は言うまでも無いだろう。

そう、董卓が善政をしいていようが、勝てば官軍なのだ勝てば。

この事に関し、袁紹は流石と言えるだろう。

何故か？

ここで重要になってくるのは、今回の反董卓連合に参加しない諸侯だ。

今の段階では、参加を表明しているのは袁紹含め、袁術、曹操、馬騰が参加している。

これが明日になれば倍……いや、3倍に膨れ上がり、かなりの大所帯になるだろう。

因みに文智は、その中に公孫贄と劉備を参加させようと、既に手を回していたりする。

(今頃連合参加の準備をしているのでしょっね)

と、文智は主の事に思いを馳せているが、実は北の騎馬民族との戦いの準備をして後日出陣。

会見から帰ってきた文智がそれを知り、慌てて増援と大量の食料を持って出陣したのはまた別のお話し。

話が逸れたので戻すでしょう。

それだけの諸侯が連合に参加すれば、どうなるか。

塵も積もれば山になるモノである。

個々の戦力が少なくても、集まれば洛陽にいる100万の兵に匹敵すると、文智と賈馱はみていた。

其だけの大軍が攻めてくれば、如何に堅牢に作られた洛陽の地と言えど、無事では済まないだろう。

さて、ここで先ほど重要にした連合に参加しない諸侯が出てくる。

戦にて、最も効率の良い勝ち方は何か？

それは、鳶が油揚げをかつさらう事である。

…………… 例えが悪いか。

つまりは、第一勢力と第二勢力が戦い、その疲弊した勝者を無傷な第三勢力が叩くと言う図式である。

つまり、董卓軍はたとえこの戦に勝利したとしても、疲弊した所に力を蓄えていた他の軍に波状攻撃を受けるはめになるのだ。

更に言うなら、董卓が勝利した後、董卓を暗殺しても其を袁紹のせ

い  
に  
で  
き  
る。

戦に勝てなかったので、董卓を暗殺したのだろう！　なんと卑劣な！

と言って暗殺を仕組んだヤツは声高に叫ぶのである。

何とも袁紹と言う馬鹿そんざいは恐ろしいモノである。

自分にリスクが大きい行動を、簡単に実行に移すことができるからだ。

袁紹をよく知る公孫贇から話を聞いていた文智は、反董卓連合結成をそこまで深く考えての行動では無いと確信していた。

おそらく天性の嗅覚で、相手がもっとも嫌がる事をただ実行しただけなのだろう。

後先は考えてはいないはずだ。

でなければ、デメリットが大きすぎる。

もしも、袁紹に良い軍師がおり、その軍師を重宝していたら状況が違っていただろう。

仮に文智が袁紹の軍師だったらどうしただろうか？

（小生なら檄文など飛ばさず、袁術をけしかけますかね。

偽りの服従にて袁術に檄文を発させ、裏で孫策と繋がります。連合結成では袁術を上手く誘導して盟主にし、袁紹、孫策両軍以外に出血を強いさせて、最終的に董卓を暗殺し全ての罪を袁術に擦り付け、内側から孫策と共に袁術を討ちますね。まあ、小生にはこれが精一杯ですかね。荀イクさんなら、他にも良い策を思いつくやもしれませんが……)

詮の無い事ですがと小さく首を振り、先ほどの賈馱の問いに答えた。

「今の現状、希望の無い選択肢を迫られていますからね。勝ちが無いなら負けるしか無い。」

もし、形振りなまわずなら、袁紹を暗殺するしかないですが……」

「状況の見てない馬鹿からの制約があるから無理ね。」

賈馱の返しにやはりと小さく返す文智。

この賈馱の言った状況の見てない馬鹿とは、十常侍の生き残りの張讓と段珪である。

我々の知る正史では、この時既に死んでいる二人ではあるが、この歴史では生きて董卓の両親を質にとり、傀儡にした元凶である。

しかしこの二人、董卓を傀儡にした後、何もせずグータラと宴を開いては、只々酒を飲む毎日………なのだが、白兔の調べによると

この二人、董卓達が何か企んだり行動を起こそうとすると、人質を盾にそれらを潰しに来るそうなのだ。

かといって、内政や軍備や皇帝の教育等に口を挟む事はないので、賈馱を始めとする軍師衆は只々首を捻るそうだ。

「ふむう……」

報告では聞いていましたが、この二人……どっから情報を得ているのでしょうかねえ？

いくら一品の宦官とはいえ、軍部の最高機密をおいそれと得る事などできないと思うのですが。」

「そんなのボク達が聞きたいよ。」

悩みの種の一つなのだろう。

右手の指先を眉間に当てて嘆息する賈馱。

その苦勞がつかがえる。

文智はそんな賈馱を横目に、隣にいる白兔に目配せする。

(どう思いますか?)

その様なアイコンタクトに、悩むかの様に顎に手を当てて頷く。



(確証は有りませんが、標的かと)

やはり

文智は手を振り、白兔に周囲の警戒を強化させると賈馱に質問した。

「すみませんが、一つ聞いても良いでしょうか？」

「ん？ なに？」

「ありがとうございます。洛陽周辺で小生の隣にいる白兔の様に、白の装束を纏った人物を見かけたりしませんでしたか？」

「白い装束……そいつが黒幕？」

少し殺気立ちながら、文智を睨む賈馱。

対して文智は驚き半分おどけ半分で賈馱に返す。

「おや、白装束と言う事で小生達を疑わないのですか？」

「アンタが黒幕やるくらいなら、始めから月を暗殺した方がマシで

しょう。」

「おや、誠実というのは大事ですね。

そうですねえ、暗殺したどさくさで玉璽を奪うのが一番美味しいですからね。」

「どの口で誠実なんて使ってるのさ。

まあ、既に表舞台にいるアンタは除外。

で、その白装束が黒幕なの？」

先ほどより殺気が増した気がする。

今まで行動を制限してきた元凶なのだ。

張讓に情報を渡して妨害し、今の状況を作ったと言っても過言ではない。

そもそも、優秀な軍師であり政治家でもある賈馱を抱える董卓が、孤立無援になること事態がおかしいのだ。

もしも賈馱がその辣腕を振るえたのであれば、味方になりそうな諸侯（劉備や馬騰、劉焉など）を皇帝の威光を使い取り込むなど造作もない筈だ。

なのにソレをしなかった。

これは明らかに妨害があり、賈馱が自由に動けなかったことを示している。

実際に文智は賈馱と会ってみて、光明を前に何もしない暗愚とは思えなかった。

真に不屈の理念や決意のある人物というのは、結構生き汚いモノである。

そんな人物が何も出来ずに、ただ指をくわえて見ている事を強要されたのである。

その恨み辛みはいかほどのモノか……

その険の籠った目線を前に、冷や汗をかきつつ

「確証は有りませんが、おそらくは……」

と答えるので精一杯だった。

文智の受け答えを元に、記憶の綱を辿ってみる。

全身白装束なのだ。

一度見たら忘れる事の方が難しいと思うが、

「……ゴメン、見たことない。」

「そうですね……」

「あつ……!!」

そこで賈馱は、あることを思い出した。

張讓の屋敷の門番に酒瓶を渡している二人。

黒を基調に白をあしらった導師服の少年と

同じ様な服の何故か吐き気を催した眼鏡をかけた青年を

直ぐ様文智にその事を伝えたと

「迷子!」

「是」

無数の黒い何かが四方に飛んでいった?

状況を理解できない賈馱と董卓は、ただ目を白黒させていた。

「な……なに?」

「すいませんが、この事は小生に一任していただけませんか?」

真っ直ぐ賈馱を見つめる。  
賈馱も負けじと睨み返す。

先に折れたのは……

賈馱だった。

ため息を一つ吐き

「わかったわよ。

その代わり、必ず捕まえて、とっちめてよ!」

「ええ、必ずや。

さて、時間もおしているので本題に戻りましょう。

基本的に賈文和殿の策にそって、仲頼殿には死んでもらいます。」

「ひっ!」

死んでもらいますの部分で、董卓が小さく悲鳴を上げる。

「よしよし、怯えないの。本当に死んでもらう訳じゃないから。」

怯える董卓を優しくあやす賈馮。

文智は、その微笑ましい絵を見ながら、脅かさない様に優しく説明をはじめた。

「ご安心下さい。

実際には、影武者を使います。影武者も、生きている人を使うつもりは無いので、ご安心を。」

「え……じゃあ、死体……ですか？」

どうやら死体を使うのにも抵抗が有るらしい。少し非難気な視線を文智に返してきている。

「いえいえ、カラクリを使います。

実は、部下に精巧なカラクリを作れるのが居まして、本物と遜色無いを作れますので、ソレを使います。」

文智の説明に、ようやく安堵の息を吐き出す董卓。

しかし、実はこの説明は……

嘘だ

予定では、董卓に背格好の似た少女に、犠牲になってもらう事にな

っている。

既にその少女は用意されており、来るべき日まで何不自由なく暮らしているはずだ。

賈駆はソレを解っている。だから、コチヲを見ないで董卓を安心させている。

それに、薄々と董卓も気づいてはいるのだろう。安堵してても、顔の青さは消えていない。

正直に言えば、目の前の少女は反対するだろう。

だが、文智にとってはこの『董仲穎という名前だった月』という少女が生存している事が最大の重要事項である。

この少女の生存は後々、文智に、公孫賛に、幽州に必要なになってくる。

故に、確実に……見破られる危険のあるカラクリではなく、確実に。

「ご両親に關しましては、この白兎にお任せください。

既に目処はつけてあります。」

「目処って？」

「其は秘密です。」

張譲に關しましては、調査が済み次第消します。  
老害にはさつさと退場してもらいましょう。」

冷笑浮かべる文智。

それに同意するように鼻をならして

「そうね、下手に月に関して知っているのを残すのは危険だしね。」

全面的に同意するわと、言葉を返した。

「連合には？」

「小生が参加しますので、内外から誘導して踊ってもらいましょう。」

「ふうん……詳しく詰める必要があるね。」

クツクツクツと黒い笑みを浮かべ、あーでないこーでないと話し合  
う二人。

タイトルは『お代官様』だろうか？

「ああ、そうでした。お願いが二つあるのですが。」



「なに？ 必要なら何でも言うて。」

「ありがとうございます。でわ、口裏合わせに皇帝陛下に、お目通りを秘密裡にお願いしたいのですが。」

「……それが対価？」

「はい、そしてもう一つ。」

賈馱の横で未だ気絶している華雄をみて

「華雄さんを下さい。」

「いいよ、持って行って。」

( 即答?! )

トントン拍子に本人を無視して進んでいく、華雄の未来。

「悩まないのですか？」

「今更でしょ。それに、全ては月やおじさん達を無事に救出するって前提があるし。」

そうですねえと、顎に手をやりつつあいづちをうつ。

そのためにもと前置きをして、気絶している華雄の横の移動する。遅しくも、女性らしい丸みをおびた艶やかな肩に手を置き

「華雄さん魔改造しません？」

その場にいた全員が

「は？」

と首を傾げた。

会見が終わり洛陽の宿にて、文智は迷子の報告を受けていた。

「張讓の酒はいかがでしたか？」

文智の問いかけに、迷子はその顔を隠している覆面をとった。

こぼれるのは輝く金髪。

この世界では珍しくないが、その目が蒼く、その顔立ちが彫りの深いコーカソイド系の顔ならどうだろうか。

この世界でも珍ずらしがられるのは間違いない。

「とんでもない高級品だったよ。しかも、サイコーに気持ち良くなれる最高級品さ。」

何時もとは違う流暢な喋り方。

しかも、言語は中国語ではなく、日本語だった。

「おやまあ、お薬入りでしたか。」

おどけながら、茶を勧める。

それを受け取り、見事な作法ですする迷子。

その様は違和感がなく、コーカソイドなのに日本人に見える。

「ズズ……はあ、いやはや、アタシでもアレほどのは初めて見たよ。Kg10億は行くんじゃないかい？」

随分と詳しいものである。

そんな迷子に少し睨みながら、文智は問いた。

「麗さん、まさかとは思いますが……」

文智の問いかけを、最後までさせずに、見損なうなと反論した。

「なめないでほしいねえ、坊や。

確かにアタシはスジモンさ、世間様には顔向け出来ないようなシノギは星の数ほどやってきたけどね、間違ってもジャブにゃあ手出しはしなかったよ。

カタギが居ての極道だからねえ。」

そう反論すると、

「酒が欲しいねえ」

と茶をすする迷子。

文智は顔をひきつらせて

「そ、そうですね」

と返すので精一杯だった。

「にしても麻薬で操っていたとは……」

不可解な行動にも納得がいきます。

と推理を開始しようとしたら、迷子が「そうだったと」報告し始めた。

「その酒に入っていたの何だけどね、この時代じゃ作り出せない純度だったんだよね。」

「と、言つと？」

思わず身を乗り出してしまつ。

「おそらくは、アタシ達の……2000年代のヤツだね。」

ピンコロ！ と指をならす。

「間違いなくターゲットだけど、どうすんのさ？」

「いえ、ここはまだ泳がせます。存在を確認できただけで重畳としましょう。」

（もし小生の推測が正しいなら、彼等には残酷かもしれませんがね。  
ね。  
出来れば、自分で気付いてほしいですねえ。）

第裏話 頑張れ白兔さん 後編（後書き）

なんか、誠にすいません。

完成すれば13000文字オーバーなんて風呂敷しきましたが、展開の関係性からいくらかカットしました。

白兔の話はまだまだ続きそうです。

今回は宣言通り遼東編に突入します。

### 第三十九話 劉協

それは月の無い夜だった。

「夜分に失礼致します。皇帝陛下におかれましては御機嫌麗しゅう……」

機嫌が麗しい？

そんな訳がない。

だが目の前の男は堂々と寝所に侵入し、そう宣のたまう。

曲者か？

いや、違う。

此処を今晚護っているのは恋……あの呂布だ。

この男がどんな魑魅魍魎の類いでも、呂布が気付かない訳がない。

つまり恋が黙認している、この男は月……董卓の手引きで此処に侵入したということだ。

「さて陛下、実は董卓さんの事で少々お願いしたいことが有ります……」

この時から劉協の献帝としての時間が動き出す。



洛陽 趙李家本家

玄関にて一人の老人が、豪華な着物の少女をひざまつきながら迎えていた。

平伏して迎える老人は趙李家の現当主である李易。

対する齡10になるかという少女は、時の皇帝である献帝その人であつた。

これは一体どういう状況か？

平伏す李易は冷や汗にまみれながら震えていた。

趙李家と皇帝との繋がりには、実に百数十年ぶりになる。

7代前の当主が大天となつて以来、そして後漢となつて以来初の来訪であつた。

「趙李易であるな？」

「はっ……ははあ！」

鈴が鳴るかのような、幼い声に頭を地面に付けて平伏する。  
本来ならそこまでする事は無いのだが、趙李一族は今は名だけの農民平民だ。

そして、如何に権威が落ちているとは言え、皇帝である。  
平民に対してその威光は今も大きい。

ましてや、その皇帝自ら平民……それも自家に訪問してきたとあれば、正しく青天の霹靂が如くだ。

「そう畏まらなくてもよい、朕の私用にて寄っただけじゃ。  
面を上げ楽にせよ。」

「ははあ！」

楽にせよと、平伏していた身を起こし膝立ちで礼をする。  
その際も拜手は崩さず、顔も上げず、その尊顔を直視しないよう注意する。

まあ、平民の李易にしてみれば、皇帝が私用で民家を護衛を付けず、  
独り訪ねるってのはどうなのよ？

と愚痴ると共に、皇帝はここまで蔑ろないがしにされているのかと、哀しみが胸を締め付けた。

（ここまでの威光と豪胆さ、そして風の噂だがとても聡明だと聞いている。それでも、王朝が衰退するを止められなんだか。）

おそらく監視は付いているだろう。  
しかし、それは護衛の為ではない。

それは献帝も分かっているだろう。

だからこそ、献帝は此処に来た。

鼯の最後っ屁

窮鼠の一咬み

今洛陽を治める曹操は、これから順調に大きくなり、この天下に覇  
唱えるだろう。

その時、自分はおそらくは……

そう考えた献帝はその瞳に決意の炎を宿した。

姉と慕った董卓や賈馱は無事生き延びた。

なら、この無能な皇帝にできる最後の足掻きをすると決意した。

それが今回の趙李一族への訪問。

自分を利用した李震を今度はこちらが利用する。

李震との取引で条件に出された一枚の勅命に、さらに一つ余計な物  
を付け加える。

李震の事だ、恐らく自分の足掻きすら利用し尽くすだろう。

それでも、あの嫌らしい笑みを苦渋に歪ませる事は出来るはずだ。

嫌がらせにしかならないが、それで十分。

コレを受けとれば裏方から表舞台に無理矢理引っ張り出せる。

あの男が嫌がる顔を直接見れないのが非常に残念だ。

「趙李易よ最初に問うが、お前は朕に……漢王朝に昔と変わらぬ忠誠を誓うことが出来るか？」

この身は明日にでも洛陽を離れ、曹操の膝元である許都に移されるだろう。

だから、ここに密かな楔を打ち込む。

「趙李一族が末弟趙李震を今第が大天に任ずる！」

遼西 河垣村

「女性の死体？」

古びた家の庭先に優雅に茶を楽しむ男が、目の前に跪く全身白装束の男に問い掛けた。

「はい、丁度半年前くらい……我々が洛陽にて暗躍していたころです  
ね。

此処より南西にある蟠桃河を流れてきたのを、近くの村人が発見したそうです。」

「そして埋葬しようとしたのを、通りすがりの道士が引き取って行ったですか……」

こういうご時世、賊に殺されるなど残念ながら、まだ珍しい事ではない。

特にその頃は文智の献策や、公孫贄の統治が行き届いていない頃だ。ヒト1人の死体が流れ着こうが、珍しいことではない。

だが、その流れ着いた死体を、通りがかった道士が引き取ったとなれば、話は別になる。

「身元が分からない死体を、なぜこれまた身元の分からない道士が引き取ったのでしょうかねえ」

茶碗の蓋をずらし、中の広がった茶葉を鑑賞しつつ緑の茶を一口ふくむ。

至高の一時を堪能し思わず「ほう」と息がもれる。

今更ながら、無職となり実家に絶賛ニート中なこの男は、何を暢気に高価な茶なぞ飲んでいるのか……

白兔は今すぐツッコミたい右腕を抑えつつ、報告を続けた。

「一応道士の足どりを追ってはみましたが、襄平に入った後は全く掴めず……」

「ふむふむ……襄平には入りましたか？」

「警戒が厳しく、普通に入るには偽造手形で無理でした。」

残念そうに語る白兔に、文智は おや？ と片眉をあげた。

「中に入れなかったのですか？」

戦闘などの荒事には向かないとはいえ、こと潜入捜査などは白兔の得意とする分野だ。

文智はその分野に関しては、かの周幼平に優るとも劣らぬ物と確信している。

その白兔をもってしても潜入できなかった？

「正面からではなく、搦め手からも入れなかったのですか？」

「それが……搦め手や城壁の隙間に僵尸符むしごひが張られていて……」

「僵尸符ねえ……………て、僵尸畏）  
キョンシートラップ（うううう?!）」

「と、とらつぶなるモノが何かは解りませんが、おそらくは其処ら  
かしこに僵尸キョンシーが配置されているかと……」

「なにそれこわい」

キョンシーとは、

中国に伝わる妖怪の一種で、死体が動いて人を驚かしたり、襲った  
りする所謂ゾンビみたいなモノである。

ただ、ゲームなどのゾンビと違うのは、生前の姿そのままで、腐る  
事なく、硬く死後硬直をおこしたままで跳ねるように移動する。

そして道士の札を額に貼ることで、コントロールできる。

ただ、コントロールを外れると人を襲い始めるので

「僵尸相手に無理を通すのはさすがに……」

すまなさそうに頭垂れる白兔を、文智は仕方がないとその判断を肯定した。

「下手にキヨンシーなんてモノを解放すれば、遼東が大混乱になりますよ。」

「にしても」と繋げ自分の記憶をたどるように、眉間を指先で叩きつつ考え込む。

「遼東に『跳屍送尸術』なんて使える人……居ましたっけ？」

「私の記憶にもありません。ましてや靈幻道士なんて……居れば噂にならない筈がないです。」

そりゃそうだ

下手をすればマジでパンデミックなホラー映画の世界にコンニチワしてしまう。

「仕方無いですね。」



ため息を一つ吐き、東を見据える

《一つ、小生が虎口に入ってみますかね》

溶けるかの様にその存在が曖昧になり、二人はその場から消えた。

後に残ったのは、冷えきってしまった茶碗のみ。

家の窓からその様子を見ていた李膏は、額に青筋を浮かべて

「後片付けぐらいしていけば息子」

第四十話 華雄と単経（前書き）

単経さん男性から女性に変えました。

わがみち はひんぬー教信者にごぜえます。

## 第四十話 華雄と単経

公孫贄の陣営の武将には、単経という武将がいる。

彼女がいつから公孫贄の元で仕えているのか、実は誰も知らない。

いつの間にか北平で仕事をしていて、いつの間にか訓練に参加していて、いつの間にか周りの和に溶け込んでいた。

寡黙でもなく、雄弁でもなく、普通でも、異常でもなく。

とにかく誰もが疑問に思う前に、周りから居るのが当たり前と認識されていた。

他勢力の間者では？ と疑われた事もあるが、彼女の庶民じみた気  
つ風の良さと、何者にも威張らず分け隔てなく接する人柄に、そんな噂もいつしか消えていた。

いつも、顔の上半分を豚の仮面（本人曰く猪八戒らしい）で隠しているが、その蒼い美しい短髪から相当な美女なのだと噂されている。

単経自身も気にしているまな板な胸を除けばだが……

さて、この当たり前にいる単経に疑問を持つ人物が一人いた。

華雄である。

新参者の華雄がなぜ単経に疑問を持つのか？

(単経……何処かで見たことがあるんだが、何処だったか……思い出せん。)

袁紹の事もあり、何かとバタつく城内を華雄はブラつきながら、記憶の扉を必至にノックしていた。

腕を胸の下で組み、右手を顎に当てて考え込む。

もとより、頭が良いわけではなく、記憶力も良い方ではないが、未熟を知った華雄は考える事を放棄する事をやめた。

文智の教えでは、何か引つかかるからには、答えは必ず自分の中に有るそうだ。

(どこだ？ 西涼に居た頃か？ いや……もつと前……月様に仕えた時……そう、まだ月様のお母君が生きてた頃に……)

「考え事か？」

「っ?!」

よほど深く耽っていたのだろう。

人が至近距離に来て気付かないとは、己の未熟に腹をたてつつも、

咄嗟に後ろに跳び距離をとる。

話し掛けてきたのは、件の単経本人だった。

「考え事、珍しいな。

でも、可愛いな華雄。」

可愛いな華雄

その言葉に、堅く閉ざされていた華雄の記憶の扉が、音を立ててあつさり開いた。

「あつ……お、思い出した。

お前は、いや、貴女様はか……！」

その名を口にしようとした華雄だが、素早く近付いてきた単経に手で口を塞がれてしまった。

「今は単経。その名はダメ。」

有無を言わさない単経のその迫力に、ただ頷くしかない華雄。

その様子を見て、ゆっくりと華雄の口から手を外した。

「生きていたのですね。貴女の死に月様も馬騰殿も泣いておられましたよ。」

「死にかけを拾われた。無理矢理生き返された。」

「なるほど、文智の神木の力ですか。」

しかし、生きていたなら何故出てきてくれなかったのですか！

貴女さえ居れば、洛陽は……月様は……陛下は！」

反董卓連合の事を思い出したのだろう。

爪が食い込み血が流れるほど、その手を握り締めている。

単経はまるで怯えるかの様に目を反らし

「すまない」

逃げる様に去っていった。

去り行く単経の背中を、怒るでもなく、悲しむでもなく、同情するように眺めていた。

「文智……何を考えている。」

文智

遼東 襄平城

コンコン

手にした玄翁で石の城壁を叩いていく。

なるほどと叩くのをやめ、城壁を見上げる。

隙間に差し込まれる様に、僵尸符が張られている。

よじ登ると、大抵そこに手をかけるから、符だが外れて壁からドーンと出てくるぞ。

城壁の中に空洞があり、そこを棺代わりに僵尸を収めているのですねえ。

よく考えたものです。しかし……

これは一朝一夕で出来るものではないですねえ……

つまり、少なくとも最近出来たのではなく、昔からこの僵尸界は存在したことになる。

ふむう……となると、件の道士も公孫度さんの関係者ですかね？

しかし、跳屍送尸術を公孫度が使えたなんて情報は有りませんし、周りの人間もそうでしたしね……

ますますもって謎です。

「文智様」

おや、白兔ご苦労様です。

アニメ忍者の様にシユタ！ と現れた白兔に労いの言葉をかけます。慣れないと心臓に悪いんですね、この登場のしかた。

それで、何か有りましたか？

「はい。どうやら公孫度陣営は幽賢老師……つまり文智様を探しているようです。」

見つけ次第保護して襄平に連れてくるように命じているそうです。」



おやおや、これはなんて好都合。

にしても、小生が追放をくらったのを、公孫度さんはご存知でしたか。

ん〜……白兔、公孫贇ちゃんは小生の追放を公にしていましたか？

「いえ、内々に処理していたはずですよ。」

成る程、となると予想通り獅子身中の虫がいるようですね。

よろしい、ならば

白兔、襄平に入りますよ。

「は！ ですが、どうやって入りますか？」

なーに言ってるんですか、正面から堂々と決まってるでしょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4034m/>

---

転生？外史？だから何！？

2011年12月11日17時46分発行